

付、右之時分到着の様尤い。委曲使可被演説し、恐々謹言。

二月朔日○萬治三年。

稻葉美濃守正則書判。

阿部豊後守忠秋書判。

松平伊豆守信綱書判。

酒井雅樂頭忠清書判。

松平陸奥守殿○伊達綱宗。

三月廿一日丙子○萬治三年。今度江戸小石川堀御普請ヲ命セラルニ因テ、御普請

總奉行ニ片倉小十郎景長、茂庭周防定元、并ニ後藤孫兵衛近康、真山刑部元輔、其外諸役人數多仰付ラル。

四月朔日乙酉○萬治三年。今度小石川御普請ニ就テ、御普請奉行永井彌右衛門○直元。殿喜多見五郎左衛門○重俊。殿城半左衛門○朝茂。殿本郷正三郎○長泰。殿各御

使番○表ヲ以テ、鶴一羽、鯉節二百、昆布廿把、各箱入、樽二荷贈進セラル。本郷正三郎○長泰。殿各御延引○御指合。石奉行中島孫兵衛○直盛。殿朝比奈彦右衛門○辰真。殿横山甚兵衛○吉正。殿

へ御使者○同上。ヲ以テ、各御給五、白鳥一箱、昆布一箱、樽一荷、御材木奉行永井清大夫殿美濃部與平次○與兵衛、藤次、茂明。殿武藤正五郎○安殿。各御給三、繩竹御奉行

多賀又左衛門○吉光。殿美濃部三郎左衛門○勝茂。殿萩原十助○重種。殿各御給三、

釘鉸御奉行木部藤左衛門○春直。殿竹田六郎左衛門○清政。殿各御給三、御扶持方奉行富永藤兵衛殿○彦兵衛、正寛、敏。羽田木工助殿勝屋次右衛門○成正。殿安海太郎右衛門殿、

布施八郎兵衛○直盛。殿糟屋八兵衛○房正。殿大岡宇右衛門○次直。殿川尻八郎右衛門○具鎮。殿佐橋三左衛門○景吉。殿中島吉左衛門殿飯田次郎右衛門○重正。殿加藤

孫右衛門殿へ各御給三、御普請ニ付屋敷ヲ借セラル衆十二人、中根日向殿、榊原大藏殿、大窪甚四郎殿へ各御給五、馬場十郎右衛門殿、武村九郎右衛門殿、武

藤正右衛門殿、夏目又左衛門殿、内藤加兵衛殿、岩瀬市兵衛殿、安部八之丞殿、竹本權右衛門殿、淺岡七兵衛殿、各御給三、御大工頭鈴木修理、木原内匠へ各御給

五、以上使者番組、御大工鈴木三郎左衛門へ黄金一枚、御給五、○小屋共。町棟梁大工與大夫次郎助、善五郎、吉右衛門ニ各銀子十枚、○小屋共。以上御使御徒組ヲ以テ遣

サル。

五月晦日甲申○萬治三年。今日吉日ニ因テ、御普請御鋏初アリ、卯上刻公吉祥寺御小屋場へ出サセラル。御普請奉行衆、右奉行衆ヲ饗セラルト云々。

伊達治家記録

六千二百人扶持

松平陸奥守

右今度御堀御普請被仰付_レ付_ル被_レ下_ル間、從御普請懸_レ日、同終日_ニ、永井彌右衛門、城半左衛門、本郷庄三郎、喜多見五郎、左衛門、以裏判手形被_レ渡、重_ク可有勘定_レ以上。

萬治三年午五月廿八日

豐 後印

伊 豆印

淺草御藏衆

竹橋餘筆

二月九日_年。○萬治三。元吉祥寺之下船入_ニ罷成_レ由_ニ。御堀普請、一昨日松平陸奥守被_レ仰付_レ。

曾我日記

同年_○萬治三。十日青牛込_方和泉橋迄舟入堀普請、松平陸奥守被_レ仰付。是依在國、以奉書被_レ傳之。

萬治日記_○柳營日記。

○萬治三年六月廿六日晴。

一、松平陸奥守御堀御普請場_ニ爲上使、以加藤平内、鮎鮪一桶被_レ下_レ之。
○萬治三年八月廿七日晴。

御老中退出以後、松平龜千代丸_村。○_細ニ被_レ仰付、牛込_方筋違橋_ニ、舟入御普請場へ、爲見分被_レ相越_レ。
○萬治三年九月十六日晴。

老中已刻退去、直ニ松平龜千代御普請場_ニ爲見分罷越。

萬治三錄_○萬治日記同。

五日_年。○萬治三。

今朝伊豆守_○松平。美濃守_○稻葉。松平龜千代普請場へ相越_レ。
_{與筋違より牛込迄。}

柳營日記_○萬治日記同。

廿九日_年。○萬治四。巳刻、神田橋より筋違橋へ爲御見分出御。松平龜千代ニ被_レ仰付、牛込より筋違橋迄舟入御普請出來之所々、上覽被_レ遊、於御普請場、伊達兵部少輔_○宗。田村右京亮_○宗。並龜千代家來共並居御目見、牛込御門通より御三人方明屋敷にて、御鷹匠頭志水權之介_○清水。小栗五左衛門_○政。白雁二執之、其後西丸へ入御。御先へ酒井雅樂頭_○清。

御供 松平伊豆守_○信。久世大和守_○廣。稻葉美濃守_○正。土屋但馬守_○直。數

御留守居 阿部豊後守内藤出雲守_○忠。堀田備中守_○正。御留守居衆。

市街恢弘時代

未刻還御。

四月十一日○萬治四年松平龜千代へ被仰付舟入御堀御普請出來付多、伊達兵部

少輔田村右京亮登營謁老中退去。並龜千代家來自銀、時服等被下。所謂。

銀百枚。裕十。

片倉小十郎

同百枚。裕六。

茂庭周防

同三十枚。裕五宛。

後藤孫兵衛

真山刑部○下略

二十八日○萬治四年四月松平龜千代へ被仰付舟入御普請出來二付多、彼地ニ相詰
以面々、

金五枚。裕三。羽折一宛。

永井彌右衛門 城半左衛門

北見五郎左衛門 本郷庄三郎

殿中日記

一、同月廿九日(家綱)公方様小石川御普請場御上覽被遊以段申來以付、須田茂右衛
門ヲ留主居大立目小左衛門處ニ遣申以寫
去ル廿九日四ツ時、公方様御普請場御上覽被遊、牛込御門ヲ還御被成置以、兵

部様右京様筋違橋ヲ牛込御門迄御供被成置以處、御兩所様ニ御懇之御説ニ
多、無殘所御首尾之由申來以。御普請奉行衆二十人計、并小十郎殿、周防殿御目
見被仰付、彌御首尾能由ニ御座以。乍憚御目出度儀と奉存以。小十郎殿ニ多
も、今二日御普請御仕舞、御屋敷へ御取移由ニ以。若涌谷ニ御家老衆迄貴様
カ被仰遣、義も難計と爲、御心得、乍早々爲御知、仕事以上。

(萬治四年)
卯月六日

須田茂右衛門

大立目小左衛門殿

伊達家文書○大日本史料所收

寛文元年丑年三月廿九日午之刻、小石川御普請場ニ公方様被爲成御上覽、兩
御後見伊達兵部大輔殿、伊達右京殿筋違橋ヨリ一町程御先ニ御案内、小石
川ニオキテ御目見被仰付、片倉小十郎茂庭周防、後藤孫兵衛、真山刑部、里見十
左衛門、但木三郎右衛門、秋保刑部、荒井九兵衛、郡山七左衛門、里見庄兵衛、境野
彌五右衛門、志茂十右衛門、大條次郎左衛門、喜多目彦右衛門、横田善兵衛、劍持
八太夫、上野三郎左衛門、小島加右衛門、右何ニ羽織立付刀脇指帶之、小石川本
吉祥寺屋敷前ニ一同ニ並居御目見、酒井雅樂頭殿御披露、此時御駕被相立之、
公方様景長、周防ニ被爲向、小十郎周防永々普請太儀ト有上意、其外何ニ小奉

行迄骨折仕由上意之旨、松平伊豆守殿被仰傳之畢、還御成給フ。

同四月二日右御普請奉行衆十九人御城江被爲召拜領物。

一、白銀百枚
御時服十御紋付

片倉小十郎

臺に於拜領頂戴畢、御坊主衆是ヲ引入也。

一、白銀百枚
御時服十御紋付

茂庭周防

廣蓋ニ於拜領頂戴畢、自身御玄關迄持參之。

一、同三十枚
御時服五宛

後藤孫兵衛

真山刑部

一、同貳十枚御時服四充殘十五人。

右之通千疊敷御廊下之間ニ於御老中御列座被成、段々被召出被下置之也。

——片倉代々記伊達騷動實錄收。

一、寛文元年御茶水堀割神田川出來、牛込御堀船入通路出來、松平龜千代殿御手傳御用相濟、右家來召被下物。

銀百枚。
裕十枚。
同三十枚。
時服五枚。

家老
片倉小十郎
番頭
後藤孫兵衛

同。
時服六枚。
同。

同。
茂庭周防
入用奉行
真山刑部

同。

物頭〇十左カ
里見忠左衛門

同。

物頭〇右カ
只木三郎左衛門

其外十三人用掛り、被下物右同斷。

——承寛襟録

萬治三年從嚴有院様德川家綱、武州江戸御堀御普請公伊達綱宗江被仰付、景長片倉、茂庭周防御普請大奉行相務之、自子〇萬治三年之二月到丑〇萬治四年之四月、御普請成就也。

一、此節御普請之儀、御覺書從公儀被相渡、其寫如左。

覺

一、牛込土橋迄船入様ニ御堀ホラセ可申事。

一、水道橋ヨリ假橋迄、堀ハバ水ノ上ニ八間タルヘキ事。

一、水道橋ヨリ牛込御門迄、土居ノ上置、ヒキ、所ニテ貳間、其外ハ土居之高下ニヨリ、築足可申事。

一、江戸川ヨリ小石川橋臺迄、御堀バタ五間之道、新規ニ付可申事。

一、牛込橋下龍口石垣ニツカセ可申事。

一、江戸川御堀江之落口、龍口石垣ニツカセ可申事。

一、崩橋ヨリ假橋土手築足可申事以上。

四月十一日○萬治三年

一、御普請致様從公義被仰渡御覺書之寫。

覺

一、今度被仰付ハ御普請之儀ニ付、ハカ行可申手廻シ、被寄存次第此方ハ可被申聞事。

一、土手ツキ立ハ所、土思ヒ合ヒハ様ニ、入念築セ可被申事。

一、御堀バタ水ギワ、所ニヨリシガラミヲカキ、御堀ハ土流シ不申ハ様ニ可被致事。

一、往還之障リニ罷成ハ所ハムザト土捨置ハハヌ様ニ、可被申付事。

一、二ヶ所之龍口御石垣、水道橋之橋臺、何ハ石面切り、大スダレ角石角脇平石共ニ胴摺合石組、カイ石ニ入念、石切レナキ様ニ築セ可被申事。

一、裏石所々ヨリ四尺五尺、本目クリ石ヲ三分一マゼ、胴込入念ツカセ可被申事。

一、人足朝ハ日出時分、晚ハ七ツ半退出ハ様ニ、可被申付事。
右之通入念可被申付ハ以上。

一、御老中御好之覺

一、水戸殿屋敷ヨリ落申水道、東ハウリ橋臺之方ハヨセ申事。

一、水戸殿向御門土手ノリ、ヂネンニ石垣ハ取付申事。

一、吉祥寺御堀土手、カネノリニ壹間ノマシ。

一、筋違橋柳原ハ取付申土手、筋違橋御門臺石垣之上、上バヨリ三ツ目之石迄高サ之事。

一、新道可付事。

右之通、御覺書ヲ以被相達也。

——片倉代々記○伊達騷動實記收。

雄山公○伊達綱宗

二月○萬治三年將軍命シテ江戸小石川溝渠ヲ修ム。米六千貳百人口ヲ賜フ。

肯山公○伊達綱村

三月○寛文元年小石川修理成ル。將軍巡視シ、片倉小十郎以下十九人拜謁ス。小十郎ニ白銀一百枚服十領ヲ賜フ。其他差アリ。

品川様○伊達綱宗御代、神田川御普請仰付ラレ候處、御人足、江戸者召仕ハレ候ニ、

市街恢弘時代

過分の日傭代ニテ、後ニハ金一切ホドニ相募リ候處、大條尾張存慮ニテ、川通堀込メ所へ、前夜ニ金錢ヲ蒔申候テ、翌日ニ人足共拾ヒ德ニ致サセ候。三四日ノ内、只働可申ト申ス者共多ク相成、甚御物入減ジ申候。老人傳聞記。

——伊達世臣武德遺聞錄

同年○明曆四年。ニ松平陸奥守綱宗へ、小石川御堀普請ヲ仰付ラル。三月ニ鍬始メ有テ、萬治二年ニ成就ス。右堀普請入用ノ金ノ有増金一分十六萬三千八百十六切ト云々。小判ニノ四萬九千五百四兩。

——玉露叢

○萬治二年ノ條。 神田川堀割の事、仙臺侯へ命せられ、今年御普請始る。明年にいたり、大川より柳原通り、御茶の水下通り、駒込吉祥寺舊地側より、牛込にいたり、御外廓御堀出來して、大川へ通路と成る。此揚土を以、小石川小日向に築地出來、武家町下の堀とめは江戸川は小石川へ抜てあり、飯田

——武江年表

一、昔は牛込は、船入無之、萬治之頃松平陸奥守被仰付、大川より柳原堀通し、御茶の水の下通り、吉祥寺脇通り堀ぬき、水戸殿前堀廻し、牛込御門際迄堀ぬき、牛込へ船入候様ニ成。此堀上げ土を以て、小日向築地、小石川の築地出來、武士屋敷地になり、此築地出來ざる前は、赤城明神より目白不動まで、住家一軒も

無之、田畑斗也しが、是より、武士屋敷町屋も出來たり。此時の堀普請三年に出來す。三年の内は、夜は明るまで、晝は終日、晝夜人足の普請止む事なく。水道橋くずれ、橋木戸門也。
——已往物語○伊達騷動實錄收。

〔參考〕 嚴有院殿御實紀附錄ニ、

牛込より和泉橋までの渠溝は、松平陸奥守綱宗○伊達に仰付られ、萬治三年はじまり、寛文元年に成功す。そのあいだ老臣して經營所を巡視せしめ、御みづからも成せられ、伊達兵部少輔宗勝、田村右京亮宗良はじめ、陪臣茂庭周防等にいたるまで、慰勞の御詞を施され、竣功の日は、銀時服など下されぬ。そのほか芝金杉及淺草の通溝は、官費もて疏鑿ありしなり。いまにいたり、府の者とも水漕の便を得て、車馬の方を省く事は、みな當代の餘澤にあらざるはなし。いとかしこみ奉るべきにぞ。

〔附記、一〕 屋鋪轉移

寛政呈譜ニ左ノ如ク見ユ。神田川普請前ナルコト勿論ナル可キモ、今其時月ヲ知ラス。假ニ此ニ收録ス。

景義○市兵衛。○都筑。

市街恢弘時代

萬治年中神田川御普請ニ付、本郷拜領屋敷被召上、爲替地、於市谷六百五十
三坪被下置_し。

〔附記、二〕 日光社參延期

五日_{年〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇四月 日光山御參の事、あらかじめ仰出されしかど、府下
あばく、火災ありて、人心安穩ならず、かつ下民艱困すべければ、まづ延引
し給ふむね、老臣して家門に仰つかはさる。
六月_{年〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇日光門主のもとに、御參停廢の旨、松平伊豆守信綱して仰つ
かはさる。かつ其事にあづかる輩并に諸有司にも仰下さる。

——嚴有院殿御實紀

六日壬辰

{年〇萬治三} 〇二月{〇三} 〇壬辰、三正綜覽。

諸侯第ノ瓦葺ヲ許可ス。_{〇侯爵淺野家回答。}

諸侯第瓦葺許可事蹟

侯爵淺野家_{〇廣} 〇藩。回答ニ、左ノ如ク見ユ。

光晟公_野 〇淺

萬治三年庚子

一、二月六日、御大名様方江戸御屋敷、此以後瓦葺不苦旨、公儀より被仰出_{御直}、
撰ニ無レ之。

市人借居士宅査檢

八日甲午_{年〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇甲午、三正綜覽。〇武家ノ宅地ニ市人ノ借居スル者
ヲ査檢セシム。_{〇柳營日記。萬治三} 〇嚴有院殿御實紀。

市人借居士宅査檢

_{〇萬治三年二月} 〇八日晴。

一、奉公人屋敷ニ町人借屋有之、分、毎日改之可申之旨、御歩行目付に被仰付候。

——萬治三録_{〇萬治日記。柳營} 〇萬治三録_{〇萬治日記。柳營} 〇萬治三録_{〇萬治日記。柳營}

九日_{〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇中略。武家の宅地に市人借宅して住ものを、日々査檢すへきむね、
歩行目付に命ぜらる。

——嚴有院殿御實紀

十日丙申_{年〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇丙辰、三正綜覽。〇江戸城惣構ノ土手ニ松樹ヲ植シ

ム。_{〇柳營日記。嚴有院殿御實紀。}

惣構土手松樹植栽 牛込四谷邊ノ惣構土手現ニ老松ヲ存スルハ、是頃ヨリノ

植栽歟。

十日_{〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇中略。

惣構御堀土手之上松植可申由御植木奉行へ傳之。——柳營日記

十日_{〇萬治三} 〇二月_{〇三} 〇中略。城溝の堤に、小松を植べしと、植木奉行に命ぜらる。

市街恢弘時代

惣構土手松樹植栽事蹟

惣構土手松樹植栽

老臣巡視

——嚴有院殿御實紀

十一日丁酉○萬治三年(紀元二三二〇年)二月。○丁酉三正綜覽。老臣傳通院前○石川區。小ヨリ兩國

橋邊○市內。日ヲ巡視シ、十二日戊戌○萬治三年(紀元二三二〇年)二月。○戊戌三正綜覽。八町堀築

地邊○市內。日ヲ巡視ス。○柳營日次。記。萬治三錄。三月廿六日辛巳○萬治三年(紀元二三二〇年)○辛巳三正綜覽。

ニモ、代官町邊○市內。日ノ巡視有リ。○柳營日次。記。萬治三錄。

老臣巡視 復興施設ニ關スル巡視ナラム歟。

十一日○萬治三年二月。

雅樂頭○酒井伊豆守○松平

豐後守○阿部

右奥、傳通院前方兩國橋邊まで見分相越之。

十二日○萬治三年二月。

——柳營日次記

雅樂頭伊豆守豐後守、八丁堀築地邊屋敷見分。

○萬治三年二月。十一日青。雅樂頭伊豆守豐後守、代官町天神筋上柳原向島屋敷見分相越之。

○萬治三年二月。十二日巳刻方甚南風。雅樂頭伊豆守豐後守、西窪芝筋屋敷見分相越之。

——萬治日記○萬治三錄同。

老臣巡視事蹟

三月廿六日又代官町邊ヲ巡視ス。

同年○萬治三年三月。廿六日青。

略。上老中不殘、代官町筋見分相越之。——萬治日記○柳營日次記。萬治三錄同。

是月○萬治三年(紀元二三二〇年)二月。建築制ヲ示達ス。○享保集。成。嚴有院殿御實紀。

建築制 災後屢示達スル所有リ。今又左ノ示達ヲ見ル。

萬治三子年二月

一、今度御赦免被成以薪樽木賣以河岸ぬりよきの藏、二間そりニ長二間三尺、軒之高サ六尺方大キニ作り間敷以、尤河岸エ之道九尺又ハ七八尺程あけ置可申以。少も相背申間敷事。二月。

萬治三子年二月

一、今度燒申以跡ニ見らふきりや葺有之以。多とへ當分之更ニても、土ニてぬり可申以。こけらふきハ、あきうらニ多も芝ニても土ニても早々勝手次第ニ可致更。二月。

萬治三子年二月

一、町中りやふき見ら葺家、早々土ニて屋敷をぬり可申更。

市街恢弘時代

建築制

建築制事蹟

一、當春屋けし町ハウヤふきヨラふきハ不及申、こけらふきも土ニぬり可申し。

勿論のきつふきニあも芝ニても、勝手次第よふき可申し。二月。

萬治三子年三月

一、先日も兩度迄相觸れ處ニ、町中ウヤふきの小屋今ニ塗不申し。手寄ニより御堀之土を取り、早々塗可申し。重延々ニおゐてハ、穿鑿之上急度可申付者也。二月。

——享保集成

この月年〇萬治三令せたるは、こたびゆるされし新樽木賣買の河岸は、塗たれ庫二間、梁長二間三尺、軒の高さ六尺を越てつくるへかたず、岸のかさは九尺または七八尺ばかり明置て道とふすべし、聊もこれにそむくへかたずとふり。またこたび火災にかゝりし地、茅屋はたとへ暫時の間なりとも土もてぬるへし、板屋は蠣殻か芝あるひは土ぬるとも心にまかすべしとふり。

——嚴有院殿御實紀

附記
博徒逮捕

一、同治〇萬三年二月、ごうち打大將今井四郎、坂田金平此組下同類拾三人召

捕ル。

ざる八兵衛、かゝ清兵衛、わうと勘右衛門。まやうの一郎兵衛、十三人の内。

久兵衛、虎之助、そゐしゆ庄兵衛、そくさん彦三郎、さし五兵衛、八郎兵衛、甚兵衛、次兵衛、八兵衛、權右衛門。

今年まけく、火事ニ付、火付御詮儀、追々被召捕し。——承寛襟録

三月朔日丙辰〇萬治三年紀元二三二夜廻晝廻ノ輩ヲシテ火賊ヲ追捕セシム。〇柳營日次記。

火賊追捕 左ノ如ク命有リ。

朔日〇萬治三年
三月〇中略。

御小姓組御書院番、大御番、此内夜廻晝廻役人不殘招之、右之頭ニ是伺候、老中列座傳仰之趣、抑當春失火無止時、是放火之賊徒等所爲歟云々、頃日少々搦捕、就中早天涉旬日、旁以彌無油斷相廻、用心堅可申付、自然不審成者有之ハ可改之、并所々辻番之事、或人少、或耄味、在る無甲斐、是又改急度可申付由也。

——柳營日次記

火賊追捕

火賊追捕事蹟

○萬治三年三月朔日青。○中略。

一夜廻之面々被召出、火事之節、早々其場へ罷出、縱火付ニ無之、共、不審之者在之ハ、召捕可申由也。
——萬治日記

東叡山大猷院靈屋其他修理

廿日乙亥○萬治三年三月○乙亥、三正綜覽。東叡山大猷院靈屋及慈眼堂○市内下谷區。ヲ修理ス。小姓組番頭小出尹貞○中越守。小姓神尾元珍○若狹守。奉行タリ。河越○武藏國。城主松平信綱○伊豆守。命ヲ受ケテ役ヲ助ク。其子輝綱○甲斐守。代テ工ヲ督ス。十一月十二日甲子○萬治三年○甲子、三正綜覽。工成リ入佛ス。十五日丁卯○萬治三年○丁卯、三正綜覽。日光門跡其他ニ贈遺有リ。廿日壬申○萬治三年○壬申、三正綜覽。輝綱○甲斐守。及尹貞○小出越中守。元珍○神尾若狹守。受賞シ、廿一日癸酉○萬治三年○癸酉、三正綜覽。亦賞ヲ受クル者若干有リ。○萬治三錄。萬治日記。柳營日次。記。萬治遺錄。嚴有院殿御實紀。

東叡山大猷院靈屋其他修理事蹟

東叡山大猷院靈屋其他修理 奉行任命。

○萬治三年三月廿日卯刻方雨止晴。

小出越中守○尹貞。

神尾若狹守○元珍。

右上野大猷院殿御堂破損ニ多、修復奉行被仰付之。

——萬治三錄○萬治日記同。

廿日○萬治三年○三月○中略。小姓組番頭小出越中守尹貞、小姓神尾若狹守元珍、同廟○大猷院。并に慈眼大師堂修理奉行命せらる。

——嚴有院殿御實紀

竣工、入佛。

同○萬治三年○十一月○未刻方雨降。酉刻方止。

一、上野御堂御修造出來付多、爲御名代雅樂頭○酒井清。參詣、伊豆守彼地相詰シ。

——萬治日記○萬治三錄同。

○萬治三年十一月十二日未刻より雨降、酉刻より止。

東叡山大猷院殿御堂御修復出來ニ付、今夕御入佛、仍爲御名代雅樂頭、伊豆守被遣、伊豆守ハ依爲御修復奉行也。

——柳營日次記

贈遺。

○萬治三年十一月十五日晴。○中略。

今度大猷院殿御堂御修造畢多、就御入佛上使、以伊豆守僧中送物、

日光御門跡

銀貳百枚。

市街恢弘時代

同百枚。

銀三十枚。

同三十枚。

同。

同二十枚。

同。

同。

同。

同。

同貳百枚。

青銅百貫。

受賞。

○萬治三年十一月廿日
○壬申晴略。

小袖五羽織。

昆沙門堂

凌雲院

寒松院

真光院

覺樹院

寂教院

實成院

聖光院

常照院

僧中

宮堂御掃除者

——萬治三錄○柳營日記同。

松平甲斐守○輝綱。

右上野御堂修復手傳被仰付出來二付、被下之。

金五枚。時服三羽織。

同。

右兩人御同所御破損奉行被仰付出來二付、被下之。

小出越中守○貞尹。

神尾若狹守○元珍。

——柳營日記○萬治三錄同。

○萬治三年十一月廿一日
○癸酉晴。早旦方北風夜二入。

今度上野御堂御普請中相詰奉行并御披官大工等

へ、金銀小袖被下之。

銀三十枚。小袖三羽折。

松平伊豆守家來 深井藤右衛門

同。

中村源左衛門

同二十枚。小袖三羽折。

尼子八郎兵衛

同十枚。同。

朝比奈三左衛門

同三十枚。

御大工頭 鈴木修理

同廿枚。

木原内匠

同十枚。

鈴木與次郎

同。

同三郎左衛門

市街恢弘時代

同。

但、七十郎ハ秋田信濃守御普請場へ相詰付る被下候。

別項ニ記ス。

同 七十郎

廿一日○萬治三年十月○中略。

銀三十枚。羽折。

小袖三十枚。羽折。

銀二十枚。羽折。

同十枚、同貳、同ッ、。

右ニ上野御佛殿御修覆奉行相勤以付、被下之。

銀三十枚。

同廿枚。

右同斷ニ付被下之。

十二日○萬治三年十月○中略。

銀廿枚。

右ニ東叡山御宮御堂修覆之繪彩色被仰付以付被下旨於御納戸前伊豆守傳

狩野采女

松平伊豆守家來
深井藤右衛門
同 尼子八郎兵衛
同 中村源左衛門
同 朝比奈三右衛門

棟梁

鈴木修理
木原内匠

之。
○萬治三年十二月十二日晴。○中略。

銀廿枚。時服貳。

狩野采女

右ニ上野御佛殿御繪書申付ニ付、被下之。

——柳營日次記○萬治三年

信綱○初正永。長四郎。伊豆守。從五位下。從四位下。侍從。

十一月二十日○萬治三年。東叡山大猷院殿の御靈屋ならびに慈眼大師廟塔修補

の事を助けつとめしにより、男輝綱に時服五領羽織一領をたまひ、其事にあづかれる家臣等に物をたまふ。これ信綱仰をうけたまはるといへども、職務繁さにより、輝綱をして監せしむるによりてなり。

輝綱主殿。甲斐守。從五位下。

略。上。萬治三年十一月二十日さきに東叡山大猷院殿の御靈屋ならびに慈眼大師廟塔修補の事、父に代りてこれを監せしにより、時服五領羽織一領をたまふ。

尹貞瀨兵衛。右馬助。越中守。從五位下。

三年○萬治。十一月二十日東叡山御堂修復の奉行をつとめしにより、時服三領

市街恢弘時代

羽織一領黄金五枚をとまふ。

元珍初元眞。内匠。主水。若狹守。從五位下。

萬治三年十一月二十日東叡山の諸堂修補の奉行をつとゑしよより、時服三

領羽織一領黄金五枚をとまへる。

——寛政重修諸家譜

輝綱平。松

萬治三年庚子三月廿日、東叡山大猷公靈屋并慈眼大師廟塔御修補助造使信

綱平。松雖役之、百務多端、依此代父監之。十一月廿日被賞修輔落成之功、時服羽

織賜之。

——大河内家譜橋。豐

附記
田安門前
明地建札

〔附記〕 田安門前明地建札

廿日○萬治三年三月。○中略。

田安御門前町屋明地ニむさとわくと捨置申付て、札ヲ建は様ニと御老中
中被仰渡し、則札今日御徒目付差添彼地へ遣し、明地近邊之衆へ右之段
申斷は様ニと伊豆守殿被仰し、間其段申付し、以來わくと捨申者有之於へ、
見合にとらへは様ニ田安御門番衆に伊豆守殿可被仰付由ニし。

——萬治遺錄

天樹院中屋
鋪營造事蹟

四月十二日丙申○萬治三年紀元二二〇〇年。○丙申。三正綜覽。天樹院徳川氏千ノ中屋鋪ヲ

營造ス。○柳營日記。○萬治三錄同。

天樹院中屋鋪營造 傳フ。

十二日○萬治三年四月。○中略。

一、天樹院殿御中屋敷、廣く颯吹ニ御普請被仰付之。

——柳營日記三。○萬治三錄同。

十三日丁酉○萬治三年紀元二二〇〇年。○丁酉。三正綜覽。筋違橋前本多忠義登守。○能邸跡市

内神田區。ヲ廣達トス。○柳營日記。○萬治遺錄。

筋違橋前廣達 筋違橋前ニ明地ヲ設ケタルコト、上文ニ併記ス。寛文江戸圖、江

戸方角安見圖鑑ノ類皆載セテ、本多下野守○忠平。○忠義子。邸有り、明地ト爲リタルハ

本多邸ノ一部乎、若クハ本多邸少シク東ニ移リシ乎ヲ知ラズ。

十三日○萬治三年四月。○中略。

筋違橋御門前本多能登守○忠上屋敷廣路ニ被仰付。——柳營日記

十三日○萬治三年四月。○中略。筋違橋前本多能登守忠義か邸跡を廣小路とせらる。

——嚴有院殿御實紀

十三日○萬治三年四月○中略。

右之上屋敷筋違橋御門之前、廣道ニ被仰付。

本多能登守○忠義。

太田備中守○資宗。

右之上屋敷同所上ヶ屋敷、其近邊地添被下之旨、井上河内守○正利。御老中被傳之。

疊小屋

五月三日丁巳

○萬治三年(紀元二三三二年)○丁巳(三正綜覽)。

大手下馬後○市内、麴町區。ニ疊小屋ヲ設

ク。○萬治遺錄。

疊小屋事蹟

疊小屋 萬治遺錄ニ、

三日○萬治三年五月○中略。

下馬の後のゆき所之かき、今迄ハ安藤對馬守家來ニ預リ置ハ處ニ、柴村次郎右衛門小屋ヲ懸ケ、御疊細工仕ハニ付相渡し申ハ。

寛文江戸圖大手前下馬腰掛ノ南堀端ニ、御たゝみこやト有ル者是也。

〔附記、一〕 辻番處罰

三日○萬治三年五月○中略。

附記、一
辻番處罰

四月晦日之夜五時、二番町岡部○庄小左衛門○正綱前之橋之際ニ、西山十右衛門○昌時小者辻切ニ逢申ハ。辻番之遠近昨日御徒目付遣之申ハ處、小右衛門方番所近く御座ハ。其通御老中ニ申上ハ處、如例先志ヲ置サらし可申ハ由、被仰ハニ付、御徒目付ニ申渡し遣ハ。

四日○萬治三年五月。

二番町岡部小右衛門前之辻番、彌近日御徒目付中川嘉兵衛○利尚・池田忠兵衛兩人遣しサらし申ハ。右兩人小右衛門一町辻番組衆之内、福井清右衛門所ニ參リ、萬事相談之上サらし申ハ。辻番之有之前ニ札ヲ建申ハ様ニ申渡ハ由申ハ。

六日○萬治三年五月。

二番町岡部小右衛門屋敷前之辻番人此中サらしハニ付、伊豆守殿へ伺ハ得ハ如例之三日サらしハ、繩もときハ様ニ申渡ハ得と被仰ハニ付、其趣辻番組中ニ可申達之旨御歩行目付後藤長左衛門・小山太郎右衛門ニ申渡之。

—— 萬治遺錄

〔附記、二〕 淺草門跡裏門通辻番

市街恢弘時代

附記、二
淺草門跡
裏門通辻
番

勘左衛門 五左衛門
 彦治郎 庄右衛門
 清右衛門 長兵衛
 九左衛門 半兵衛
 六右衛門
 隱岐伯耆
 備前淡路
 内記安藝

覺

一、元祿四年未ノ二月辻番所御給金請取之當番此方組之内本覺寺ニ御座ハ判鑑取ニ參リハ間則押ハ多遣シ申ハ控

淺草寺町辻番五ヶ所當未年辻番御給金請取ハ手形連判之判鑑

本覺寺 清水寺
 正法寺 長光寺

三拾三間堂地主 妙音寺 法福寺
 久右衛門判

右之通判鑑寺社御奉行所ハ當番本覺寺上ヶ被申ハ。

請取申辻番之者御給金之事

一、小判合六拾五兩ニ 但人數三拾人壹人ニ付金貳兩宛。

内、五兩ニ油代。

淺草寺町辻番五ヶ所

辻番 壹ヶ所 三拾三間堂西南角
 辻番 壹ヶ所 本多下野守様東長徳院西南角
 辻番 壹ヶ所 池田帶刀様與力町西南角
 辻番 壹ヶ所 誓願寺東北角
 辻番 壹ヶ所 海禪寺東南角

右是ニ當未正月ハ同極月迄、辻番之者御給金并油代共ニ慥ニ請取申番之者共ニ銘々相渡可申ハ、人數之儀ニ御定メ通晝夜無懈怠爲相勤可申ハ、爲後日仍如件。

元祿四年未ノ二月

本	覺	寺	清	水	寺
正	法	寺	長	光	寺
妙	音	寺	法	福	寺
久	右	衛	門	判	

本多新五兵衛殿

淺岡勘兵衛殿

木部勘右衛門殿

右辻番所相改相違無御座也。

木村源太左衛門

吉岡權右衛門

表書之金六拾五兩可相渡也、斷りて本文ニ有之也以上。

元祿四年未二月

細田三右衛門

岩出瀬兵衛

保木彌右衛門

辻六郎左衛門

井出平八郎

竹村彌兵衛

設樂長兵衛

諸傳左衛門

萩彦治郎

松美濃守

稻伊賀守

本紀伊守

戸能登守

小佐渡守

但此方辻番御給金大金請取番ニ當り也者延寶五年巳ノ二月也御徒目付衆有壁長右衛門殿諏訪文右衛門殿之時代當年迄拾五年ニ成申也。右三拾三間堂元地淺草ニ有之節辻番所請負組合寺舊記ニ相見也。間書披申上。以上。

文政十一戊子年九月

深川三拾三間堂守
鹿鹽久右衛門

賜宅 廿一日乙亥 〇萬治三年(紀元二三二〇)五月〇乙亥三正綜覽。屋鋪給賜者有リ。七月七日庚申

〇萬治三年(紀元二三二〇)五月〇乙亥三正綜覽。

賜宅 左ノ如シ。

〇萬治三年五月廿一日青。

市街恢弘時代

伊澤政信

三枝守盛
日向政次

附記
橋上振賣
制禁

戲場森田座
創設

戲場森田座
創設事蹟

東京市史稿

服部奎之助上り屋敷伊澤隼人正信○政被下之由也。

○萬治三年七月七日庚申辰刻より南風雨甚車軸流夜入止晴。

一、三枝平右衛門盛○守日向半兵衛次○政兩人屋敷之隣明地在之を何も被下之。
○書入以下欠記。

——柳營日記○萬治三錄同。

〔附記〕 橋上振賣制禁

一、方々橋之上ニ多振賣之商買物を置商ひ致し間兩四ッ角之者共名主月行事相改以來置申間敷し重多振賣之者參りしハ、賣物を取上げ可申之旨其者共ニ爲申聞其上ニ多押多參りしもの於有之ヲ賣物を取此方へ可申來し勿論道々橋之上掃除可仕事。

右之子○萬治五月廿八日御觸四ッ角之家主并ニ名主月行事手形差出之。

——正實事錄

是月○萬治三年(紀元)五月。坂本又九郎木挽町五丁目○京橋區ニ戲場森田座

ヲ創ス○享保撰要類集。戲場年表

戲場森田座創設 左ノ如ク傳フ、

同治○萬三年庚子

五月、太郎兵衛名題よて坂東又九郎木挽町五丁目ニ櫓を上し。次男又七を太郎兵衛養子として、森田勘彌と改依て座名を森田座と云。

——戲場年表

一、私共芝居取立申候年數之義、萬治三年子カ當巳年まで六十六年ニ罷成申候。太郎兵衛と申者、木挽町五丁目ニ芝居取立私先祖坂東又九郎倅二男又七を太郎兵衛養子ニ仕、森田勘彌と相改、狂言盡し仕候。其節カ又九郎方エ太郎兵衛カ座元を相譲り申候。其後又七兄又次郎倅又吉を相譲り、則勘彌と申候。只今之又九郎ニ多御坐候。其已後右又七倅福松を又九郎鳥帽子子ニ仕、狂言等指南仕、勘彌を相譲り申候。則只今之勘彌ニて御坐候。是迄五代ニ罷成申候。右太郎兵衛方エ又七を養子ニ遣し候故、則坐元をも先祖坂東又九郎ニ相讓申候。依之代々坂東又九郎坐元相勤來り申候。

享保十年巳七月

太夫當 勘 彌
坐元 又 九 郎

右芝居由緒之儀不相知候ニ付、此度町年寄エ相尋候處、書面之通ニ有之。但先年ハ狂言芝居四人ニ多有之候處、十二年巳前午三月御城女中繪嶋御僉

市街恢弘時代

義一件ニ付、木挽町ニ居候山村長太夫遠嶋ニ相成、其已後長太夫跡芝居取立候義度々願人有之候へとも不被成候。

——享保撰要類集

〔附記〕 社地小芝居

萬治三年庚子

新乗物町對島屋五郎左衛門鶴屋源太郎願人ふて、社地よ於多小芝居五ヶ所百日の間興行願立以處御聞濟、尤筵張晴天興行の旨申渡さる。○十二月廿二日自今堺町ふきや町木挽町五丁目六丁目之外、歌舞妓不相成旨村越長門守○吉殿被申渡。

——劇場年表

小名木川關宿間水路

六月十八日壬寅○萬治三年紀元二三二大番依田貞清○小・内藤正清○小・内藤源左衛門○源左ヲ奉行トシテ、小名木川○市內ヨリ關宿○下ニ至ル水路ヲ

浚利セシム。○萬治三錄。嚴有院殿御實紀。

小名木川關宿間水路浚利 左ノ如シ。

小名木川關宿間水路利事蹟

○萬治三年六月十八日午刻白雨、車軸流。

岡部丹波守○與賢組
依田小隼人○貞清
松平左京大夫○頼純組
内藤源左衛門○正清

右被爲召、關宿方鱧鞘迄御堀埋申付、堀中奉行被仰付。——萬治三錄
十八日○萬治三年六月大番依田小隼人貞清内藤源左衛門正清關宿より江戸までの水路浚利の奉行命せらる。——嚴有院殿御實紀

竣工授賞

二日○寛文元年十月

金三枚
吳服三

内藤源左衛門
依田小隼人

右深川筋川浚奉行被仰付、出來ニ付被下之。

——寛文遺錄

二日○寛文元年十月關宿より深川邊浚利奉行大番依田小隼人貞清内藤源左衛門正清は、金三枚時服三つ○中略給ふ。みふ成功によてふり。

——嚴有院殿御實紀

知恩院門跡精廬營造

七月八日辛酉○萬治三年紀元二三二小姓組石谷清亮○七・折井正利○市左衛門ヲ奉行トシ、増上寺内○市內ニ知恩院門跡尊光法親王ノ精

廬ヲ營造セシム。○萬治三錄。萬治遺錄。嚴有院殿御實紀。

知恩院門跡精廬營造事蹟

知恩院門跡精廬營造 八、

市街恢弘時代

東京市史稿
○萬治三年七月
八日 辛酉。晴。

一、今度京知恩院御門跡増上寺ニ御學文ニ御下向、依之於彼寺内別家ニ方丈相立、則奉行人として進物番石谷七之助○清、牧野内匠頭組織田市左衛門○折井正利。右兩人被仰付。

八日○萬治三年
七月○中略。

石貝七之助 折居市左衛門

右之智恩院御門跡庵室増上寺寺内ニ多被仰付、奉行被仰付間伊豆守傳之。

——萬治遺錄

八日○萬治三年
七月○中略。知恩院門跡尊光法親王勤學のため三綠山に參向せらるゝにより、山内に精廬を新造せしめらる。よて其奉行を小姓組石谷七之助清亮折井市左衛門正利仰付らる。

——嚴有院殿御實紀

清亮○七之助。
石谷。

略○上 萬治三年十二月晦日、さきに増上寺のうちに知恩院の庵室を造らるゝのとき、これを奉行せしにより、時服三領黄金二枚をたまふ。

——寛政重修諸家譜

伊達綱宗品川別業屏居

十八日辛未○萬治三年(紀元二三二)○幕府仙臺前陸。城主伊達綱宗○松

奥守○陸ノ素行修ラサルヲ責メテ逼塞セシメ、八月廿五日戊申○萬

治三年(紀元二三二)○隱退ヲ命ジ、子龜千代○伊達ヲシテ襲封セシム。綱

宗○伊達品川別業○武藏國ニ屏居ス。○柳營日記。萬治三錄。天

伊達綱宗品川別業屏居 顛末ヲ左ニ略叙ス。

○萬治三年七月
十八日 晴。午下刻曇、雨天、其儘止。

松平陸奥守綱宗八年十

右常々諸事無作法付、一門家來之輩再三異見等雖申聞、一圓承引無之付、立花飛驒守○忠伊達兵部少勝○宗并家來之者共一身仕、當月頃より御耳ニ被立被下候様ニと、飛驒守兵部少御老中迄御内意雖有之、兩人比申分何も尤と思召候得共、家中之輩一心ニ兩人ト於同意之、可被達上聞申由ニ付、在所當地之家老共、其外諸物頭諸役人等ニ至迄、不殘主人陸奥守常々無沙汰之義、家之滅亡ニ存候間、願之是も兩人陸奥守悴二才ニ罷成候も御座候間、何ニあも跡式之儀立替被下候之難有可奉存候旨、飛驒守兵部少方迄各連判を以申越候付、兩人御老中迄被帖被致披露、右之趣被達上聞之處、陸奥守義爲不届之間、先逼

市街恢弘時代

伊達綱宗品川別業屏居事蹟

塞仕可罷在旨、上意候。依之今朝雅樂頭宅へ飛驒守兵部少其外家來之輩招寄之、豐後守美濃守列座ニ有、右之段々雅樂頭傳之跡式之儀ハ、重多可被仰出旨、次陸奥守へ牛込より筋違橋まで普請去頃より被仰付、其儘可申付之由、是又演達之。陸奥守ハ爲上使、太田攝津守○資被遣候。其方常々不作法之義、一門并家來之輩一々取上之趣及上聞、不屈思召、閉門仕可罷在候由、爲上意之旨、具ニ可承候由、老中被仰付、攝津守仰承、直ニ參付、飛驒守兵部少兩人も參會仕、陸奥守ニ相加り、上意之趣可承由也。

一、水戸殿、尾張殿、紀伊宰相殿、爲上使以阿部豐後守、陸奥守義常々無沙汰之由、一門家老共言上之上、閉門被仰付由、被仰遣之。依之後刻使者上ル。謁豐後守退去。

○書入。松平陸奥守綱宗事、病者付御奉公難相勤之間、二才之男子御座候、陸奥守儀ハ隱居仕、領地之儀ハ彼男子相續仕候様奉願候旨、家中之一門并家老共、立花飛驒守、伊達兵部○少大輔ハ捧訴狀、此段老中へ右兩人相達之、其趣及上聞之處、陸奥守事病者、其上日來不作法無紛付有、可致逼塞之旨、被仰出之。依之今朝於雅樂頭宅、飛驒守兵部大輔及家老共ハ、上意之趣演達之處、於然ハ何之輩成共一人被召加之候様ニモ、飛驒守兵部大輔望付有、太田攝津守被差加之、陸奥守ハ傳達之、則令逼塞由、領地相續

之儀ハ、追多可被仰出之由、次ハ兼多被仰付候御堀御普請之儀ハ、彌相勤可申付之旨、家老共ハ傳之。
○萬治三年七月
十九日 晴時曇

御使番

津田平左衛門○正

柘植平右衛門○正

右、松平陸奥守逼塞被仰付多被國元爲御目付被遣候間、用意可仕旨、被仰渡。
一、松平陸奥守昨日逼塞之趣、御詰衆御奏者番諸番頭諸役人之面々、老中雅樂頭申渡之。已下。是一門家來言上之由、委細被致物語、是氣遣ニ可被爲候ニ付多也。

金廿兩貳人扶持

六百石

知行不_レ知

○萬治三錄
三百石

鑑遣

渡邊九郎左衛門

目付

坂本八郎左衛門

納戸

畑與左衛門

役不_レ知

宮本又市

右、松平陸奥守家來今朝成敗有之由、陸奥守ス、メシユニ付多也。
○萬治三年八月
廿五日 晴時曇。

今朝雅樂頭宅ハ松平陸奥守一門中立花飛驒守伊達兵部少、太田攝津守并家市街恢弘時代

老茂庭周防守片倉小十郎大枝兵庫原田甲斐守招之陸奥守隱居被仰付跡式之義實子龜千代ニ被下謂所

一、陸奥守綱宗最前如被仰出候彌弟伊達兵部少并國元ニ罷在候田村右京宗良被召出兩人ニ龜千代領分之内三萬石宛被下候間兩人ニ多後見可仕候旨保科肥後守正阿部豊後守稻葉美濃守大目付兼松下總守直出座上意之趣雅樂頭傳之津田平左衛門拓植平右衛門雅樂頭宅ニ招之仙臺ニ二三日中可罷立候由被仰渡之

○實人。
松平陸奥守綱宗最前如被仰出候彌塞任可罷在候龜千代ニ有之由家老共申上實子之事候間陸奥守知行無相違被仰付之幼少之儀ニ候間陸奥守兄田村右京被召出之伊達兵部少輔と兩人後見被仰付就陸奥守領地之内都合三萬石充兩人被下之家老共彌申合右京兵部受差圖龜千代守立可申之旨也

○萬治三年八月廿八日快晴

御表出御已前大廊下溜ニ多雅樂頭豊後守列座諸大名彼所ニ招松平陸奥守跡式無相違實子龜千代被下旨其趣可存候間雅樂頭傳之但上意ハ陸奥守閉門被仰付段氣遣ニ被存旨被思召故也

金三枚

同

津田平左衛門

拓植平右衛門

右仙臺ニ爲御目付被遣是々今度松平陸奥守閉門被仰付ニ仍多國元仕置被遣也

○萬治三年十一月十六日戌辰晴

——柳營日次記○萬治三錄略同

今朝雅樂頭宅ニ御老中寄合在之是々田村右京御訴訟之義有之付多也御訴訟申上候之陸奥守○伊達綱宗跡式被仰付其上自分へも三萬石被下置段難有奉存候併今一度陸奥守被召出候之彌以難有可奉存候由御訴訟也

——萬治三錄

一、同月同日○萬治三年七月十八日松平陸奥守綱宗有故多品川ノ屋敷へ逼塞忠宗二男于時當年二歳之嫡男龜千代ニ家督無相違被爲仰付龜千代幼少タルニ付テ伊達兵部○少大輔田村右京太夫兩人ヲ後見ニ被爲仰付之

——天享吾妻鑑
十八日○萬治三年七月松平陸奥守綱宗今年十八歳なるが平生多病にて公のつとめに堪されば隱退せしめ二歳の兒龜千代に家國つがしめ給はらんよし一族并に家司等一同して近縁立花飛驒守忠茂一族の伊達兵部少輔宗勝のも

市街恢弘時代

九六九

とへ訴訟をさしぐ。よて老臣へうたへ、上聴にをよびしが、綱宗日頃酒色にふけり、家士等か諫をも聞入さるよし紛ふければ、逼塞せしむべしとの旨、仰出さる。よて酒井雅樂頭忠清の邸へ飛驒守忠茂、兵部少輔宗勝をめして、其旨をつたふ。忠茂宗勝奉り、さうば外に誰にても一人めして、この仰を傳給ふへしと申により、太田攝津守資次を加へてこれを傳ふ。かくて忠茂宗勝資次三人にて綱宗かもとにおもむき、嚴命をのべて門とざし籠居せしむ。かつ牛込溝渠の事は、もとのごとく家士出してつかふまつらしむへしとなり。

廿五日○萬治三年八月酒井雅樂頭忠清がもとに、松平陸奥守綱宗が一族伊達兵部少輔宗勝、并に近縁立花飛驒守忠茂、太田攝津守資次、其外片倉小十郎、原田甲斐等かの家宗徒の老等^まをめして、綱宗か事は、家長等申所のごとくたうば隠退し、いよく籠居してあるへきなり、龜千代二歳の幼稚といへとも、長子たるうへは、原封六十二萬石ことくつがしめられぬ、幼稚のほとは、綱宗か庶兄田村右京宗良を召出さるれば、宗勝とにも後見し、家士と心をあはせ、龜千代輔佐すべしと命せられ、宗勝宗良兩人に、原封のうち三萬石づゝ分ち給ふ。この綱宗は、故陸奥守忠宗が第六の子なり、兄越前守光宗十九歳にて父

に先立てうせしかば、嗣子となり、承應三年十二月廿二日叙任して、從四位下侍從にあり、美作守と稱し、萬治元年閏十二月廿七日家つぎて、少將にのぼり、陸奥守と稱し、けふ隱退して若狹守と改め、のち入道し、嘉心と稱し、正徳元年六月四日七十二歳にて卒しぬ。

——嚴有院殿御實紀

萬治三年七月十八日老中酒井雅樂頭忠清宅へ、立花飛驒守忠茂、伊達兵部少輔宗勝、陸奥守家臣大條兵庫宗頼、片倉小十郎景長、茂庭周防定元、原田甲斐宗輔を招かれ、老中阿部豊後守忠秋、稻葉美濃守正則列座にて、陸奥守常々作法の儀上聞に達し、不届に思召さる、因て先づ逼塞罷在るべく、跡式の儀は重ねて仰出さるべし。但牛込より筋違橋までの普請は引續きて相勤むべき旨、雅樂頭演達す。飛驒守兵部少輔承りて、さらば上使一人遣はさるべしと申すに因て、太田攝津守資次を遣はさる。斯くて攝津守飛驒守兵部少輔三人、綱宗が許に立向ひて台命を述べ、綱宗上意の旨をかしこまる。攝津守歸て其趣を言上し、飛驒守兵部少輔も同じく參上して、安堵の旨を老中に申して、事一段は濟みたり。かくて綱宗は二十六日に品川の南、犬井村の邸に移れり、時に年二十一なりき、隱居願の事固より秘密なりしかば、綱宗の知るべきにあらず、

日々小石川の普請場に出で、當日も常の如くにして、歸邸して俄に逼塞嚴命の上使を受けしなり。まことに寢耳に水とやらむなれば、其驚きいかばかりなりけむ。此場合に至るまで放縱に任せて、死をもて諫争するものもなく、如何に秘密なればとて一人の綱宗に告ぐる者だになかりしは、亦無慚の至りならずや。唯廢黜の際まで、綱宗が非行を諫止せむとせしは在國の國老奥山大學のみにて、廢黜の後上府して綱宗が再勤を幕府に請願せしは田村右京のみなりき。

八月^{三〇}萬治^年に入て、老中酒井雅樂頭の招きに因て、伊達兵部少輔伊達安藝伊達彈正茂庭周防大條兵庫片倉小十郎原田甲斐等其屋敷に趣く、阿部豊後守稻葉美濃守久世大和守列座にて雅樂頭尋ねて云ふ、陸奥守不行跡に因て逼塞仰付けられぬ、然るに一門家老の輩、その家督にとて幼少なる龜千代丸を願出でたる所存は如何に、政宗が血統にて十七歳以上なる者を改め願ふべきなりといふ、亦兵部少輔と内議ありての事なるべし。時に茂庭周防守答へて申すやうは、陸奥守病身なれば隱居願出で、龜千代丸その實子なるが故にこそ、家督には願ひ奉りしなれ、政宗が正統此外にあるべからず、但幼少なる

が故に家督に立てられ難くんば、伊達の家一向に潰し下さるべし、龜千代丸の外に願ひ奉るべき者候はずとぞ言切つたる、其骨硬想ふべし。雅樂頭無言なり。豊後守傍より周防が申す所其理あり、暫し次へ罷り出で候へと云ふ。因て一同表座敷に控へてありしに、老中談合を遂げしにや再び呼出されて、願の趣き御吟味あるべきなりと申し渡さる。當時雅樂頭未だ全權ならず、將軍補佐に保科肥後守正之、老中に松平伊豆守信綱、阿部豊後守忠秋の如きあり、夫等の議に因て斯くは決せしなるべし。此後久世大和守竊に周防を招きて、龜千代丸家督相違なく仰付けらるべきに濟みたり、安堵あるべしと密談あり。周防普請小屋場に歸て、感喜する事一方ならず、折節水戸中納言頼房より贈り來りし毛氈十間程、小屋にありしに酒肴を添へ、自分謝儀として密に大和守に贈進せしとぞ。

八月廿五日^{三〇}萬治^年今朝老中酒井雅樂頭忠清宅へ伊達家の一族伊達兵部少輔宗勝、近縁立花飛驒守忠茂、太田攝津守資次、並に家老大條兵庫宗頼、片倉小十郎景長、茂庭周防、定元、原田甲斐、斐宗輔を招かれ、將軍補佐保科肥後守正之、老中阿部豊後守忠秋、稻葉美濃守正則、大目付兼松下總守正直列座にて、今度一

門家老の輩言上の趣上聞に達し、陸奥守隱居仰付けられ、跡式の義は實子龜千代丸に下され、先陸奥守弟伊達兵部少輔本知一萬石なるに二萬石足され、國元に罷在る綱宗が庶兄田村右京宗良召出され、三萬石となされ、共に龜千代丸領分の内にて下され、兩人にて後見すべき旨、雅樂頭これを傳ふ。内々かねて期したる事なれど、爰に家督相違なくおほやけに定められて、伊達家上下の安堵今更の如くなりしなるべし。廿八日に幕府より諸大名へ綱宗隱居、龜千代丸家督の旨傳へらる。兵部宗勝は盤井郡一の關にて三萬石を賜ひ、右京宗良は名取郡岩沼にて三萬石を賜へり。

伊達騷動實錄

一、萬治三年綱村君達^伊に御家督被仰出之旨、申來ひ書狀寫。以御早飛脚申入ひ。今朝酒井雅樂頭殿^{忠清}に飛驒守様^{立花忠茂}、兵部様^{伊達宗勝}、大田攝津守殿^{資世}御出被成ひ様こと、御老中^{正之}被仰遣、并拙者共四人^{忠秋}被召連ひ様こと、御指圖付、致御供伺公仕ひ處、保科肥後守殿^{正之}、酒井雅樂頭殿、安部豊後守殿、稻葉美濃守殿、上意之旨、被仰渡ひ。陸奥守事^{綱宗}、最前如被仰出ひ、彌逼塞仕可罷在ひ、年頃若し得共、先陸奥守跡式無相違被仰出ひ間、一入御奉公心懸可申と、被思食ひ所、萬事不作法之段、御耳に相立、不届^{忠宗}被思食ひ間、内々御穿鑿之上、訖度被仰付様も

可有之^{綱宗}得共、政宗代々前陸奥守別而御懇之御事、御座ひ間、其御首尾被思食、二歳に罷成ひ、悴御座ひ由、家來之者共申上ひ間、悴龜千代^{綱村}ニ無相違跡式被仰付ひ。然所幼小之儀、後見無之^{綱宗}ひ、家老共守立申^{綱宗}氣遣ニ可存ひ間、田村右京^{宗良}被召出、伊達兵部兩人、後見被仰付ひ間、萬事兩人差圖を請、家老共守立可申ひ。兵部右京兩人ニハ、陸奥守知行高之内三萬石宛被分下之由、御説之旨、被仰渡ひ。就夫右京様早々御登被成ひ様こと、飛驒守様に雅樂頭殿被仰渡ひ間、其段右京様に被申上、御仕舞被成次第早々御登被成ひ様可被申上ひ。中略。

(萬治三年) 八月廿五日戌ノ下刻。

富塚内藏助殿^(重信)
奥山大學殿^(常辰)
古内主膳殿^(重安)

茂庭周防^(定元)
片倉小十郎^(景長)
大條兵庫^(宗頼)

雄山公○伊達綱宗

七月十八日○萬治三年幕府命アリ、逼塞ス。乃チ品川邸ニ移ル。

肯山公○伊達綱宗初基

略。上三年庚子○治八月廿五日、幕府老中命ヲ傳ヒテ曰、一門家老ノ請ニヨリ

襲封セシメ、併セテ父ニ隱居ヲ命ス。兵部大輔伊達宗勝、右京亮田村宗良ヲシ

テ後見セシメ、各三萬石ヲ頒賜セシム。翌日雄山公○伊達綱宗品川別邸ニ移ル。

— 東藩史稿

〔參考〕 伊達綱宗

雄山公○伊達綱宗

公諱ハ綱宗、幼名巳之助丸。義山公○伊達忠宗第六子。生母ハ櫛笥氏。寛永十七年

庚辰八月八日仙臺ニ生ル。○中略萬治元年七月義山公薨ス。九月八日登營襲

封ヲ謝シ、助眞ノ太刀馬一頭、給五十銀子五百枚ヲ獻ス。○中略閏十二月二十

七日左近衛權少將ニ迂ル。二十九日陸奥守ト稱ス。○中略七月十八日幕府命

アリ、逼塞ス。乃チ品川邸ニ移ル。寛文九年己酉十二月若狹守ト稱ス。天和三年

四月十六日、薨。髮嘉心ト號ス。○治家記録貞享四年五月二十三日、自ラノ樂ミト

伊達綱宗筆畫 原寸各一尺四寸五分 東京 伯爵 伊達興宗所藏

三幅對、中石座觀音。左春之山水。右冬之山水。

雄山公○伊達綱宗

七月十八日○萬治三年幕府命アリ、逼塞ス。乃チ品川邸ニ移ル。

肯山公○伊達綱基

略。上三年庚子○萬治八月廿五日、幕府老中命ヲ傳ヒテ曰、一門家老ノ請ニヨリ

襲封セシメ、併セテ父ニ隱居ヲ命ス。兵部大輔伊達宗勝、右京亮田村宗良ヲシ

テ後見セシメ、各三萬石ヲ頒賜セシム。翌日雄山公○伊達綱宗品川別邸ニ移ル。

—東藩史稿

〔參考〕 伊達綱宗

雄山公○伊達綱宗

公諱ハ綱宗、幼名巳之助丸。義山公○伊達忠宗第六子。生母ハ櫛笥氏。寛永十七年

庚辰八月八日仙臺ニ生ル。○中略萬治元年七月義山公薨ス。九月八日登營襲

封ヲ謝シ、助眞ノ太刀馬一頭、裕五十銀子五百枚ヲ獻ス。○中略閏十二月二十

七日左近衛權少將ニ迁ル。二十九日陸奥守ト稱ス。○中略七月十八日幕府命

アリ、逼塞ス。乃チ品川邸ニ移ル。寛文九年己酉十二月若狹守ト稱ス。天和三

年四月十六日、薨。髮嘉心ト號ス。○治家記録貞享四年五月二十三日、自ラノ樂ミト

伊達綱宗筆畫 原寸各一尺四寸五分 東京伯爵伊達興宗所藏

三幅對、中石座觀音。左春之山水。右冬之山水。



七月十八日... 幕府... 品川...
 八月廿五日幕府老中命... 傳七... 門家...
 品川... 伊達宗勝... 右京亮田村宗良...
 三浦... 中... 山... 水... 山... 水...
 品川別邸ニ移ル

参考 徳川幕府 皇古香... 東京 曾習 曾世典宗祖藏
 雄山公

東郷史稿

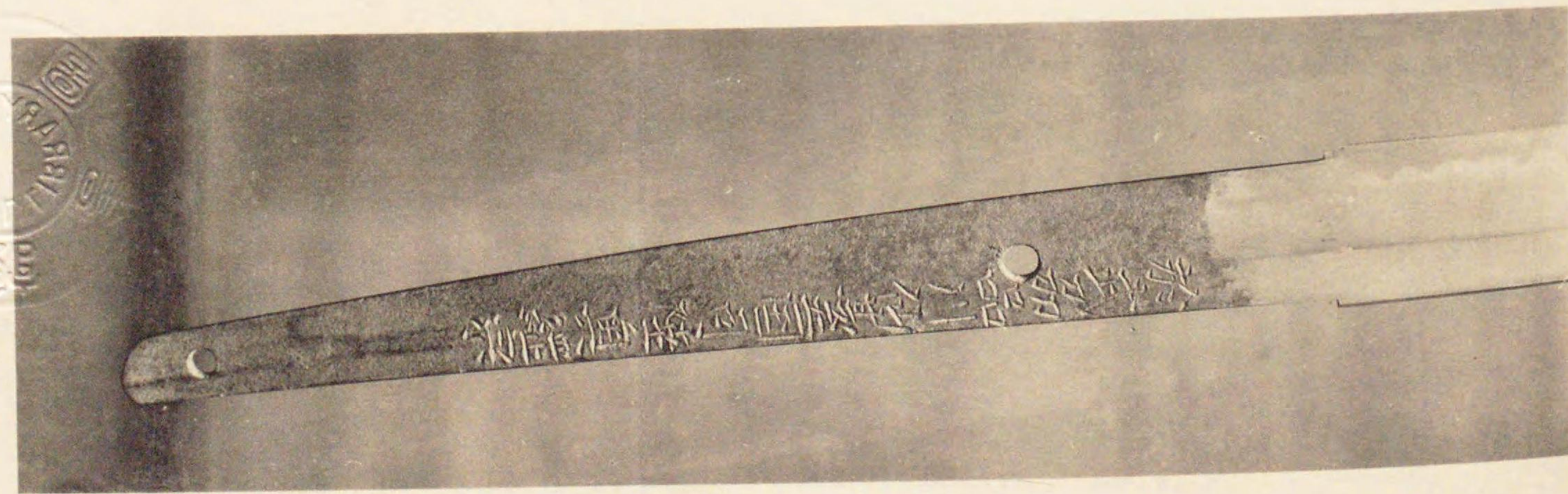
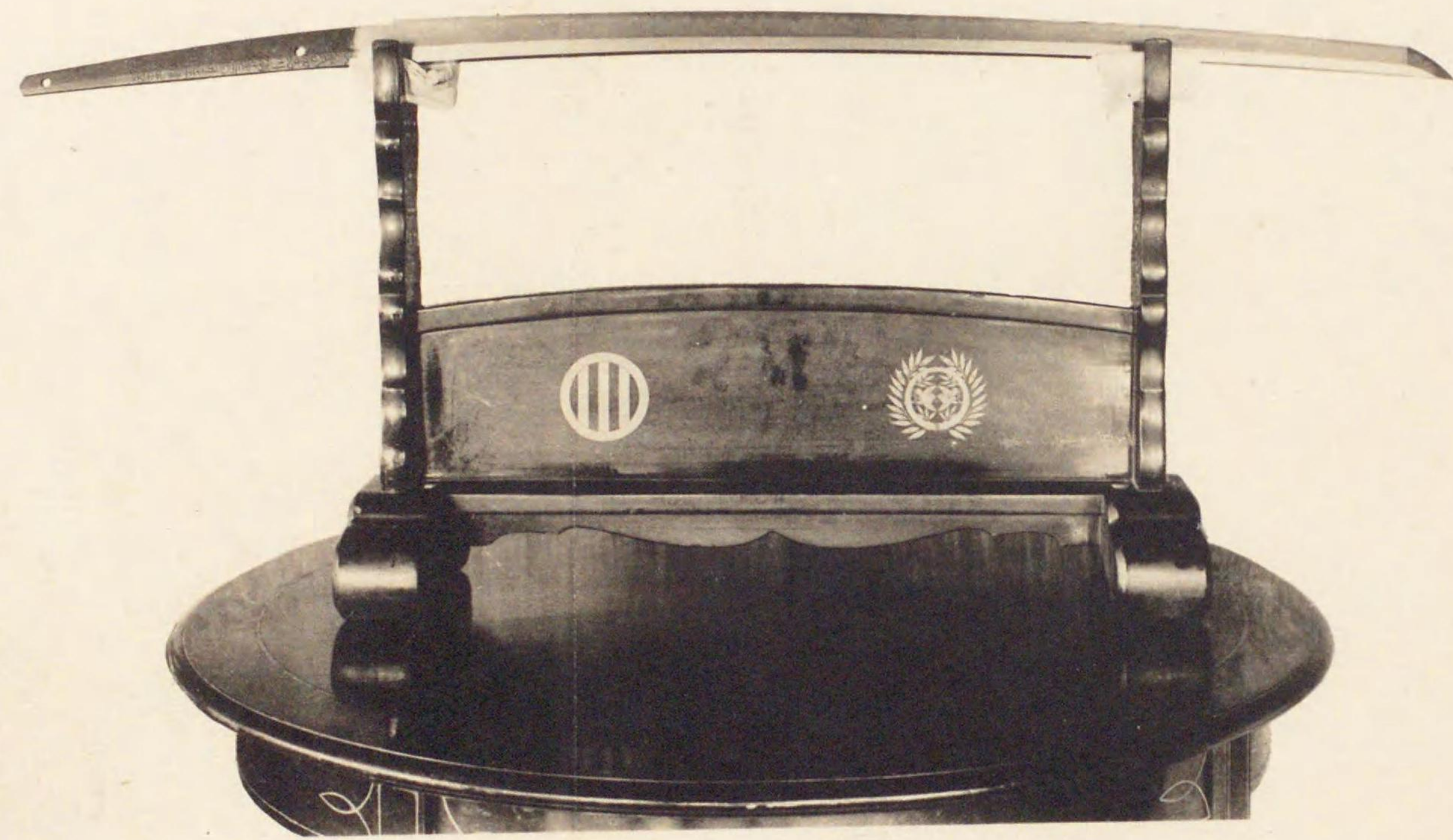
伊達綱宗作刀 原寸長二尺三寸五分 東京伯爵伊達興宗所藏

銘ニ「於武州品川仙臺國司陸奥綱宗」ト有リ。

續三德庵品田前卷圖匠繪與辨宗十卷也。

母 蘇 隣 宗 辨 氏 親 十 三 頁 三 卷 東 京 伊 賀 母 蘇 與 宗 祖 藏





萬二號 廣品 出前 泰園 田圃 興辦 宗子 育り。

冊 影 繪 宗 子 氏 萬 十 三 年 東 京 住 留 冊 影 興 宗 酒 齋

シテ能樂ヲ爲スヲ幕府ヨリ許サル。文正德元年六月四日薨ス、年七十一。譜系系圖並ニ七十二ニ作ル。公病革、瞑目ニ至ルマテ、貞正堅確ナリト云。見性院殿雄山全威大居士ト法諡ス、仙臺瑞鳳寺ニ葬ム。治家廟ヲ善應殿ト云。系圖。公幼ニシテ敏慧、學ヲ好ミ、孜々業ヲ勤ム、封ヲ襲ニ及テ、逆臣原田宗輔カ爲メニ誤ラレ、游蕩度ニ過キ、酒ヲ使フ常ナラス、奸黨誣ルニ瘋疾ヲ以テス。肯公十萬石ヲ分チ、菟裘ノ資ニ給ス、以テ吏員ヲ備フ。公是ニ於テ節ヲ改メ、盃ヲ斷チ身ヲ慎シミ、和歌及琴碁書畫ヲ以テ樂トナス、優遊以テ歳ヲ卒フ。丹青ヲ狩野探幽ニ學ヒ、逸品多シ。治法ヲ國包ニ受ケ、其利蚊龍ヲ斷ツヘシ。○骨董協會雜誌ニ曰、本朝新刀一覽ニ、侯ノ作刀ヲ六級ニ位セリ、專門家ニ位シテ中作ニ列ス、侯ノ名譽ト云ヘシ。新刀辨偽ニ曰、綱宗朝臣ノ戲作、其位世ニ稀ナルモノ也。地鐵細カニ小鈍アリテ、句深シ、大和守安定ニ似タルモアリ、中亂文ナシ。ハ其他諸技ニ通シ、精緻奇功ナラサルナシ。性施子ヲ好ミ、厚ク諸臣ニ給ス、人服セサルナシ。譜系。公ノ詠歌傳ルモノ稀ナリ、今二三首ヲ舉ク。若菜ノ詠ニ、花カタミ木ノメモ春ノ野ニ出テ、雪マノ若菜ケフモ摘マシ。常夏ニ、塵ヲタニスヘシト拂フトコ夏ノ花ニモユルス庭ノシラツユ。先代詠歌集。立カハルケフニ明テハ門ノ松、テトセノハルトイハフモロ人。ケサヨリハ松タテワタシ此宿ニ、千世クミカハスハルノサカツ

キ。續奥海。七男十一女アリ。

——東藩史稿

秤制

廿二日乙亥

○萬治三年紀元三三二〇年七月〇乙亥三正綜覽。

評定所、秤屋善四郎、守隨豊後間

ノ論争ヲ裁シ。坂西三十三國ノ秤ヲ豊後一人ノ進退トシ、善四

郎ノ江戸○武藏國山城大坂○攝津國ニ居住スルコトヲ禁ズ。○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。

秤制事蹟

秤制

坂西三十三國ノ秤ヲ守隨ノ專業タラシム。

○萬治三年七月廿二日。○中略。未上刻止。青夜入南風明。

一、秤屋善四郎事、先年秤之儀守隨々出入之節、善四郎當地に罷下、公儀に訴訟付る、其刻御仕置被仰付之。然ル處豊後儀秤爲本筋處、右出入之時分、豊後事善四郎一言後不申出、掠公儀之段、不届候。向後先年被仰出候通、坂西三十三ヶ國を豊後一人可進退之、善四郎事、城州并大坂、江戸不可致居住者也。

右於評定所申渡之。

——柳營日次記

廿二日○萬治三年七月〇中略。此日令せらるゝは、秤屋善四郎先年秤の事によて守隨豊後と争論し、府に参り上裁をこひしかば、裁判すでに決せられぬ。まかるに守隨が秤の本源たるよしをば、其時善四郎申出すをしかくし置し事、甚以ひがことなり、今よりのち坂西卅三か國の秤は、豊後一人の進退たるへし、善四郎は、府并に山城大坂の地に居住すべからずと也。

——嚴有院殿御實紀

岡山池田氏
深川下屋鋪

是月○萬治三年紀元三三二〇年七月岡山○備前國城主池田光政○松平新太郎天樹院徳川氏千〇

姫。ト屋鋪替ヲ爲シテ、深川○深川市內區ニ下屋鋪ヲ賜フ。○備藩邸考。寛文江戸圖。

岡山池田氏深川下屋鋪 備藩邸考ニ據レバ、

岡山池田氏
深川下屋鋪
事蹟

深川邸

江都城東卅餘町葛飾郡深川大工町ニシテ、新大橋ノ東南高橋ノ南ニ當レリ。此邸ノ處行留リナリシ故引コミ町ト云故ニ此邸ヲ一名引込町ノ御屋敷ト云ヘリ。元此邸ハ天樹院殿○台徳院殿御女、我圓盛夫人ノ御母。ノ御ヤシキナリシヲ萬治三年七月曹源公此時世子。御屋敷北東淨樂寺屋敷略。註ト交易アリテ參ラセラレ度由、天樹院殿ヨリ執政へ御内意アリケレハ、ヤカテ將軍家ノ御聽ニ達シ、其旨ニ任セラル、由台命アリ。此時烈公御在國ナレハ御禮使トシテ村井彌七郎同月廿一日岡山ヲ發シテ江戸ニ赴ク。カクテ曹源公ノ御下タ屋敷タリ。○曹源公居御住。其後寛文ノ初曹源公カリニ此邸ニ移ラセ玉ヒシニヤ、寛文三年烈公深川ノ世子曹源公御事。御ヤシキヘワタラセ玉フ由、其比ノ日記ニ見エタリ。同四市街恢弘時代。

年下谷邸ノ土木成就セシカハ、ヤカテ歸リ住セ玉ヒシナルヘシ。共ニ舊記明文アラサレハ詳ナル事知ヘカラス。此考下谷邸ノ條ニ委シ、依テ爰ニハ其大略ヲ記スノミ。何レ此邸ハ明ヤシキト成テ有シト見エテ、同十二年正月蟹江權右衛門ト云者罪有テ此邸ニテ誅セラレ、歴ニ委シ、履又延寶六年七月十六日丹州殿御家來平松宗直不法ノ事有テ亦此邸ニテ腹切セラレシ事共ニ舊記ニ見エ、其後天和二年ニ至リ此邸御上地ト成ニ依テ、四月廿七日家タ、ミ大崎ヘ引セラル、旨命有テ、徒士大村助九郎入江孫九郎奉行タリ。同五月廿八日此邸地奉行衆受取ラル、ニ依テ、日置左門ヲ初メ其外諸役人立合、御普請奉行大久保甚右衛門、田中孫十郎ヘ引渡ス。猶此方ヨリ番人等ハ置レシニヤ、同六月七日孫十郎ヨリ申シ越シケレハ、明日深川御上ケ屋敷細川豐前守ヘ渡サルニ依テ、只今迄在ル所ノ番人並ニ表借屋ニ居ル所ノ町人、今日中ニ引拂フヘシトノ事ナリ。則此旨ニ從テ此方ノカ、リハ事濟タリ。此邸萬治三年ヨリ天和二年迄我邸タル事廿三年ニシテ廢セラル。其後此邸度々交易等アリシニヤ、今大工町ノ津山家松平越後ノ中屋敷是ナルヘシ。此邸上地ト成シ。由今考ル所ナシ。寛文江戸圖水番所橋ノ東小名木川南岸大工町ノ邊ニ、松平新太郎ト記ス者是也。延寶江戸圖ニハ、松平伊豫守池田綱政。ト有リ。

附記 寺社朱印

〔附記〕 寺社朱印

一、同月○萬治三年七月ニ、日本國中ノ寺社ヘ二百四十萬石ホド御寄附有テ、則御朱印ヲ下サル。
——天享吾妻鑑

米價騰貴

八月五日戊子○萬治三年(紀元二三三)年○戊子(正綜覽)ニ、米價騰貴ニ由リ、幕府與力同心ニ俸米ノ半ヲ貸與シ、十日癸巳○萬治三年(紀元二三三)年○癸巳(正綜覽)。家人ニ歳末給與ス可キ廩米ノ半ヲ支給ス。○嚴有院殿御實紀。萬治三錄。

米價騰貴事蹟

米價騰貴 事實左ノ如シ。

五日○萬治三年八月。○中略。米價騰貴により、番頭物頭建白するをもて、與力同心廩米の半を借給ふ。

十一日○萬治三年八月。○中略。御家人今年の冬賜はる廩米の半を今月給はるへしと觸

——嚴有院殿御實紀

らる。米價騰貴によてふり。
○萬治三年八月十一日早且より小雨、午上刻止、時々降。

一、當暮ニ被下御切米三分二内、唯今半分被下張番出ル。

覺

一、當子冬御切米三分二之内、半分唯今被下間、貳百俵迄之今、十五日迄由良平兵衛山高宇右衛門裏判取之、米請取之儀、同十六日、十九日、廿日、廿一日、廿二日迄、右兩人裏判取之、米受取之義、同廿日より九月廿日迄可限事。

萬治三子八月廿三日

○書人。一、御旗本之面々、當暮御切米之内、半分今月被下。是八木高直ニ付、右之通被仰出之。

柳營日記○萬治三略同。

助役馬増加

六日己丑○萬治三年(紀元二三二)年八月。○己丑三正綜覽。江戸傍近町村ヲシテ傳馬町援助

助役馬増加

ノ役馬ヲ増加セシム。○撰要。永久錄。

助役馬増加 撰要永久錄ヲ抄録ス。

近在役馬増遣可申御證文
萬治三子年七月馬持々左之通願書差出、且明曆二申年十月南傳馬町貳丁目中程ニ多四拾間御用地ニ相成役屋鋪減候ニ付、神尾備前守○元勝。様村越長門守○吉勝。様に御訴訟申上候得之、同年八月六日於御評定所壹疋増被仰付左之通御證文被下候。

但小傳馬町に於外ニ壹疋被仰付候由、駭ち相分リ不申。

乍恐訴狀ニ多申上候。

一、牛車今程大分多罷成、馬之付申荷物一圓無之、何共迷惑仕候間、御○慈悲歎ちひと思召、積申分之荷物御極被成被下、難有可奉存候御事。
一、大八車町中ニ數多、よしらへ置、賃を取馬之付申荷物つませ申御事。
一、品川千壽板橋是三ヶ所之馬共、江戸中に乗こ、方々ニ多駄賃荷物付申故、當所之馬共右三ヶ所ニ參、得之、宿之馬無之、何れも江戸の馬共先々におい通し、何共迷惑仕、其上御定駄賃之外ニ大分くちまへを取申御事。
此三ヶ所ニ多、江戸へ付出し申御荷物次替申、當地方之駄賃も下直ニ可有御座候。

右之通ニ書上ケ申、當所馬持中何共迷惑仕候間、御ちひと思召、御訴訟被成被下候、有難可奉存候以上。

萬治三年子七月廿一日

日比谷貳丁目

九右衛門印

治部右衛門印

外拾壹人。

吉澤主計様

市街恢弘時代

九八三

高野新右衛門様

駄賃馬御座以所之覺

一、鳥越町 野村藤左衛門殿御代官所 名主 勘解由
 一、上野町 同 月行事 忠兵衛
 一、三彌町 同 名主 勘解由
 一、小塚原 同 名主 能圓坊
 一、中村新町 同 名主 圖書
 一、原宿 同 名主 五左衛門
 一、駒込 内、半分ハ野村藤左衛門殿御代官所。 名主 將監
 一、下谷町 同 名主 藤左衛門
 一、谷中 同 名主 久左衛門
 一、花川戸 同 名主 八左衛門
 一、橋場 同 名主 才三郎
 一、今戸 同 名主 長左衛門
 一、三河島 同 名主 八郎左衛門

一、市谷本村 同 庄兵衛
 一、高井土新町 同 庄藏
 一、上大具 内、半分ハ野村藤左衛門殿御代官所。 名主 八郎兵衛
 一、下大具 内、半分ハ野村藤左衛門殿御代官所。 名主 市郎左衛門
 一、牛込大榎 内、通院殿御領所少有り。 名主 四郎左衛門
 一、同所肴町 伊奈半左衛門御代官所。 名主 彌治右衛門
 一、今井本村 同 名主 勘解由
 一、龍戸村 同 名主 利兵衛
 一、櫻田町 同 名主 十三郎
 一、淺府町 同 名主 又左衛門
 一、西ノ久保 同 名主 兵庫
 一、三田 同 名主 五左衛門
 一、芝 同 名主 權左衛門
 一、高なま 同 名主 新左衛門
 一、芝田町 同 名主 治右衛門

- 一、芝金杉 同 權左衛門
- 一、北澤 齋藤攝津守殿御領所。 太郎右衛門
- 一、志保や新町 三浦清左衛門殿御領所。 名主 與惣左衛門
- 一、青山原宿 伊賀衆御領所。 名主 新左衛門
- 一、赤坂一木 同 名主 三郎兵衛
- 一、上大具 内、御鷹匠衆勤兵衛殿御領所。半
殘分ハ野村藤左衛門御代官所。 名主 八郎兵衛
- 一、關口 町年寄衆三人分 甚兵衛
- 一、小日向 同 名主 五左衛門
- 一、傳通院前 同 名主 市郎兵衛
- 一、小石川金杉 同 名主 權右衛門
- 一、同所土取場 同 名主 市郎兵衛
- 一、坂本 東叡山御領所。 名主 庄兵衛
- 一、下谷金杉 増上寺御領所。 名主 治郎左衛門
- 一、巢鴨 同 名主 徳右衛門
- 一、岸村 同 名主 久右衛門

一、駒込 内、半分ハ野村藤左衛門殿御領代。 名主 將 監

一、皮あう久保 同 庄 助

一、そうしがや 持照院御領所。 甚右衛門

一、駒方 知樂院御領所。 名主 長兵衛

一、なみ木 同 名主 太兵衛

一、山之宿 同 名主 清左衛門

一、四谷追分 天釋寺御領所。 忠兵衛

萬治三年子八月五日 南傳馬町 吉澤主計印 高野新右衛門印
大傳馬町 馬込孫兵衛印 佐久間善八印

御奉行所様

如表書之書付差上以間、方々於駄賃取以、兩傳馬町々駄賃取壹ケ年ニ壹疋宛可出之旨、承應二巳十月六日ニ申付以處、今度訴訟申ニ付、當年々兩傳馬町江壹ケ年ニ三疋宛駄賃を取可出之、并傳馬町ニ多鞍判をいたさせ取以、傳馬町下知を可請、若於無同心ニ、方々ニ多駄賃取以儀、可爲無用者也。

子○萬治 八月六日 長 門印 町御奉行村越長門守様
市街恢弘時代

湯治故無加判

備前(朱) 神尾備前守様
 源左衛門印(朱) 御勘定奉行 曾根源左衛門様
 藏入印(朱) 伊丹藏入様
 阿波印(朱) 寺社御奉行 板倉阿波守様
 河内印(朱) 井上河内守様

城廻土堤修築

十五日戊戌

○萬治三年(紀元二三二)年八月。○戊戌(紀元二三二)年八月。

城廻土堤ノ壊破ヲ修築セシム。

○柳營日次記。萬治三錄。萬治遺錄。

城廻土堤修築事蹟

城廻土堤修築

左ノ如シ。

十五日

御書院番組松平伯耆守組

松田善右衛門○勝

同小田越中守組

駒井次郎左衛門○昌

御進物番

桑山主水○榮

同 詩田八郎左衛門○成

右四人被爲召御城廻○萬治三錄。此三字無シ。所々土手破損ニ付、修覆奉行被仰付旨、老中被仰渡。

柳營日次記○萬治三錄同。

十五日○萬治三年八月。○中略。

松田善右衛門

桑原主水

詩田八郎左衛門

駒井次郎左衛門

右、松平越後守屋敷前、飯田町御門脇、其外所々破損修覆奉行被仰付旨、於躑躅之間、豊後守申渡之。
——萬治遺錄

勝盛○次郎吉。四郎三郎。三郎右衛門。善右衛門。

○上 略。寛文元年八月十一日御城廻り土手普請の奉行をつとめしにより、白

銀三十枚をたまふ。

昌勝○長五郎。次郎左衛門。

萬治三年八月十五日仰をうけたまはりて、外郭の土手修理の奉行をつと

め、○下

——寛政重修諸家譜

廿日癸卯

○萬治三年(紀元二三二)年八月。○癸卯(紀元二三二)年八月。

神田明神社○市内。芝神明社○市内。飯

倉八幡社

○市内。麻布區。ニ營造料ヲ給ス。

神田明神社○市内。芝神明社○市内。飯ハ、大災後未ダ

再營スルニ至ラサリシ也。

○柳營日次記。萬治三錄。嚴有院殿御實紀。

神田明神社其他再營 大災後未ダ再建スルニ及バザリシ神田明神社並ニ芝

市街恢弘時代

神田明神社其他再營

神田明神社其他再營事蹟

神明社、飯倉八幡社ヲ營造ス。

○萬治三年八月廿日 前日夜風雨。子雨時々。辰下刻。より大風雨。御城其外大破損。

井上河内守利。正板倉阿波守重。

右被爲召、神田明神四年己酉年正月十八日ニ燒失仕候間、神主御普請被成可被下旨御訴訟申上候處、達上聞爲御造宮金貳千兩被下候。
一、西窪飯倉八幡芝神明兩所及大破候ニ付、金千兩宛被下候。

柳營日次記。○萬治三錄同。

廿一日。○萬治三年八月。○中略。神田明神明曆丁酉の大災にかゝりし後、いまた造營なし得がたき旨、神主願により、金二千兩給はり、芝神明、西窪飯倉八幡宮へは千兩つゝ、○下略。

嚴有院殿御實紀

内神田神社ハ、寛文元年ニ新營成ル。

神田大明神。○中略。

- 一、御本社 間口三間三尺六寸。奥行四間三尺。
- 一、幣殿 間口三間三尺六寸。奥行五間五寸。

内ニ有之ハ

- 一、隨身 壹對 大サ五尺二寸。高サ五尺一寸。
- 一、狗犬 大サ三尺三寸。高サ四尺。
- 一、拜殿 間口九間四尺八寸。奥行四間二尺四寸。

内

- 中央參詣拜所 間口四間一尺四寸。奥行二間四尺五寸。
- 東之間 間口二間四尺七寸。奥行二間四尺五寸。
- 西之間 間口二間四尺七寸。奥行二間四尺五寸。

但、社家詰所。

右從公儀初、御造營元和三年巳年出來、明曆三年御類燒後、寛文元年辛丑年御造營後、延寶七年御修復、翌八年風破ニ多又々御修復、天和二年御類燒、翌亥年御修復、後元祿四年御修復、同十二年御修復、後正徳四年御修復、後享保二酉年御修復、後延享元年御修復、後明和九年御類燒後、當御社天明二寅年御造營ニ御座ハ。

但、最初御造營御社間數も當時御社間數と御同様ニ申傳ハ、書留ハ燒失ニ市街恢弘時代

多相知不申シ。○下略。

芝神明宮亦同シ。

神明宮上 芝 不唱シ小名。

社地拜領地四千七百九十坪、外二百一坪六合六勺。

嚴有院樣御代寬文元年兩宮初社中并諸道具等迄不殘御造營被成下置此節御奉行井上河内守利。○正殿同九百年本社末社等御修復被成下置候御掛り松平次郎左衛門久。○信淺井八郎左衛門忠。○智延寶六午年社中不殘御修復被成下置此節御奉行板倉石見守種。○重殿松平山城守治。○重殿太田攝津守次。○資殿小普請奉行小菅猪右衛門武。○正花井治左衛門義。○定勝屋甚五兵衛直。○利其外神谷長五郎淺井平右衛門須田次郎太郎。○中略。

嚴有院樣御代寬文元年本社內宮別所御造營被成下置候。本社正殿間口二間五尺五寸。與行一幣殿三間。拜殿三間。內宮正殿二間。幣殿二間。拜殿三間。別紙繪圖面之通二御座候。○中略。

武州豐島郡飯倉之内日比谷鄉神明宮者、人王六十六代寬弘年中垂ニ跡於此地一顯ニ威於靈驗一、經ニ幾星霜一而東照權現宮握ニ於字內掌內一時、寄ニ與小社領一尊崇異ニ于他一、累代及幹ニ皇鳥一事何有千萬年乎。祝曰、

御當家源姓嫡裔 以秘以崇 征夷大將軍相繼 禰建再興
瓊宮瑤臺新成 四海安宇武運長 舜殿小堂盡備 五穀豐澄神威盛
當歲 淳和兩院別當氏長者征夷 大將軍右大臣源家綱公再興

神主 齋藤左近大夫 清賀
別當 金 乘 院 玄道
神主 齋藤修理大夫 勝直
謹誌

寬文元年辛丑年八月十六日

奉行 彌大夫 兵太夫
齋藤左近大夫 平太夫
金 乘 院 治太夫
齋藤修理大夫 茂太夫
大工棟梁 長太夫
具塚石見貞房 七太夫

市街恢弘時代

御願主
 征夷大將軍右大臣源家綱公
 奉修營武藏國豐嶋郡日比谷郷飯倉在神明宮
 爲天下泰平御武運長久國家安全矣

奉行
 小菅猪右衛門 淺井平右衛門
 神谷長五郎 勝屋甚五兵衛
 花井治左衛門 須田次郎太郎
 本社内宮丙殿護摩堂神樂所御手洗井大鳥居惣門等
 神主 西東刑部少輔清長
 別當 金剛院法印堯純

延寶六戊午年九月吉祥日

續府内備考

附記
 佐竹氏
 屋鋪買入

〔附記〕 佐竹氏町屋鋪買入
 國典類抄○秋田藩記錄云フ、

鑑照院様御代

萬治三庚子年八月廿日後藤七左衛門祐道御留守居勤中日記。

一、横大工町木原内匠屋敷之内、表京間拾貳間裏〇町並之屋敷、但四間屋敷三間分永代小判五百兩ニ被爲買入、其手付小判百兩先今日相濟入、其小判手前手形ニ有、大越甚右衛門、駒木根數馬ヲ受取入、坂本武兵衛ニ相渡申

以。武兵衛方内匠おとふ大柳八左衛門相渡、口入致入大工與三左衛門八左衛門兩判之手形取入、武兵衛持參入、手前所ニ指置入。殘有四百兩之金子來月中ニ相渡、其刻屋敷請取答ニ申定入。右之手形内膳殿へ爲見申入。
 九月廿二日

一、横大工町木原屋敷之内被召上入代、先達手付ニ小判百兩相渡入。此度四百兩合五百兩今日相渡、屋敷表十二間京間裏〇町並之屋敷請取申入。賣間之手形定入様ニ取入。是ニ御雜用所ノ金子相渡入間、其手形ニ御雜用所ニ置入答ニ得共、末ニ迄之爲ニ間拙者共其手形をハ受取置入。御雜用衆〇手形受取入由手前共之手形を遣申入。一町衆〇之祝儀名主〇銀子壹枚、代物壹貫文宛五人組之組貳人ニ遣入、内壹貫文小遣ニ遣分、銀子壹枚屋敷裁判致入與惣右衛門ニ遣ス分、壹町十六人ニ扇子貳本入一箱澗鍋壹ツ宛指添遣ス由入間、御雜用衆〇申渡入。但先買主ニ武兵衛成入有右之音信物明日持參致入得申渡、此外ニ小判貳兩樽入入是ハ町役萬之用。

眞田信利賜

廿一日甲辰萬治三年紀元二二〇〇年八月〇甲辰三正綜覽。沼田野國上城主眞田信利賀守伊屋鋪ヲ小石川石川區小賜フ。柳營日次記。萬治三錄。

市街恢弘時代

眞田信利賜
邸事蹟

眞田信利賜邸

○萬治三年八月
廿一日晴

眞田伊賀守利○信

右被爲召、小石川阿部播磨守上ヶ屋敷被下旨、被仰渡。

柳營日記○萬治
三錄同。

一、高合三石五斗壹升六合

右是ハ萬治三年八月廿五日眞田伊賀守殿に渡。

——小石川名主安右衛門舊記

寛文江戸圖「サナダイガ」ト有リ。

附記、一、
釀酒制限
其他

〔附記、一〕釀酒制限其他、

○萬治三年八月
廿三日曇時、雨未下刻より夜中不レ止。

御老中出座有之、諸番頭諸物頭諸役人御法度書被仰渡之。所謂、

一、去々年より去迄、酒造候義、累年ニ半分可爲旨、雖相觸、當年打續雨降洪水ニ付、耕作損毛之地有之也。今年も猥ニ米を賣不可、酒造候義、江戸京、奈良堺并各酒之所々、其外諸國在々所々四年已前迄造來候員數、其所々

給人御代官より入念改之、其半分ツクラセ可申、勿論新規之酒屋一切可令停止之、若於致違背と給人御代官可爲越度、萬一蜜々多造候輩と訴人可出、御穿鑿之上其品ニより御褒美之高下有之、急度可被下候。是又讎を不成様ニ可被仰付候。被酒屋と可被行罪科事。

一、耕作損毛之所々百姓可困窮之間、不草臥様ニ入念仕置可在事。

一、先年より如被仰出、萬土民不可成非儀、若又作毛不損亡之所申、掠手負令言混と可被行曲事之事。

一、在レ所々雖爲御鷹場、年内よりカ、シヲイタシ麥マクヘキ事。

一、猪鹿ヲハセ可申、勿論取來所々猶以可爲其通事。

右之條々急度可被申付者也。

萬治三年庚子八月廿三日

——柳營日記

〔附記、一〕旗下士處罰

○萬治三年八月
廿六日晴、未上刻地震。

菊之間御書院番頭御小姓組番頭被爲召、御老中出座、被仰出、御書院番瀧川長門守貞○利組本地七百石村瀨藤十郎清藏養子是々半十郎脇腹也、一度木原全養

市街恢弘時代

九九七

附記、二、
旗下士處
罰

子其ヲ清藏方へ養子。御小姓組戸田相模守照。氏組本知二千五百石小三郎養子村瀬伊左衛門房。重是々多賀外記二男右兩人知行之出入之公事有之處、藤十郎義不届付、今日改易被仰付之。伊猪左衛門事無相違之條、如前々御番相勤可申候由、番頭瀧川長門守戸田相模守ニ被仰渡。但論地五百石被召上、依之猪左衛門二千石被成。右公事發りハ、前々兩人繼祖父村瀬左馬治。重知行高三千石、悴兩人有惣領清藏次男小三郎、兩人之内惣領清藏義父左馬氣ニ入不申ニ付、小三郎を惣領申立、隱居之砌知行分ケ、清藏ニ五百石小三郎ニ二千五百石ト御前帳ニ留ル。雖然清藏義惣領之事ニ有之間、小三郎知行高二千五百石之内内證ニ有五百石下置候様ニト父左馬申ニ付、小三郎任其意高之内五百石分ル也。

公儀内證共ニ清藏千石ニ成、其後又並加増二百石取之、御前帳七百石ニ成。扱清藏實子無之付、右之藤十郎養子ニ仕、九年已前死去。其節藤十郎一ヶ遺言ニ唯今迄之内證ニ有取來候五百石之知行ト、父左馬より下し被置候間、死後必返し申間敷候由申置、次小三郎も實子無之付、右之猪左衛門養子、是も死去。雖然知行高之義、兎角遺言無付、死去以後養子猪左衛門、我等御前帳

二千五百之高ニ有、右之五百石不足之段依申、家來者右之清藏義公事ニ付五百石之知行ニ出入有之、大方落着けべき之處、四ヶ年已後十酉年江戸火事ニ付、諸旗本ハ惣知行高御金被下時分、猪左衛門二千五百石之高ニ有、惣領藤十郎七七百石之高ニ有拜領、頭長門守ハ申分、私義七百石之高ニ有御金被下候段御極仕候。猪左衛門義ハ二千五百石之高ニ有拜領仕候由承之。右之五百石ニ有出入御座候間、双方之御頭衆御相談も可有御座候様存候處ニ、爲無左猪左衛門二千五百石之高之積拜領仕候義、公事ト我等負候様ニ罷成申候間、我等御金拜領仕間敷ト申ニ付、長門守先々致拜領、尤之由雖申一圓承引無之付、左様候ハ、印を付可申間御願候様ニト長門守再三被申付、無是非預ケ置、其金印之儘ニ宿所置、其所立退、依之御穿鑿之上、御奉公仕身之立退事、其上知行出入之公事未埒明之處、藤十郎立退段不届之由ニ有、今日御改易と言也。又藤十郎所存ト立退候ト頭長門守早々御老中へ可申上、左候ハ、公事御聞可有、此時所存之通申上、早速埒明利運ニ可仕所立退、又ハ頭長門守并伊左衛門戸田相模守、右無相談不足ト。
○萬治三年八月
廿七日 晴。○中略。

一、伊澤隼人信。政組大久保文左衛門召仕之下女、去比欠落せしめ、文左衛門不作法之儀有之付、立退し旨、評定所に訴之。文左衛門ハ、彼下女金子多盜取旨、奉行所へ訴之。被遂穿鑿之處、下女取逃之儀、非實事、文左衛門爲御家人、對公儀僞申出事、其科不輕、且不作法之儀依有之、豆州三宅島へ被處流刑之旨、於評定所申渡之。

高田方新第

九月六日己未

〇萬治三年(紀元二三二〇年)〇己未、三正綜覽。

高田ノ方

〇松平忠直夫人徳川氏。

新第成ル。

柳

營日次記。

高田方新第

柳營日次記ニ左ノ如ク見ユ。

高田方新第

事蹟

〇萬治三年九月六日、晴未上刻曇。申下刻ヨリ雨。夜中時々降。〇中略。

一、高田御方新宅造畢、御移徙ニ付、爲御祝儀、銀二百枚、御屏風二双、一荷二種被爲進。但御使ニ奥之上臈近江殿被遣之。

高田御方御内

長谷川刑部

小袖一重。

上臈御方

銀廿枚。

同アサカ

同。

同アサヲ

同百枚。

惣女中へ

——柳營日次記

附記
驛制高札

〔附記〕 驛制高札

一、同月〇萬治三年十月ニ被仰出御定。

一、今年洪水ニ付八木高直、大豆モ其通之由、道中駄賃錢御定ノ外一里十文増、カラ尻ハ五文増ニ當年中可取支。

一、往還ノ輩、次馬次人足、近年甚多付、宿々令困窮候間、雖爲國持大名家中、共ニ一リニ次馬廿五疋、次人足ハ廿五人不可過之、此外人馬入ニ於テハ、其日ノ外跡先へ順々ニ可遣支。

附、人馬凡ニ傳馬次ニテ御定ノ如ク可次之、若追通ス輩アラハ、御穿鑿ノ上人馬不出之町人ノ年寄可作曲支、但廿五疋ノ外ニ馬在合候ハ、其所ニ勝手次第出之、駄賃錢可取之支。

一、乗物一丁ニ次人足六人、山乗物四人ニテ御定ノ人足賃ヲ取相送支。

一、長持一棹三十貫目ヲ限ヘシ。夫ヨリ重キ荷物ハ持ハコフヘカラス。人足一人五貫目ノ荷積ニテ三十貫目ハ人足六人、夫ヨリカロキ荷物ハ貫

目ニシタカヒ人數減少スヘシ。此外何レノ荷物モ可准之也。

一、壹駄荷ノ重目不可過四十貫目、乘掛之荷物五貫目ハ荷ナシニ乘駄賃同前タルヘシ。ソレヨリ重キ荷物ハ本駄賃錢可取之也。

右條々可相守之、若違背之族於在之者、縱雖後日相聞、糺科之輕重或死罪或籠舍或可爲過料者也。如件。

右之御高札翌四年丑三月廿五日重テ被仰出之。但、去年洪水ニ付ト有之、外御文言同前。

驛制下知狀

驛制下知狀

一、同月同日○萬治三年十一月八日道中宿々ヘノ下知狀。

一、御高札之趣其外御法度被仰付候品々、違背之族有之者、道中宿々年寄其月ノ月行更等可被行曲更之旨、可存其旨更。

一、今度御添札之通、宿々難有可奉存候。彌以道中往還之衆、風雨之時分モ縱何様之儀候、公儀御用志不及沙汰下之儀タリト云トモ不存疎略人馬無滯出シ可申更。

一、博奕打其外イタツラモノ、宿中無油斷相改之可申候。勿論遊女置申間敷

候。若置候ハ、其女其所ノ守護人御代官ヘ可申出候。從此方改出候ハ、彼女モ可被行曲更候。尤其所ノ庄屋年寄名主五人組迄悉可被行曲更事。

一、川越錢ノ儀其時々問屋所ニテ備ヒ賃ヲ相定、高直ニ無之様ニ急度可申付候。水出川越候時ハ、問屋ヨリ川端ニ人ヲ付置、近所ノ村々ヨリ川越出候トモ、問屋相定候ヤトヒチンノ外ヲホクトラセ申マシク候。自然於致違背志後日ニ相聞ト云トモ、問屋年寄月行更等可被行曲更、別テ人通リ多キ時分亦ハ風雨ノ節、晝夜トモニ油斷仕マシキ更。

一、荷物之上ニ葵ノ御紋立札ニ不仕様ニ常々往還ノ輩ニ宿々ニテ可申渡之更。

附、町人荷物國大名ノ似セ札仕ヘカラサル更。

右條々道中宿々ニテ急度可申渡者也。

——天享吾妻鑑

〔參考〕萬治三錄ニ、

○萬治三年十一月十二日 未刻方雨降、酉刻方止。

一、東海道筋五十三ヶ所馬次衰微付、御金被爲借旨、老中出座、所々大名家來招之傳、町方ハ三百兩、城下ニ五百兩、都合金貳萬五百兩。

桔槔橋邊地

東京市史稿

一〇〇四

十一月二日甲寅○萬治三年(紀元二三三)○甲寅、三正綜覽。三春○磐城國。城主秋田盛季○安房守。桔槔橋邊○市内。麴町區。地形工事ヲ命セラレ、是ニ至リテ成リ、家士等受賞ス。○柳營日次記。萬治三錄。萬治遺錄。

桔槔橋邊地形事蹟

桔槔橋邊地形

秋田盛季命ヲ受ケテ之ニ當ル。

○萬治三年六月四日晴。○略。

老中退去以後、秋田安房守御普請場へ被罷越ハシ。○萬治三年十一月二日晴。

今度、秋田安房守を桔槔橋向地形引ふらし可申旨被仰付、出來付、家來被下物。

銀三十枚、小袖三、羽織。

安房守家來。○秋田

同廿枚、同三。

神田奥右衛門

同。

大高十、太夫

同。

神尾太郎左衛門

同。

松平原庄兵衛

同。

八木市右衛門

同。

秋田權右衛門

柳營日次記○萬治三錄同。

二日○萬治三年十一月。

銀三十枚、羽折一。

秋田安房守家來

秋田奥左衛門

同二十枚、小袖三、折一。

神成太郎右衛門

松倉庄兵衛

大高十太夫

八木市右衛門

秋田權右衛門

右を桔槔橋之向地形曳平之儀、去比秋田安房守被仰付、出來ニ付被下旨、老中傳之。

傳之。

萬治遺錄

盛季○久松。左近。安房守。從五位下。

萬治三年竹橋門の石垣及び多門等の普請を助く。

寛政重修諸家譜

堀田氏甲邸收公

三日乙卯○萬治三年(紀元二三三)○乙卯、三正綜覽。佐倉○下總國。城主堀田正信○上野介。ノ封

ヲ奪ヒテ信州ニ配流シ、其甲邸ヲ收ス。封事ヲ上リテ時事ヲ論ジ、辭セズシテ采地ニ歸臥シタルヲ以テ也。○柳營日次記。萬治三錄。嚴有院殿御實紀。

堀田氏甲邸收公事蹟

堀田氏甲邸收公 始末左ノ如シ。○萬治三年十月九日晴。○略。

市街恢弘時代

一〇〇五

一、稻葉美濃守午刻退去、是堀田上野介昨廿八日之晝東叡山參詣仕、直ニ御暇も不申上、在所佐倉へ引籠、上様に訴狀一通箱入保科肥後守、阿部豊後守兩人之宛所ニ多差置、仍多美濃守退出、勿論上野介兄弟共不及登城、佐倉堀田上野介ニ爲上使、牧野織部正○成、安藤市郎兵衛○忠、被爲召被遣之。
○萬治三年十月十日夜中方雨。○中略。

一、堀田上野介御暇も不申上、居城佐倉ニ引籠ニ付、彼道中關所被仰付之。

松戸

御鐵砲頭

今井

岡野權左衛門

市川

御持筒頭

今井海手

安藤彦四郎

同

御鐵砲頭

同

坪内又左衛門

同

小笠原安藝守

同

土屋忠兵衛

右之通被仰付、然共先延引可仕候由也。
○萬治三年十一月三日晴。

於芙蓉之間、老中出座、詰衆并諸番頭諸物頭招之、堀田上野介正信今度御暇も不申上、居城佐倉ニ引込、殊ニ時分も可有之處、御不例之節、訴差上、彼書面之内

御取上可被成義無之、重々不届被思召之間、急度雖可被仰付、亡父加賀守正利依爲忤御宥免、弟脇坂中務少ニ御預、是又上野介忤帶刀事、加賀守孫之義、爲御扶持方、一萬石依被下置、居城佐倉城ニ被召上之。右之段、今朝酒井雅樂頭宅へ老中出座、彼一家脇坂中務少招之、上意之趣傳之。佐倉坂○城歟請取朽木民部少、御目付安藤一郎兵衛、猪飼半左衛門可被遣由也。

安藤對馬守○重

新庄越前守○直好

右同所在番被仰付之。半役之積。

○書入堀田上野介儀、今度捧訴狀付、上覽、然ハ御暇不申上、在所へ去月八日罷越、刺御不例之砌、右之仕合、其上彼書面之内、御取上相成子細も無之、重疊不届被思、召候間、嚴重ニ雖可被仰付、亡父加賀守儀、大猷院様御取立之者儀付、弟脇坂中務少輔へ御預、信州飯田へ上野介相越云々、彼領地并佐倉城被召上、實子有之段、被聞召、依之依爲加賀守孫、爲御扶持方、壹萬俵實子帶刀被下之旨。

○萬治三錄城地上收命令ヲ八日ノ事トシ、左ノ如ク記ス。
八日晴。○萬治三年十一月。

佐倉城本丸

二丸

安藤對馬守

新庄越前守

右之通可請取之旨、雅樂頭傳之。

○萬治三年十一月
四日晴○
中略。

右堀田上野介上屋敷番被仰付、彼屋鋪可受取由。

田付四郎兵衛利○景

設樂源右衛門

細田小兵衛

八木二郎右衛門

深谷喜右衛門

御勘定

井出十右衛門

守屋茂兵衛

右佐倉御代官被仰付、可被遣候由也。

○萬治三年十一月
十二日未刻より雨降、酉刻より止。

一、堀田上野介當年知行物成之義、當月十五日迄忤帶刀被下候。家中之者ハ帶刀心次第之由、朽木民部少安藤一郎兵衛猪飼半左衛門被仰渡之。

○萬治三年十一月
十八日庚午。

堀田上野介上屋敷阿部伊豫守○正二被下。○下略。○文參照。

柳營日次記○萬治三
略同。

一、十一月三日○萬治堀田上野介被召、御老中被仰渡趣。其方儀訴狀差上、御暇ヲモ不申上、御不例ノ内ト申シ、佐倉へ引込候。旁以不届被思召候。其上訴狀上覽被遊候處ニ一ツトシテ御用可被遊。更無之、就夫其方儀舍弟中務少輔へ御預ケ、佐倉ノ城ハ被召上候。乍去息更加賀守子ノ儀ニ付、帶刀ニ御合力トシテ御藏米一萬俵被下置之。夫故上野介ハ信州飯田ノ城近所守谷ト云所ニ蟄居、帶刀ハ從五位下ニ叙豐前守ニ任ス。○萬天日錄同。

一、同月○萬治三
年十一月。六日佐倉城請取上使朽木民部少輔植綱并安藤市郎兵衛猪飼半左衛門。城在番ハ安藤對馬守新庄越前守被仰付之。

——天享吾妻鑑

一、萬治三年十一月。

堀田上總介義御暇も不申上在所へ罷越、其上御不例之節訴狀差上、剩へ書狀之内一ツとして御取上可被遊。義無之、重々不届ニ被思召。急度可被仰付。得共、加賀守義御取立、其上御供をも仕。忤之義ニも有之。間、脇坂中務大輔に御願被遊。忤帶刀加賀守孫よて有之故、一萬俵被下。由被仰渡。

佐倉城請取

朽木民部少輔殿

市街恢弘時代

しぐ二人程ふく御免しを蒙り。正信をは淡路國へ移さきて、松平阿波守綱通
よ預けらる。同六年の秋、綱通須賀。卒して、其子淡路守綱矩預人せふる。同八年
五月八日、右大臣家○徳川家綱薨し、さぎ給ひぬ。正信配所よて此由を傳へ聞て、深
く歎き、預人綱矩が許へ文のこして、同月の廿日、剪刀を以て自ら咽をりき切
て死す。卒年四十九歳。
——藩翰譜

一、和田倉内上屋敷
下賜

上地 萬治三年十一月八日、佐倉城地引渡ト共ニ返還。

一、淺草下屋敷

下賜 寛永十三年。月日不詳。

萬治三年上屋敷沒收ニ付移住。

——子爵堀田家回答○宮川藩

阿部正春久
世廣之屋鋪
替

十八日庚午○萬治三年十一月。岩槻○武藏國城主阿部正春○伊豫守。新
ニ上收スル所ノ堀田正信邸○市内ヲ賜ヒ、正春○伊豫守邸○市内ハ、側
衆久世廣之○大和守之ヲ賜フ。廣之○大和守屋鋪火消役屋鋪ト爲リタ
ルヲ以テ也。○柳營日次記。萬治遺錄。

阿部正春久
世廣之屋鋪
替

阿部正春久世廣之屋鋪替

左ノ如シ。

十八日庚午

堀田上野介○正信上屋敷阿部伊豫守○正春ニ被下。伊豫守屋鋪を久世大和守○廣
之。被下。御座之間上意。
——柳營日次記

十八日一月。○中略。

御座之間

阿部伊豫守

右堀田上野介上屋敷被下旨、被仰出之。

久世大和守

——萬治遺錄

十八日一月。○中略。堀田上野介正信の邸を阿部伊豫守正春に給ふ。

——嚴有院殿御實紀

阿部正春賜フ所ノ堀田正信邸ハ、新添江戸之圖内櫻田門外東側ニ「堀田加賀」○正盛
信父。ト有ル者是ナル可シ。寛文江戸圖ニハ「アベイヨ」ト有リ。

久世廣之賜フ所ノ阿部正春邸ハ、寛文江戸圖内櫻田門外南側ニ「久世大和」ト有
リ。其南隣ハ「堀田備中」○正俊也。新添江戸圖前者ヲ「北條出羽」後者ヲ「阿部對馬」○重次

市街恢弘時代

定火消役増置

正春トス。明曆二年七月廿五日正春内櫻田門外南側ノ北條氏上屋敷ニ移ル。

是日○萬治三年(紀元二〇三二年)十一月十八日寄合山口重直○半左衛門内藤重頼○彌三郎ニ火消

役ヲ命シ、定火消二組ヲ増置シ、代官町○市内麴町區及八代洲河岸○市内麴町區

ニ役屋鋪ヲ設ク。○柳營日記。萬治三錄。萬治遺錄。

定火消役増置 二組ヲ増置ス。

定火消役増置事蹟

○萬治三年十一月十八日庚午。

○上略。酒井長門守○忠重坂部三十郎○廣利兩屋敷、山口半左衛門○重直ニ被下之、定

火消番被仰付。久世大和守代官町屋敷内藤彌三郎○重頼被下之。定火消番被仰

付。何々與力六騎、同心三十人御預ケ也。○三百人扶持被下。屋敷作事料被下。

——柳營日記○萬治三錄略同。

十八日○萬治三年十一月

酒井長門守上屋敷坂部三十郎元屋敷、山口半左衛門ニ被下、三百人扶持ツ、

引料金子等被下旨、上意之趣老中傳之。——萬治遺錄

十八日○萬治三年十一月寄合山口半左衛門重直内藤彌三郎重頼定火消役命せ

られ、與力六騎、同心三十人屬せられ、月俸三百口并に作事料を下さる。

——嚴有院殿御實紀

十一月十八日○萬治三年被仰付し。

八代後ウシ

山口半左衛門重直。

新規火消役

内藤彌三郎重頼。

——慶延略記

與力六騎、同心三十人ツ、御預ケ。

火消役

萬治三年庚子十一月十八日増二組合八組山口平兵衛重直内藤彌三郎重頼、八

代洲河岸代官町後四谷御門内。

——吏徴

重直○半左衛門平兵衛。

三年○萬治十一月十八日定火消とふり、寛文元年十二月二十八日布衣を着す

ることをゆるさる。

重頼○彌三郎若狭守。伊賀守。大和守。從五位下。侍從。從四位下。

萬治三年十一月十八日定火消とふり、○下略。——寛政重修諸家譜

山口重直役屋鋪ハ、新添江戸之圖八代洲河岸ニ酒部三十「酒井長門」ト有リ。是也。

寛文江戸圖「山口半左火消やしき」ト記ス。

市街恢弘時代

右之通老中傳之。

——萬治遺錄

玉川

○萬治三年十二月五日丙戌。早且より西風吹。午刻曇。

一、内カシ知樂院上ケ屋敷之内、半分玉川ニ被下之。
○萬治三年十二月九日。時々雨。午刻より晴。

中條左京了以多被爲召去頃屋敷替被仰付爲引料金貳百兩可被下老中出座
廿五日○萬治四年四月○中略。

中條左京

右屋鋪去頃就御用替被下之之節引料金雖被下之今日檜木三千丁被下旨
美濃守傳之。

——柳營日記

九日○萬治三年十月○中略。

中條左京

御醫師良

意

右今度屋敷御用ニ付る被召上替地被下之引領として金子貳百兩ツ被下
之。

——萬治遺錄

一、高四石七斗壹合八勺

右是ハ萬治三年庚子十二月六日石川土佐守殿に渡。

——小石川原町名主安右衛門舊記

是年月日不詳左ノ賜宅者有リ。

佐野久綱 木挽町築地ニ賜宅ス。江戸方角安見圖鑑今ノ築地二町目ノ地ニサ
ノ吉ノ丞ト記ス者其處ナル可シ。

久綱○小吉。後吉兵衛。隱居雲峯。
○佐野。

萬治三庚子年月日不知木挽町築地屋敷七百五拾坪新規拜領仕。

——寬政呈譜

大田正忠

大田正忠 寬政呈譜ニ、
正忠 又十郎。大田加兵衛。

嚴有院様御代萬治三庚子年裏六番町ニ居屋敷拜領仕。

飯河盛澄 或ハ是頃ノ賜宅歟。

盛澄○甚四郎。
○飯河。

萬治二亥年七月四日大御番中根日向守組年月日不知裏六番町ニ居屋敷被
下之。

——寬政呈譜

市街恢弘時代

佐野久綱

飯河盛澄

上野本院及東海寺修理

上野本院及東海寺修理及事蹟

廿四日乙巳○萬治三年(紀元二三二〇)乙巳三正綜覽。上野本院○市内下谷區。品川東海寺○武蔵國荏原郡。

ヲ修理ス。○柳營日記。萬治三年八月。

上野本院及東海寺修理 萬治三年八月廿四日作事奉行ヲシテ上野本院ノ破

損ヲ查檢セシメ、十一月廿四日品川東海寺ト共ニ修理セシム。

○萬治三年八月廿四日未上刻より止陰、未下刻よ北風、夜入止雨甚。○中略。

舟越伊豫守○永景行。

牧野織部正○成常行。

木原内匠

右、上野本院御破損ニ付、御普請可被仰付之候ニ多、見分被遣之。

廿四日○丙子。早旦雨、夜入止終。

一、今度上野本院并品川東海寺兩所依爲被損修復爲奉行、

上野。

同。

品川。

同。

御小性組本多土佐守組

三好備前守富。長

御書院番前津田羽守組

稻葉次左衛門定。正

同酒井飛騨守組

戸川平右衛門利。安

御小性組三枝攝津守組

久留嶋半八郎。貞。通

——柳營日記○萬治

右兩人宛、被仰付之。
廿四日○萬治三年十

稻葉治左衛門 三好備前守

右、上野本院破損ニ付、修復懸リ被仰付之。

土川平右衛門 久留島半八郎

右東海寺破損ニ付、修復懸リ被仰付之。

廿二日○寛文元年八月。○中略。

東叡山本院修復出來、今日御移徙ニ付、日光御門跡に上使吉良上野介ヲ以、御

菓子一箱、梨子被遣之。

寛文元年十月二日工成リテ、奉行受賞スルコト、下ニ記ス。

〔附記〕 門衛人員

教令類纂ヲ抄ス。

萬治三年十二月廿一日 一、御城近邊御門番人數之覺書被遣以所

大手御門

一、馬上九人、内番頭壹人。 一、徒侍三人。

市街恢弘時代

附記
門衛人員

- 一、弓拾挺、足輕十人。
- 一、鐵炮廿挺、足輕廿人。
- 一、鑓貳十本、中間廿人。
- 一、挑燈三十。

節句御禮日ニテ、常々人數一倍可出之。

但、中間を可爲常之通以上。

内櫻田

- 一、馬上七人、内番頭壹人。
- 一、徒侍貳人。

- 一、弓十挺、足輕十人。
- 一、鐵炮十五挺、足輕十五人。

- 一、鑓十五本、中間十五人。
- 一、挑燈貳十五。

節句御禮日ニテ、常々人數一倍遣之へし。

但、中間を常之通とるへく以上。

外櫻田、和田倉御門

- 一、馬上三人。
- 一、徒侍貳人。

- 一、弓五張。
- 一、鐵炮五挺。

- 一、長柄十本。
- 一、津く棒壹本。

- 一、さすまた壹本。
- 一、もちり壹本。

- 一、挑燈八ツ

以上。

鍛冶橋、吳服橋御門

- 一、侍貳人。
- 一、徒侍貳人。

- 一、弓五張。
- 一、鐵炮五挺。

- 一、長柄十本。
- 一、つく棒壹本。

- 一、さすまた壹本。
- 一、もちり壹本。

- 一、挑燈六ツ。
- 右大成令。

上野孔子廟修理

上野孔子廟修理事蹟

十二月廿五日丙午〇〇萬治三年紀元二三二儒員林春勝〇春ニ金ヲ給シ

テ、上野孔子廟〇市内下谷區ヲ修理セシム。〇萬治遺錄。殿有院殿御實紀。

上野孔子廟修理 八、

廿五日〇萬治三年十月

黃金五百匁。

春

齋〇林春勝

右東叡山孔子堂令被損修覆可仕旨被仰出之拜領被仰付之。

——萬治遺錄

廿五日○萬治三年十月。儒役林春齋春勝に金五百兩給ふ。忍岡の聖廟修理のためとぞ。

附記
淺草米廩
修理

〔附記〕 淺草米廩修理

○萬治三年十二月廿六日曇巳下刻方晴。

金貳枚。

小細工奉行
備中加右衛門

是ハ、淺草御藏作事奉行仕ニ付テ被下之。

——萬治三錄

是年

○萬治三年(紀元二二三二〇年)

小田原

○相模國

城主稻葉正則

○美濃守

築地海面

○市內京橋區

ヲ賜ヒテ別業トス。

○子爵稻葉家文書

稻葉正則賜地

子爵稻葉家文書○淀二、藩

築地壹萬百六拾坪。

萬治三午○子歟。年海面拜領。翌年々普請。寛文二寅二月廿五日南之方後地拜領。

寛文江戸圖築地淺野氏

○松平ハマツイ

邸西ニヨイナバミノ。ト見ユル者其處歟。

〔附記〕

内藤氏柳原屋鋪足地

萬治三年柳原屋敷足地九百貳拾四坪受領。合計三千四百三拾四坪。

附記
内藤氏
柳原屋鋪
足地

稻葉正則賜
地
築地壹萬百六拾坪

稻葉正則筆蹟

東京 池田金太郎所藏

廿五日○萬治三年十月。儒役林春齋春勝に金五百兩給ふ。忍岡の聖廟修理のためとぞ。

附記
淺草米廩
修理

〔附記〕 淺草米廩修理

○萬治三年十二月廿六日曇、巳下刻方晴。

金貳枚。

小細工奉行
備中加右衛門

是ハ、淺草御藏作事奉行仕ニ付、被下之。

——萬治三錄

是年

元○萬治三年(紀)
二○三二○年

小田原

模○相國

城主稻葉正則

濃○美守

築地海面京橋區

ヲ賜ヒテ別業トス。○子爵稻葉家文書

稻葉正則賜地

子爵稻葉家文書○從二、

築地壹萬百六拾坪。

萬治三年○子歟。年海面拜領。翌年々普請。寛文二寅二月廿五日南之方後地拜領。

領。

寛文江戸圖築地淺野氏ハ○松平イマツ。邸西ニ、イナバミノ。ト見ユル者其處歟。

〔附記〕

内藤氏柳原屋鋪足地

萬治三年柳原屋敷足地九百貳拾四坪受領。合計三千四百三拾四坪。

稻葉正則賜地

稻葉正則賜地事蹟

附記
内藤氏柳原屋鋪足地

稻葉正則筆蹟

東京 池田金太郎所藏

東京市史稿

廿五日○萬治三年(紀)十橋役林壽齋奉應に金五百兩給ふ忍岡の聖廟修理のため
とぞ。 鎌有院殿御實紀

附記
淺草米庫

〔附記〕淺草米庫修理

○萬治三年十一月廿六日癸巳下朔方晴。

金貳拾。

小細工奉行
備中加右衛門

附記
稻葉正則賜

是ハ淺草御藏作事奉行仕ニ付多被下之

是年元二二三〇年(紀)小田原〇相城主稻葉正則〇美築地海面〇市内

ヲ賜〇子爵別業〇子爵下見〇子爵ス。東〇子爵京〇子爵並田金太〇子爵浪〇子爵蕨

稻葉正則賜地 子爵稻葉家文書〇流第ニ

築地壹萬百六拾坪。

萬治三年〇子秋年海面拜領翌年方普請寛文二寅二月廿五日南之方後地拜

領。

寛文江戸圖築地淺野氏〇松平邸西ニイナバエノト見ユル者其處歟

〔附記〕内藤氏柳原屋鋪足地

萬治三年柳原屋敷足地九百貳拾四坪受領合計三千四百三拾四坪

附記
内藤氏柳原屋敷



石川氏抱屋鋪

——子爵内藤家回答母澤

岩村藩松平氏ノ祖乗政石川氏ヲ稱シ、慶安四年八月十六日美作守ニ任シ、承應元年六月四日小性ト爲リ、同二年十月能登守ト改メ、寛文二年四月七日御小性組番頭兼奥ニ轉シ、同三年四月再ヒ美作守ト改ム。

岩村藩松平家

一、代々木村抱屋敷。

購入 萬治三年月日不知。

——子爵松平家回答岩村藩

青山上水鑿通

青山上水ヲ通ス。青山赤坂区内赤坂赤坂区内麻布麻布区内方面ニ市街邸宅

ノ擴弘スルヲ推ス可シ。上水篇参照。

青山上水鑿通事蹟

青山上水鑿通 上水篇ニ具記ス。

略。上 去文政九戌年五月御代官平岩右膳様々御尋之節、上水通筋御書付出し、間、右寫左ニ申上し。

一、青山上水新規掛渡、萬治三庚子年初多出來、右水口を、四谷大木戶外水門垣根外々木樋ニ多水口を附、南之方ニ裏大番町通々、東之方横町通、夫々表

市街恢弘時代

大番町森川出羽守久能和泉守屋敷前青山六道ノ辻出夫々青山丹後守下屋鋪前紀伊殿中屋敷後通、青山西門前、青山大通紀伊殿辻番所前ニ有。二筋ニ相成、壹筋ヲ東之方ニ、赤坂火消屋敷脇邊迄相掛、一筋ヲ紀伊殿辻番所前横町、青山丹後守下屋敷内、足輕町通り、龍土町、谷出羽守、鍋島攝津守屋敷前通、六本木町有馬宮内屋敷前ニ有。二筋ニ相成、北之方ニ、市兵衛町通、石川主水稻垣安藝守屋敷前通り、石尾七兵衛屋敷前、榎坂迄、壹筋ヲ六本木町ノ飯倉片町上杉彈正大弼下屋敷前通りニ有。二筋ニ相成、壹筋ヲ飯倉町通四ツ辻ニ出、壹筋ヲ同朋町秋田信濃守屋敷脇通りニ有。又二筋ニ相成、西之方ニ芝新堀同朋町、東之方ニ京極采女屋敷前迄相懸リ。右ニ凡大通樋筋ニカリ如此。まの上水享保七寅年十月ノ相止御書付記有之。萬治三子年初、青山上水新規出來、享保七寅年十月相止由、別紙廉々之内、其村ニ有。相心得居ハ儀ヲ書付ニ致差出可申。尤書留等々無之、不相分ハハ、以書付來ル十日迄ニ否可申出。

平岩右膳役所。

寺社起立轉移

寺社ノ起立轉移シタル者若干有リ。○文政町方書上。府内諸寺社書。

文政町方書上

寺社起立轉移

寺社起立轉移 内、本所拓開ニ伴ヒテ起立シタル者有リ、復興施設ニ基ク轉移亦有リ。

第六天神社

第六天神社 本所拓開ニ伴ヘル起立ナル可シ。荒井町ニ起立ス。南本所荒井町第六天神社同所番場町普賢寺持

社務和明院

一、第六天神宮御除地 東表口貳間。西裏幅貳間。南北裏行貳拾四間半。

當社之萬治三庚子年起立之由、已前々社之建坪別紙繪圖面并前書之通社地當時之地坪ニ有罷在。社地壹畝拾九步御除地ニ有御座。右神體ニ童子形ニ有岩座之上ニ坐し、左右之手を仰向合、其手之上ニ瓊矛ヲ寶珠ヲ持、長ケ五寸五分、岩座共惣丈六寸五分。作人不知。

——文政寺社書上

八幡社 起立年代ノ詳ナルヲ知ラス。萬治三年ノ縁起有レハ、姑ク此ニ收ム。

八幡社 千駄ヶ谷

社地瑞圓寺領御朱印之内。三千三百五坪、内門前町在。

神龜年間勸請之由申傳候得共詳ふる儀相知不申候。○中略。

江府豊島郡澁谷庄千駄箇谷惣鎮守鳩森正八幡宮縁起

當山鎮守應神天皇初名譽田天皇又號胎中天皇、居于大和國輕島豊明宮、召博

市街恢弘時代

士於百濟國。於時經史始到。而太子以下咸皈心習學。實本朝經學之始也。欽明天皇三十一年冬天。皇現于肥後菱形池邊。託民家之兒曰。我是人皇第十六代。譽田八幡也。垂跡于諸州。而今來于茲。厥後差勅使。遷鎮座於豐前國宇佐宮。以上依神皇正統記又譽田緣起曰。垂跡于豐前國葦瀨馬城峰。稱石鉢權現。又按舊記。欽明帝之時。天皇曰。吾是譽田天皇廣幡八幡也。又名護國憲。靈歟。馱威身神大自在菩薩。桓武帝延曆二年五月。天皇曰。我無量劫來。化生三有。修善巧方便。濟度諸衆生。號象爲大自在王菩薩云。聖德皇太子將欲退治守屋。一作物部。之時。一七日間。詣譽田八幡宮。一夕有憲夢。越如所夢之憲像也。裝甲胄。跨白馬。長九寸形。陽神功皇后春日明神之兩像。長一尺二寸。形于十二月。皆是法相。無所不具焉。其所彫刻。不可勝計也。奉安諸州。專爲國家昇平武運。長久。凡抽丹悃懇禱者。無不成諸願。吾千馱箇谷鳩森之三尊。是其之一也。然廟之立神龜年間。是傳後人之口碑耳。不知昉於其微細也。姑闕焉。在昔澁谷金丸圍于大敵。命已危。而詣當社懇禱。八幡大菩薩。則敵陣俄破。又詣神前。祈念明日之軍。得勝利之間。幣殿震動。忽若宮中衆馬爭馳。大嘶鑣聲。大響。士卒爲奇異之思。既而欲歸時。從寫居內。而一箭降矣。金丸拜受而歸。翌日敵陣如破竹。不日而唱凱歌。夫誠則必感。感則必驗。驗則必不退。不退則必成。

者乎。於是金丸官領澁谷七箇之庄。則守□尊惠心僧都之作一寸八分彌陀如來。奉納當社。以爲本地佛。且添所賜之一箭於百箇。而奉返也。既歷年久而只一箭根耳。今猶存矣。信希世之寶也。繪神士庶覽者。罔不嘖歎。先是仁和二年四月十四日。菅公詣譽田八幡宮之時。神童忽現。與寶劍一揮。世傳謂是板其例者乎。其後金丸沒祭於澁谷。勸請當社八幡菩薩。爾來遠近閭巷。之群品家神慮者。爾日夥矣。山僧以來。執視彼憲境。方百畝。有奇巍然。當前者。天正年間。所築富士峰也。蒼杉來道樹間。絡繹如凍蟻。移穴者。捧供獻華。產子之往來也。左顧東北。則垣周者。離館諸邸也。右顧西南。則跡轉山廻。谷深雲密。竹樹蒼々焉。不可按而備書。恰合尊像住持之憲境也。余偶續緣起。字畫寢沒。且舛繕甚焉。只恐其事而湮沒。不揣庸鄙。再詳記之。非敢何其所好色也。以傳諸將來云。

維時萬治三庚子年九月

府內備考

長慶寺 寺地是年除地ト爲ル。

越後國村上領耕雲寺末

禪曹洞宗

江戶深川森下町

蟠龍山 長慶寺

略。上 寬永七年。年方三拾壹年。程相過。萬治三年之頃。地面御改有之。其節德山五

兵衛政。殿に地割御奉行被仰付。當寺地面も除地ニ相成申し。

市街恢弘時代

— 文政寺社書上

所謂長慶寺ハ、府内誌殘編左ノ如ク記ス者是也。

長慶寺 森下町ニアリ、蟠龍山ト號ス、越後國村上領耕雲寺ノ末ナリ。寺傳ニ往年此地ニ蟠龍松ト呼ル老松アリテ、寛永七年開祖大事不安此樹陰ニ草庵ヲ結ヒ居住シケルカ、一日大猷院殿御放鷹ノ路次御休憩アリシニ、不安病テ臥シケレハ病症ヲ御尋アリシニ、君トモ知リ奉ラス醫師板坂ト齋カ藥ヲ服シケルカ効驗更ニ無キ由ヲ答上シカハ、御所持ノ御藥ヲ賜ハリ、平愈ニ及ハ、登營スヘシト上意アリケレハ、不安ハ驚キ拜謝シ奉リシトソ。斯テ不安平愈ノ後屢登營シ拜謁シ奉リ、其頃三丸御修築アリテ不安カ庵室ノ近傍ニ材木ヲ置レシカハ、其事ヲ奉ハル酒井雅樂頭及ヒ松平大和守ニ就キ、餘材ヲ拜賜シテ當寺ヲ創建シ、蟠龍山天壽院長慶寺ト號シ、本寺二十三世一空全瑣ヲ勸請シテ開山トナシ、不安ハ二世ニ居レリ。後天壽院ノ唱ハ憚ル事アリテ廢スト云フ。全瑣ハ寛永三年十月三日寂シ、不安ハ延寶七年四月十六日寂ス。本尊釋迦ヲ安ス、脇立ハ迦葉阿難又達、大權ヲ置ク。境内二千百五十坪餘、除地ナリ。○中略。

鐘樓。

稻荷社 天壽稻荷ト唱フ、境内ノ鎮守トス、白山權現ヲ合祀ス。

三佛堂 行基作ノ不動及ヒ正觀音、千手觀音、秘佛ノ藥師一龕ヲ置ク。

觀音堂。 — 府内誌殘編

長光寺

長光寺 湯島天神通ヨリ下谷ニ移ル。

一、起立ハ天正二戌年、但シ地面ハ拜領地。

一、境内表口貳拾七間半、裏行拾六間、惣坪數四百四拾坪。

一、當寺起立之節、湯島天神通ニ寺有之ハ、明曆三百年大火事之節致類燒ハ

ニ付、其砌當所ニ替地致拜領ハ、萬治三子年當地ヘ移リ申ハ。

一、本寺ハ京都知恩院末寺ニシテ、湯嶋山攝取院長光寺ト申ハ。

— 文政寺社書上

京都知恩院末
湯嶋山攝取院長光寺 境内四百

下谷坂本

起立ハ天正二戌年、但湯島天神通寺地有之ハ、處、明曆三百年大火之節致類燒

ハニ付、其砌當所ニ替地拜領仕、萬治三子年當地ニ引移ハ。

— 府内備考

天榮寺

天榮寺 丸山ヨリ駒込ニ移ル。

- 一、宗旨を浄土宗京都知恩院末ニ御座候。
- 一、寺號之儀を地久山仙壽院天英寺ト申候所、家宣公御臺様御他界天英院様ニ奉申上候ニ付、其節文字差合天榮寺ニ改申候之由御座候。略。○中
- 一、境内鎮守稻荷明神、是を古來有之白鳥社ト申傳候。倉稻魂命、日本武尊、火揚命三社勸請也。白雉二辛亥年五月午日祭之所也。御座候。昔古ノ日頃駒込山徳業院舊地萬治三庚子年三月本郷丸山ノ當地ニ引移リ、徳業院當寺三世大譽寛善和尚へ譲リ、此地を去リ候由舊記ニ御座候。
- 一、鎮守社前ニ皂莢ノ木壹本、石銘有之候儀を、當住持代建立、尤皂莢ノ木を昔古より神木ニテ御座候處、明曆三百年正月十八日大火之節社神木共燒失、其後類し候木植有之候。略。○中
- 一、起立之古跡を元和三巳年本郷丸山菊坂之臺也。明曆三丁酉年正月十八日類燒、萬治二己亥年迄四拾三年右之所ニ在寺、御替地拜領仕駒込ニ引移ル。

——文政寺社書上

本通寺

本通寺 上野町ヨリ移テ谷中三崎町ニ借地ス。

- 一、日蓮宗 越後蒲原郡本成寺村本成寺末 法榮山本通寺
 - 一、起立 慶長十六亥年八丁堀ニ有地所拜領、町名不知。寛永十二亥年同所御用地ニ被召上。
 - 一、下谷上野町ニ有借地仕、又候同所引拂。
 - 一、萬治三年子年ノ當所○谷中三崎町。禪宗玉林寺領之内貳百貳拾五坪借地。
- 文政寺社書上
- 本通寺 三崎町ニアリ、法榮山ト號ス。越後國蒲原郡本成寺村本成寺ノ末ナリ。慶長十六年八丁堀ニ起立セシカ、寛永十二年彼地御用地トナリ、一旦下谷上野町ノ地ヲ借地シテ移リ、萬治三年今ノ地ヲ借地シテ移轉セシト云フ。此地ハ玉林寺ノ境内ナリ。○中境内貳百廿五坪借地ナリ。

——府内誌殘編

徳養寺

徳養寺 芝岸町ヨリ麻布本村町ニ轉ス。

築地本願寺末
麻布本村仲町
浄土真宗 岸照山 徳養寺○中
無院號。略。

起立を寛永五辰年芝岸町ニ有草菴を取立、寛永十六年東本願寺宣如上人ノ市街恢弘時代

德養寺々申寺號并木像御免ニ多一寺往職々相成正保二百年迄十八年之間起立之地ニ罷在候所増上寺水道御用地々して被召上候ニ付増上寺門前岸町ニ多致借地十五年住居其後萬治三子年増上寺に右地所被召上候兩所ニ多都合三十三年之間住居罷在候其節大猷院様御諷經申上候尤記録ハ先年致類燒候其後萬治三子年ニ麻布本村町西臺に御年貢地百五拾七坪代地被仰付此所ニ引越五拾五年之間住居仕

——文政寺社書上

明源寺

明源寺 下高輪村ニ寺地ヲ買得ス。

古跡御年貢地

京都東六條本願寺末

淨土眞宗 光輪山明源寺

一、當寺草創之儀々寛永三寅年芝田町ニ多起立仕寅年々子年迄右田町ニ罷在_{○中}處御用地ニ多相成_{○略}哉慶安元子年當時之場處に引移申_{○中}。但境内之儀々下高輪村百姓八右衛門居屋敷之内六拾坪萬治三子年九月廿一日買受_{○中}いと申事ニ御座_{○中}。慶安元子年々萬治三子年迄々全_{○中}借地々相見申_{○中}。度々類燒ニ多舊記等燒失仕委敷相知_{○中}レ不申_{○中}。元祿五申年五月八日御法事ニ付古跡ニ被仰付_{○中}。段同月九日寺社御奉行本多紀伊守_{○中}。正

貞岩寺

貞岩寺 開基ノ寂年ニ因ミ姑ク此ニ附録ス。

様於御宅被仰渡之_{○中}。門前町屋古來々無御座_{○中}。——文政寺社書上

淺草天嶽末寺 淨土宗 淺草新鳥越町 退代山不斷院貞岩寺

一、本尊阿彌陀如來三尊尤座像作人々不相知。

一、開山深蓮社心譽上人全阿受頓大和尚萬治三庚子年八月十二日入寂ス。俗名不相知。

一、開基々天嶽院二代目全阿受頓和尚則開基建立成。

一、引地之年代書面ニ無之相尋_{○中}處本寺天嶽院先年馬喰町ニ在_{○中}之_{○中}節二世全阿受頓和尚當町に開基之由と申_{○中}。——文政寺社書上

西方寺 起立ノ年代ヲ知ラズ。開基開山萬治三年ヲ以テ寂ス。

一、西方寺 淺草寺領年貢地百八十坪道照院_{○中}借地百七十六坪、_{○中}三百五十六坪。御朱印地持添地等無_{○中}御座_{○中}。

西方寺

一、淨土宗本所押上大雲寺末寺。

一、弘願山專稱院西方寺本尊立像汗掛之彌陀と稱_{○中}。道哲の念持佛と申傳_{○中}。長三尺二寸、惠仁僧都之作、草創相分_{○中}り不申_{○中}。

市街恢弘時代

- 一、開山道蓮社正譽上人玄育念死大和尚。俗名相分り不申し。萬治三子年正月廿二日遷化ス。
- 一、開基順譽無邊光道哲大徳。俗名相分り不申し。萬治三子年十二月廿五日死ス。

——文政寺社書上

松應寺

松應寺 開山悅洲是年寂ス。

- 一、境内 貳百七拾壹坪。金龍寺拜領地之内借地。起立年曆相知不申し。
- 一、曹洞宗 本寺淺草田原町貳丁目大松寺。
- 一、萬壽山松應寺

——文政寺社書上

- 一、開山悅洲和尚。萬治三年三月十日示寂。
- 松應寺 八軒寺町ニアリ。萬壽山下號ス。本寺前寺ニ同シ。起立年代詳ナラス。
- 開山悅洲萬治三年三月十日寂ス。本尊華嚴釋迦文殊普賢ヲ安ス。境内二百七十一坪。隣寺金龍寺拜領地ノ内ヲ借地セリ。

——府内誌殘編

龍泉院

龍泉院 牛込中里村ヨリ寶泉寺内ニ轉ス。

- 一、先規方除之。當地稻荷不知年數。

同所(○牛込) 本寺東叡山 天台宗 寶泉寺

- 一、宮地三千坪、内六百七拾五坪年貢地。
- 一、寺年數九拾年。

牛込天台宗寶泉寺境内寺院屋鋪御改以前、年貢地共四千四百貳拾七坪、内千四百貳拾七坪を眞言宗龍泉院日蓮宗法輪寺屋鋪ニ引。此兩寺ハ最前祖心領内中里村居住之處。龍泉院ハ萬治三子年、法輪寺ハ寛文貳寅年祖心指圖を以寶泉寺境内除地之内ニ引移之。寛文八申年寺院屋鋪御改之節、右替地不渡ニ付、殘三千坪計御帳面ニ相載シ。内六百七拾五坪年貢地ニ引、殘多貳千三百貳拾五坪除地ノ分、右之段濟松寺ハ寶泉寺度々遂斷漸天和三亥年寶泉寺境内ニ在之年貢地之畑三ヶ所、并稻荷前之畑二ヶ所、坪ニノ千六百貳拾坪、濟松寺梅堂ハ寶泉寺ハ右兩寺之爲替地取之。依之向後境内三千九百四拾五坪不殘除地ニ罷成シ。御帳面ニ載度之旨、寶泉寺願ハニ付、遂吟味、寺社方帳面書改ハ間、改方帳面も相改ハ様ニ從本多淡路守方申越、貞享三寅年十一月申上、御帳面直し申し。

——除地古跡寺社帳

天徳院

天徳院 境内一部ヲ隣寺清澄寺ニ貸付ス。

市街恢弘時代

吉祥寺末 牛込 曹洞宗 天徳院 一〇三七

東京市史稿
古跡拜領地
一、境内貳千九百貳拾貳坪。

門前町屋小間拾八間壹尺。

右天徳院境内貳千九百貳拾貳坪之内、隣寺清澄寺へ拾六坪半萬治三年より以來借し置由、松平對馬守方より印形之斷手紙を以て申越し、正徳五乙未年九月廿一日相伺、御帳ニ御帳紙仕由。
——古跡寺社帳

〔附記〕 萬治年中起立轉移寺社

萬治年中ノ起立轉移シタル寺社、左ノ如シ。

本所龜澤町略。中

楠木稻荷駒止八幡除地間口三間馬場の東の方有本社九尺四方拜殿貳間ニ壹間半、楠木稻荷社駒止八幡宮と云額を掲く、神主ハ白川家の配下にて梅本大和といへり、萬治年中元祖和泉の時とじ忽て命をうけて社務職とふりしと、そ此頃ハたゞ稻荷のミを鎮座在し、後年駒止橋の側なる駒止八幡宮をも兼帶せべしと嚴命有し時、その地の隔りて事のおろそらふらん事をはゞかり、終り願ひ上て相殿ヲ移し祀ると云、八幡の舊地ハ今御旗本の土奈佐某が屋敷乃内より。

——葛西志

附記
萬治年中
起立轉移
寺社

楠木稻荷
駒止八幡
宮

仙龍寺

仙龍寺 萬治中下谷山崎町ニ起立ス。

京都花園妙心寺末
下谷山崎町
禪臨濟宗 瑞祥山 仙龍寺

一、境内千七十坪東叡山領御年貢地也。
萬治年中開闢御座以內ニ臺門之通り幅貳間半ニ長四十六間。

——文政寺社書上

光照寺塔
頭貞松院
寶樹院

光照寺塔頭貞松院寶樹院 是頃起立シタル者歟。

一、往古當寺塔頭名前御座候分、左ニ略。中
淨土宗 芝増上寺末
牛込藥棚 樹王山正覺院光照寺略。中

貞松院 寶樹院

右貳軒、萬治年中々寶永年中迄名前御座候。
——文政寺社書上

淨土眞宗東本願寺末
乘滿寺略。中

覺明寺

覺明寺 是頃退轉スト云フ。

一、當寺地中覺明寺義ハ、萬治之後ニ退轉之由。
——文政寺社書上

本願寺末 野條山林松院乘滿寺 淺 草不レ唱小名略。中

地覺明寺

市街恢弘時代

寶塔寺

右ノ萬治之後ニ退轉之由、右ニ付開基人等相知不申也。
寶塔寺 品川海岸ヨリ下大崎村ニ移ル。

山王城琳寺末
武州荏原郡品川領下大崎村
天台宗 白雉山慈光院寶塔寺

一、境内御除地惣坪數千八百三拾九坪。

一、東西間數 凡百間餘。

一、南北間數 凡三拾間餘。

一、當寺起立之儀、文龜二年開闢之由申傳、萬治之頃迄、品川海岸今品川洲崎と相唱候。有之候、小寺ニ多法東寺と號候處、萬治年中當所大崎之郷ニ引移

申候。

——文政寺社書上

經王寺

經王寺 開山日慶是年寂ス。

新堀村○武藏國豐郡○中略。

經王寺 法華宗、身延久遠寺末、大黒山ト號ス。開山日慶、明曆四年二月廿三日寂ス。開基ハ名主權四郎カ先祖冠權四郎ト云者ノ由、寛文九年正月二十七日死ス。
——新編武藏風土記稿

市街轉移起立

市街ノ轉移起立シタル者若干有リ。○文政町方書上。

市街轉移起立
天榮寺

市街轉移起立 左ノ如シ。

天榮寺門前 寺院本郷菊坂臺丸山ヨリ駒込ニ移ルヤ、門前町ヲ起ス。

駒込天榮寺門前

一、往古駒込村百姓地ニ有之儀處、天榮寺本郷菊坂之臺カ萬治三子年引地ニ相成、當時之地所拜領仕、其砌カ門前町屋御免被成下、寺社御奉行御支配ニシ、所、其後延享二丑年十二月中町御奉行御支配ニ相成、節之町御奉行御姓名共相知不申也。且永代門前町屋ニ御座也。

一、古名壹本さいかち之辻

但、當時里俗ニ相唱、得共、多分ハ上略仕辻とのミ相唱申也。

右ニ往古大木之さいうち五ッ抱餘之木、其木之樣餘之木ニ異ナリ、故、右木ニ注連結廻し有之、古來カ當所之異名壹本さいかち之辻と相唱、由申傳也。尤古代之木ハ明曆年中大火之節燒失致し、其後さいかちを植、處、享保三戌年大火之節燒失致し申也。且右木之在所カ天榮寺境内之由申傳也。

一、草創人

同町家主 安左衛門

右安左衛門先祖カ、往古駒込村百姓ニ多年代不知當所ニ罷在、大木之さい

市街恢弘時代

ち有之、右木之下ニ多千菜渡世仕由申傳。尤授徳院誠覺俗名齋藤安左衛門真享三寅年八月十八日病死仕、夫々引續只今以青物間屋致し住居罷在。一、草創人

家主 同町 治 左衛門

右治左衛門先祖安左衛門先祖同様ニ多千菜渡世仕罷在由申傳。尤道卯信士俗名土井次郎兵衛寛文三巳年六月十七日病死仕、夫々引續只今以青物間屋致し住居罷在。

——文政町方書上

明王院門前

明王院門前 寺院ノ轉移スル萬治三年ニ在リ。門前町家亦或ハ是頃ニ起立スル歟。姑ク附記スト云フ。

谷中明王院門前

一、御城々子丑之方ニ當リ、拜領町屋之儀を先年谷中清水坂近邊ニ多拜領仕由處、萬治三庚子年御用地ニ付被召上、其節々右之地所拜領仕由、門前町屋之儀を往古々御座由建始メ年限等相知不申。

——文政町方書上

明王院門前

一、右門前町家之儀を先年谷中清水坂近邊ニ多拜領仕由處、萬治三庚子年御用地ニ付被召上、當所ニ多替地被下置。尤町家古來々有之、建初年限等、相知不

申。

一、町内東西廿七間半、南北奥行三間餘。

一、裏長屋貳棟壹ヶ所 間口九間、奥行貳間半。

但、右當時建家無之。

一、四隣 東之方觀智院、西之方感應寺、新門前町、南之方本通寺、北之方同寺境内。

——府内備考

淺草田町壹丁目

淺草田町壹丁目 西側凡百間ノ場所、一時公收セラル。江戸城天守臺工事用ノ砂利掘採場ニ充テラレタルヲ以テ也。

一、淺草田町壹丁目之内西側凡百間程之場所、字砂利場を唱申。右を萬治三子年御城御天守御普請之節、砂利取場爲御用地を被召上、代地之義を山之宿村今戸村之内ニ多被下置由、右御用相濟淺草寺御辰ニ相成由地所ニ付、字砂利場を申傳。

——文政町方書上

田町自一丁目。至二丁目。 略。町内ノ字ニ砂利場ト稱スル地ハ、一丁目ノ西側ニテ、萬治三年御天守臺ヲ再營セラレシ時、砂利取場ノ御用地トナリ、後故ニ復セラ

——府内誌殘編

大塚龍門寺門前 小石川牛天神境内ヨリ大塚ニ移ル。

大塚龍門寺門前

一、右ノ小石川牛天神別當龍門寺持ニ多、右牛天神境内四千六百六拾坪餘之内、明曆三百年八百拾九坪餘御用地ニ被召上、水戸様御屋鋪御圍込ニ相成、
二付、右爲代地萬治三子年四月中大塚之内於當所、八百拾九坪餘之地所被下置、尤天神并別當共如前々御用殘地之方ニ有之、得共、當所茂も龍門寺拜領地ニ付、大塚龍門寺門前相唱申、

一、右門前町家ニ被仰付、起立之年月、宛相知不申、得共、延寶七未年右門前屋鋪地改稻生七郎右衛門様近藤作右衛門様御改、其後元祿元辰年三月中寺社御奉行本多淡路守周様御改有之、由、古來ノ門前町家ニ有之よしニ御座、當時町方御支配ニ御座、

一、町内東西貳拾間、南北六間餘。

一、四隣 東之方小石川村、西之方安藤對馬守様御下屋鋪、南之方小石川大塚窪町、北之方同所同町。

府内備考

中之郷瓦町 是頃家作ヲ免サルト云フ。

中之郷瓦町

一、當町往古武州葛飾郡中之郷村、村田畑ニ多、寛文十戌年中御郡代伊奈半十郎様御檢地ニ御座候、尤萬治年中ノ家作御免之由申傳候得共、古書物類度々之出水ニ多、水腐仕相知レ不申候、然ル處、元祿十丑年中伊奈半左衛門様御掛ニ多、永代賣御免被仰付、町並屋敷ニ相成、正徳三巳年閏五月中町御奉行坪内能登守様丹羽遠江守様松野壹岐守様御支配ニ被仰付候、後町御奉行御代官兩御支配之町屋敷ニ御座候、瓦町々相唱候義、當町ニ瓦師共多く住居仕候、
カ唱來候儀ニ御座候。

一、當町飛地大川端之場所を里俗三軒家々相唱申候、古來中之郷村之内、只今水野出羽守様御下屋敷、細川長門守様場所、元祿十五午年中御用地ニ相成候、砌、引残り人家三軒有之、右地所を御用地ニ洩、其儘御差置ニ相成候場所ニ御座候間、相唱候由申傳候。

一、當町瓦細工起立之儀、年代相知レ不申候得共、中之郷村住居之者共古來田地耕作仕罷在候所、近邊追々御用地ニ被召上、往古之田地等も町並屋敷代地ニ罷成、渡世難成候ニ付、右瓦細工何方ノ相傳候哉、一同河岸地面ニ竈を築、

市街恢弘時代

渡世仕度段先年奉願上御免之上被仰付候段、古老之者申傳候得共、右年代等相知不申候。尤當町瓦師當時之家數拾四軒竈數貳拾八御座候。且瓦土之義と葛飾郡隅田村木下村四ツ木村若宮村邊多賣出し候由ニ御座候得共、瓦師方之相對を以買入候儀ニ付一體村方ニ多土産不熟之惡土を取捨候段、其筋御代官所願濟之上取出し候由、勿論數年來焼出し候瓦之儀故、右村々ニ志限り不申、遠方船廻し致候儀有之、御用瓦等都多無差支渡世仕來候由ニ御座候。尤前書村々之邊瓦土取出し候跡、眞土を以埋坪致候多、年來相立候得、元之如く土性自然と相變候儀、御座候由ニ多、瓦ニ相成候土と無絶間賣出し候由ニ多、別段御免之場所無之儀ニ御座候。

一、町御奉行兩支配ニ多、當時御代官山田茂左衛門様御支配ニ御座候。

一、反別貳町壹反七畝六步。

但、中之郷村惣反別貳拾七町三反八畝貳拾九步之内ニ御座候。

一、武州葛飾郡西葛西領ニ御座候。○中略。

一、川除土手除 長百五拾五間壹尺幅三間、但長之儀と東之方延命寺境と相續、西之方向井將監様御屋敷境迄相續有之候。

北本所出村町

右志町内南之方中之郷元町、同所八軒町境有之候。往古と荒川溜水の節相防候爲之由ニ御座候處、右兩境之町家追々家作建込候ニ付、土手敷上ニ自然大木等有之、追々土崩候義を甚迷惑仕候由ニ多、御願申上候哉、元祿十三辰年中、右土手敷之儀、南北兩町之地主共ニ御預ケ被成候由、本所御奉行様御姓名不知。被仰渡候段、書留御座候。尤右場所と當時竹木刈取候跡度々之出水ニ多、有形相崩候ニ付、町内平均之地面同様ニ相成候得共、家作等と不仕候。

——文政町方書上

北本所出村町 萬治二年元地ヲ收公セラレ、後豎川通ニ代地ヲ受クト云フ。姑ク附載ス。

北本所出村町

一、當町之義と、往古北本所町之内當時場所相知不申。御座候處、萬治二亥年中御武家屋敷ニ相成候ニ付、御用地ニ被召上、其後年月不相知、本所豎川通ニ多代地被下置○下略。

——文政町方書上

〔附記〕 萬治中ノ市街

蓮花寺門前 府内備考ニ、

市街恢弘時代

附記
萬治中ノ市街
蓮花寺門前

蓮花寺門前

一、右門前之儀往古之傳通院領武州豐嶋郡小石川村百姓地ニ以處當寺開基名主安右衛門先祖圖書儀慶安元子年中地頭傳通院に相願年貢諸役免許ヲ請除地ニ相成其後萬治年中門前町屋御免被仰付延享二丑年十二月中町御奉行御支配相成永代門前町屋ニ御座候。

但、門前町屋御免之節之寺社御奉行御姓名并町方御支配ニ相成以節之町御奉行御姓名共相知レ不申候。

——府内備考

三軒町 萬治頃起立スト云フ。

三軒町石川

一、町内起立之儀之草創人之名委細相知不申往古之小日向村畑地ニ御座以萬治之頃長兵衛と申者外貳人名前不知右三人ニ切開家作仕所持仕以ニ付三軒町と相唱以由里俗申傳ニ御座以尤其頃何方に御願申上以哉相知不申以。略。中
一、草創人長兵衛と申者萬治年中之頃住居仕以得共度々類焼ニ古書物等焼失仕相知不申以。同人所持之内西南裏之方地面五拾五坪之處元小日向清

赤坂新町
三丁目

水谷町之内御役名不知戸田五郎右衛門武。直様上り屋敷畑有之以處元祿五申年十二月中御代官細井九右衛門様御拂被仰付同人落札ニ買請其後同十二年九月中屋鋪御改加藤太郎左右衛門成。市様御役所隱宅家作奉願願之通被仰付家作仕三軒町之町ニ籠御年貢上納仕其後町内同様兩御支配相成申以。

——府内備考

赤坂新町三丁目 武家拜領者有リ。

赤坂新町三丁目略。中

一、武家拜領人姓名略。中

是方西之方飛地之分略。中

表田舎間四間五尺裏幅同四間四尺三寸裏行貳拾五間此坪數百拾壹坪四才。

小普請長井五右衛門組
伊澤宗久

右之萬治年中拜領仕以由ニ以得共祖父之代ニ焼夫仕以ニ付委敷義相知レ不申以。

——文政町方書上

赤坂田町三丁目 萬治頃ヨリノ舊家ヲ存シタリト云フ。

赤坂田町三丁目略。中

一、舊家

紺屋 權右衛門店
清 左衛門

市街恢弘時代

赤坂田町
三丁目

右先祖清左衛門儀加州出生ニ多、萬治年中々當町内ニ罷在、紺屋渡世仕、寛文十二年十二月五日病死仕、以前之儀ニ委敷相知不申候、代々同職致當清左衛門ニ多八代相續仕候。

——文政町方書上

南品川本榮寺門前

南品川本榮寺門前 府内備考ニ、

南品川本榮寺門前

一、當門前起立之儀ニ、萬治年中々申傳以得共、享保年中々度々類焼仕、諸書物等不殘燒失仕、申傳而已ニ多、相分不申以。

一、町内北側東西ハ表四間半、裏幅同斷、南北ハ奥行拾壹間。

但、町内持道幅本覺寺大門等相除申以。

一、四隣 東之方南品川宿、西之方蓮長寺門前、南之方南品川心海寺境内、北之方本榮寺境内。

一、町内里俗當町々西之方ニ當リ海藏寺門前邊迄一圓、南馬場町々相唱申以、右々往古林地ニ有之以、砌馬場ニ多有之以哉、申傳而已ニ多、睨々相分不申以。

——府内備考

四ノ橋前栽物市場起立

本所四ノ橋際○市内ニ前栽物市場起立ス。○文政町方書上

四ノ橋前栽物市場起立

四ノ橋前栽物市場起立 本所拓開ノ次第ニ緒ニ就クト共ニ、青物市場ノ起立ヲ見ルニ至レル也。其間屋組織ノ定マレルハ寛文ニ入リテノ事ナリト云フ。

本所茅場町三丁目○中略

一、前栽物市場

右々四之御橋際々西之方町内半町程之處ニ多、市場起立之儀ニ、萬治三子年當所に代地被下置、豎川通四之御橋際ニ多南側ニ有之、日向等宜敷ニ付、東西葛西領々毎朝前栽ものかりき出し、御橋近邊町内往還ニ多賣捌以儀ニ多、其節町内住居之者共方々湯茶等乞以、間振舞遣し、自然々近在百姓々懇意ニ相成、追々右品買出しニ來以者共相増し、前栽物賣捌方多分ニ罷成以ニ付、右湯茶等致世話遣し以者方々舟ニ積來リ晴雨ニ不構賣捌以様相成、町内ニ多右荷物引請以者拾貳人、并隣町深川北松代町壹丁目其外ニ拾三人、都合二十五人有之、右之者共寛文中之頃々前栽物問屋々相唱、右荷物引請口錢ヲ取賣捌、只今以渡世仕罷在以ニ付、爲冥加初荷物參着仕以節々、何品ニ不寄御納屋御役所に御注進申上、御下知相濟不申内々賣捌不致以仕來ニ御座以、且兩御丸様御用土物青物等、神田多町連雀町、永富町右三ヶ所前栽物問屋々被仰

市街恢弘時代

付、御品切等之節、右場所より申來次第、御差支ニ不相成、様有合、品々早速相納來、儀ニ御座、尤右問屋之内、近來他町より町内、引越參、者四人有之、當時町内ニ前栽物問屋渡世仕罷在、者都合拾六人、北松代町壹丁目ニ右問屋渡世仕罷在、者共八人、右仲間都合貳十四人ニ御座、右體古來より前栽物市場ニ多、問屋渡世仕、證據之儀ハ、寶永七寅年五月中、前栽物仲買より取置、取締連印帳壹冊、并享保十八丑年五月、問屋仲間申合連印帳壹冊、寛政元酉年四月中、同壹冊、町内右問屋共所持仕罷在、尤右之外書留、并帳面類之儀、三十九ヶ年以前、寛政二戌年正月二十二日出火、類燒之節、燒失仕、ニ付無御座、

深川北松代町壹丁目略。○中

一、前栽物市場 壹ヶ所

右ニ四ノ御橋際、東之方ニ半町程之場所、毎朝六時、四ツ時頃迄、前栽物市場相立申、右起立之儀、萬治之頃、在々寂寄百姓共、毎朝前栽物賣出シ、罷出、砌、近邊住居之、方ニ相休、湯茶等乞懇意ニ相成、雨天之節、荷物相預ケ、由、其後追々前栽物賣出シニ參、其ものも相増、且、河岸付ニ多、辨利も

宜御座、問、湯茶等世話致遣、し、其の方ニ船ニ多、荷物積送り、晴雨ニ不拘賣捌方多分ニ相成、ニ付、當町ニ多、八人、本所茅場町三丁目ニ多、拾貳人、外五人、都合貳拾五人、之、其、寛文之頃、より前栽物問屋、と相唱、貞享年中、前栽問屋相極、土、之、青物初荷物參着之節、青物御納屋御役所、に御注進申上、御下知無之内、を賣捌不申、様仕來、且、又兩御丸様御用之節、右問屋之内、を相納申、

い、當時茅場町三丁目、拾七人、ニ多、渡世仕、尤、寶永七寅年、享保十八丑年、寛政元酉年、仲ヶ問、取締連印帳、面、其、外書物等、去ル、寛政二戌年正月廿二日、類燒之節、燒失仕、問、巨細之儀、を相知、レ、不申、

一、舊家

當町家持葛西屋
前栽問屋 勘 左 衛 門

右先祖松村勘左衛門儀、武州葛飾郡西葛西領小松川出生、之、の、ニ多、御座、

い、尤古書物等類燒之、砌、燒失仕、問、巨細之義、を相知、不申、得共、申傳之、分、左、ニ、申上、

一、先祖勘左衛門儀、右西小松川村百姓八郎兵衛次男、ニ有之、承應之頃、右八郎兵衛方、ニ同居罷在、當所、に葭簀張水茶屋差出し、日々通、以、渡世致來、處、近在懇意之者、又、を寂寄百姓共、前栽荷物賣出シ、罷出、砌、右勘左衛門茶屋

に相休追々懇意ニ罷成相應之渡世ニ成相成ハニ付明曆年中當所ニ引移住居仕ハ趣ニ御座ハ尤雨天等之節ト荷物預ケ置買人有之ハハ賣遣吳ハ様被相頼夫々賣遣シハハ追々荷物賣捌方も多分ニ相成寛文之頃ハ問屋ト相唱貞享年中前栽問屋仲ケ間相極ハ由申傳ニ御座ハ右勘左衛門儀ト前栽問屋起立之ものニ多正徳五未年二月中住居仕ハ地所買求當勘左衛門迄六代相續仕ハものニ御座ハ。

一、舊家

當町與助店米津屋
前栽問屋 金 兵 衛

右金兵衛先祖ト松山氏ニ多御當地萬町出生之ものニ御座ハ古書物等類燒之砌燒失仕巨細之儀ト相分不申ハ得共申傳之分左ニ申上ハ。

一、右金兵衛先祖ト日本橋萬町出生之者ニ多當町元地深川高橋際深川村ニ住居仕ハ所明曆之頃元地被召上當所ハ代地被下置ハ砌一同當所ニ引移住居仕ハ處近在最寄百姓共々前栽荷物積送りハニ付前書勘左衛門同様寛文之頃ハ問屋ト相唱貞享年中前栽問屋相極前書申上ハ貳拾五人之もの之内ニ多當金兵衛迄六代住居相續仕ハものニ御座ハ。——文政町方書上

茅場町○北本所。中略。

前栽物市場

當所○北本所。茅場町。三町目ノ内、四ノ橋際ヨリ西ノ方半町許ノ地ナリ。

萬治三年爰ニ代地ヲ賜ハリシ時ヲ初ニテ東西ノ葛西領ヨリ朝コトニ時々ノ野菜ヲ荷ヒ來リテ町内往還ニ羅列シ、霽クル事年久シキヲモテ當所ノ者ニ親ミ、竟ニハ諸物ヲ船ニ積テ運送スルニ至リケレハ、寛文中ヨリ前栽物問屋ト稱シ、其野菜ヲ預リテ霽ク者凡テ廿五人ニ及ヘリ。爾後其事ヲ産業トスル者旬季ニ先立テル野菜ハ、必御納屋ニ注進シ命令アルヲ待テ霽キ始ルヲ例トス。元來御膳所ノ御用物ハ、神田多町及ヒ連雀町、永富町ナル問屋共奉リテ是ヲ納ム。若其品ヲ闕ク町ハ其由當所ニ達スルニ順ヒ御用途ヲ辨シ來レリ。今問屋ト稱スル者當町ニ十六人、北松代町一町目ニ八人、凡テ廿四人ナリト云フ。——府内誌殘編

四年辛丑

文元○萬治。四月廿五日改元。寛文元年。正月廿日辛未○辛未。三正綜覽。小石川阿部

正春

豫守。別墅○石川區。小火ヲ失シ、延燒神田橋外内○市內。神田區。麴町區。ヨリ木

挽町銀座

京橋區。二達ス。○變災。篇參照。

萬治四年大火

顛末變災篇ニ記セハ、今單ニ嚴有院殿御實紀ヲ抄シテ、大要ヲ

知ルニ便ズ。

市街恢弘時代

萬治四年大

萬治四年大
火事蹟

廿日○萬治四年正月。○中略。今曉寅刻、小石川阿部伊豫守正春別墅より火おこり、中間町弓町まで焼て去づまりしに、巳刻元鷹師町書院番日下部權太夫定久宅焼失し、折ふし北西風つよく、大手下馬大腰掛壘庫傳奏屋敷評定所鍛冶橋門焼亡し、邸宅は兩典厩并酒井雅樂頭忠清松平伊豆守信綱をはじめ、大小名の數六七十軒、市井は上楨南楨下楨檜物通町箔屋上傳馬南傳馬、樽正材木、南鞘南塗師、大鋸具足鈴木、因幡柳炭壘五郎兵衛、南鍛冶桶弓、北南西紺屋新肴木、挽銀座町等すべて四十二町商屋七百八十七軒橋三焼亡す。

〔附記〕 火災豫防町觸

覺

一、町中よりやかや家ぬり屋の屋根土落申し家根を、早々土にぬらせ可申し。借屋店借等まで無油斷申付、急度屋根塗可申事。
 一、先日鍛冶橋之内火事之砌、川向之町屋へ火ほこり落申し得共、町人共油斷致し家根へ人を上り申し間、已來若火事出來仕は、風下の町人共家持へ不及申、借屋店借等まで銘々家根へ手桶水を入れ上げ人を附置、其ほより参りいへ、無油斷消可申し。人々の身の爲に間少しも違背申間敷

附記
火災豫防
町觸

い。若相背申者有之いへ、御穿鑿之上急度可被仰付事。

右乙丑○萬治四年。正月廿日御觸

——正實事錄

傳奏館評定
所等營造

廿四日乙亥○萬治四年(紀元二三二一年)正月。○乙亥。三正綜覽。書院番大森增長七郎・小姓組千本和隆○兵左衛門。堀頼依○八郎。ニ命シテ傳奏館評定所○市内。○町區。ヲ營造セシメ、書院番松平正直九郎・小姓組岡部久綱○庄左衛門。ニ命シテ大腰掛壘小屋○市内。○町區。ヲ營造セシム。是月○萬治四年(紀元二三二一年)正月。廿日辛未○辛未。三正綜覽。ノ火災ニ燒失シタルヲ以テ也。○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。

傳奏館評定所等營造 左ノ如シ。

○萬治四年正月
廿四日○晴。○中略。

一、大森半七郎○増長。○千本兵左衛門。堀八郎右衛門○頼依。○右三人。傳奏屋敷評定所御普請奉行被仰付之。
 一、松平新九郎○直。○岡部庄左衛門。右兩人、大腰懸壘小屋之御普請奉行被仰付之。
 ——柳營日次記

廿四日○萬治四年正月。○中略。書院番大森半七郎増長小姓組千本兵左衛門和隆堀八郎左衛門頼依は、傳奏館、書院番松平新九郎正直、小姓組岡部庄左衛門久綱は、大市街恢弘時代

傳奏館評定
所等營造事

一、安藤對馬守○重屋敷本多中務大輔○政被下之旨、對馬守ハ替地見立、追ふ
届可申上旨、上意之趣、中務大輔伊賀守○重安藤○元へ雅樂頭被達、老中對馬守○列座二字脱カ佐
倉在番ニ付、伊賀守○重被達之。

——柳營日記

二月四日○萬治四年左馬頭殿御屋敷被召上、爲代松平龜千代上ケ屋敷被遣、爲御
作事料、金貳萬兩被遣之由也。

左馬頭殿今迄之御屋敷廣ク被遣、御作事料是又貳萬兩被遣。

廿六日左馬頭殿家臣新見但馬守招之、松平龜千代上屋敷可被請取之旨、被仰
渡。

——殿中日記

二月三日○萬治四年明四日御用○間兩人家老共可罷出、由御守衆へ申來ル。

四日、下總守○室伊賀守○曾四ツ時登城、常へ御兩殿御屋敷、一所ニ罷出、へ
共、今度之火事ニ付、御間隔り能○付左馬頭様へ之、松平龜千代屋敷被遣、

右馬頭様へハ、元御屋敷を廣ク被進○事、雅樂頭○酒井忠清申
渡、左馬頭様々御使者若狹守○諏但馬守○新登城。

五日、昨日御禮御登城、御供下總守伊賀守兩人も御前へ罷出、雅樂頭取合、御
座之間御對面。

十八日御上屋敷作事奉行美濃十右衛門野呂彌右衛門、柳澤刑部左衛門、被仰
付○。

三月二日、御上屋敷請取、下總守伊賀守罷出、御普請奉行北見常左衛門出ル、庄
三郎引渡、表百十九間、裏口八十二間請取申由也、老中へ伊賀守登城申達。

——曾我日記

四日○萬治四年松平龜千代邸宅收公せられ、代地はやがて給ふべしとて、先造
宅料銀千貫目給ふ、その地は左典厩に賜はる、右典厩は、邸地狹隘ふりとて、近
地を加へられ、兩典厩構造料金二萬兩つゝつかはさる。

——嚴有院殿御實紀

伊達龜千代邸ハ新添江戸之圖日比谷門外ニ、松平陸奥○伊達綱宗ト有ル者、寛文江
戸圖、甲府宰相殿○松平綱重ニ作ル、萬治四年ノ大火ヲ機トシテ轉換シタル也、是年
七月新第成リテ綱重之ニ徙ル。

廿日○寛文元年七月○中略。

屏風二雙、
羅紗障子、
御看三種、
御樽二荷、
但三十間。

上使伊豆守
左馬頭殿○松平綱重。

一、白銀百枚。

一、帷子單物五。

一、同。

一、同四。

一、白銀廿枚。

一、同。

一、同百枚。

母 同 院
義 順 松

一〇六二

諏訪若狹守

新見但馬守

藤枝攝津守

こ や ま

お ち

惣 女 中

右に左馬頭殿新宅今朝御移徙ニ付、爲御祝儀以上使被遣之。

——寛文遺録

甲府殿御館蹟

寛文十年江戸繪圖、今の櫻田御用屋鋪及御廐の邊、おしふへて甲府宰相殿御用屋鋪と記せり。寛文年録、元年辛巳二月四日左馬頭殿に松平龜千代元屋鋪被下之、只今迄之上屋鋪上ル、小判貳百兩貳萬兩の課なるべし。作事料被下之。同年七月廿一日左馬頭殿今朝移徙ニ付、上使伊豆守拔以被進物有之と見へり。按此上屋鋪と云ハ則前の御屋鋪ふり。又龜千代屋鋪の當所なりし事ハ古き

繪圖にも載り。

——府内備考

是時松平綱吉ハ、災前綱重邸在リタル地ヲ添賜セラレタル者ノ如ク、寛文江戸圖館林宰相殿綱吉ト記スハ、御をそんごや「御こさいくこや」ヲ南ニ隣リ、水ノ中務「土井能登」ヲ北ニ隣ル。新添江戸之圖、松平加賀「酒井攝津」及「藤堂大角」ノ南半ニ充當ス。

館林殿御館蹟

寛文十年江戸繪圖、神田橋内今の小笠原大膳太夫屋敷、館林宰相殿御屋鋪と載り、延寶年中の繪圖も同じ、元祿中の江戸繪圖ハ神田御殿とあり、よと延寶八年五月御養君ヲ成らせ玉ひて二之丸へ御移り、の後御明き御殿と成し故なるへし。治世略記、天和元年七月十一日神田御殿拔引せらきて二丸御普請あるに依て、惣奉行阿部豊後守へ仰付らるゝよし見へり。

——府内備考

十八日寛文元年九月○中略。

綱吉卿新宅に移徙ニ付、上使美濃守正則を以、左之通、

御屏風二双、御樽肴二荷三種被遣之。

市街恢弘時代

東京市史稿

銀百枚。

銀貳拾枚。

銀百枚。

一〇六四

御母堂桂昌院に

小山御乳人に

惣女中

本庄宮内少輔

黒田源右衛門

室賀下總守 曾我伊賀守

金田惣八郎 大久保和泉守

杉浦武兵衛

右馬頭殿松平綱吉

御登城於御座之間御對顔金馬代二荷三種小袖二十獻之。

——柳營日記

春附記

〔附記〕 春屋

移徙ノ年代ヲ知ラズ此ニ附録ス。

御春屋

寛文十年江戸繪圖よ始て當所よ御春屋と載せ古ハ今の田安殿御館の邊よありしと見ゆ正保頃繪圖。又當所よ昔甲府殿の御館よして寛文元年櫻田御

殿へ御移徙ありし由ハ正しき記録よ見えとれハ御館蹟へとなく此御春屋立させらせしなるへし。——府内備考

九日己丑年〇萬治四年紀元二三二一年〇己丑三正綜覽 道奉行ニ命シテ近郊ノ新屋營作

ヲ查檢セシム。有院殿御實紀

近郊新屋營作查檢ハ、

〇萬治四年二月九日晴〇略

道奉行

天野孫左衛門〇重時

美濃部一學〇高茂

西山十右衛門〇昌時

深津長右衛門〇正武

右老中列座被相傳之趣江戸近邊ニ新規ニ屋敷構之家屋作事仕儀先年々停止ニ被仰付之今以爲其通之間見廻違背之輩有之を可申付之且又近年新規ニ私として屋敷構之作事仕輩を承届可言上之旨被傳之。

——柳營日記

十一日辛卯年〇萬治四年紀元二三二一年〇辛卯三正綜覽 園部〇丹波國 邑主小出吉親〇伊勢守 其

他屋鋪替有リ廿七日丁未年〇萬治四年紀元二三二一年〇丁未三正綜覽 亦同ジ。〇柳營日記寛政呈請

小出氏等屋鋪替 柳營日記云フ、

市街恢弘時代

一〇六五

近郊新屋營作查檢

近郊新屋營作查檢事蹟

小出氏等屋鋪替

小出氏等屋鋪替事蹟

東京市史稿
○萬治四年二月
十一日雨。

屋敷替被仰付以面々、

下谷筋違橋
明地之内。

小田伊勢守元屋
敷、大手際屋敷共。

幡隨院寺地之内。

同斷。

元屋敷住居割替、
大手際屋敷添被下。

右之通、雅樂頭○酒井清。傳之。

○萬治四年二月
廿七日○雨降、午刻方晴。

神保四郎右衛門○利。

小栗忠左衛門○久。

右兩人屋敷就御用地被召上之、四郎右衛門○小石川築地、忠左衛門○水戸殿屋敷之前空地○多被下以旨、豊後守傳之。

五日○萬治四年
四月○中略。

一、小栗○忠甚左衛門

神保四郎右衛門

吉良義冬
板倉重矩
太田資宗
保科正貞

神保忠利
小栗久俊

右屋鋪去頃被下以ニ付、爲作事料各金百兩宛被下之、老中傳之。

——柳營日次記

忠利○後政利。四郎右衛門。

寛文元丑年二月廿七日居屋鋪御用ニ付被召上、爲替地○小石川築地○多九百九拾坪屋敷拜領仕、同四月五日作事料金百兩被下置。

——寛政呈譜

一、鍛冶橋内御屋敷

下賜 寛永六年月日吉親○小ノ片。

上地 寛文元年三月日吉親ノ片。

一、淺草寺町御上屋敷

下賜 寛文元年月日吉親○小ノ片。

上地 享保十七年三月日英貞○小ノ片。

——子爵小出家○部藩。回答

寛文江戸圖鍛冶橋内北側ニ吉良上野ト有ル者、新添江戸之圖ニハ「小出伊勢」ト有リ。是時吉良氏屋鋪ト爲レル也。吉良氏屋鋪ハ、是ヨリ先小出邸南隣ナルコト、新添江戸之圖ニ見ユ。是時收公シテ鍛冶橋内廣場ト爲シタル者ナル可シ。同廣場ノ西側則チ保科氏邸ニシテ新添江戸之圖吉良若狭ノ西隣タリ。寛文江戸圖

市街恢弘時代

ニハ保科筑前ト記ス。是時割替ニ由リ、多少境界ニ異動有リシ歟。幡隨院寺地ニ移リタル板倉氏太田氏邸ハ、寛文江戸圖不忍池南町家ノ南道ヲ隔テ、東ニ太田ツノカミ、西ニ板倉ホウキト見ユルヲ是ナリトス。

屋敷	町名	坪數	給收	年月
上	湯島天神下	不詳	寛文ノ頃資宗(○太田)ノ片給シ、貞享二年丑三月資直(○太田)ノ片上ル	

右地所不明。資直○太田上收後、佐竹修理太夫屋敷ト成、其後小笠原土佐守屋敷ト成、又永井能登守屋敷ト相成タル由申傳フ。

——子爵太田家尾松。回答

江戸屋鋪圖 改製

十八日戊戌

○萬治四年(紀元二三二一年)二月。○戊戌、三正綜覽。

大目付ニ令シテ、江戸屋鋪圖ヲ

改製セシム。

○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。

江戸屋鋪圖 改製事蹟

江戸屋鋪圖改製 左ノ如ク傳フ、
○萬治四年二月十八日曇、未刻方雪降。

一、江戸中屋敷之繪圖前々、雖在之、所々令相違之旨、相改可圖之旨、大目付中へ豊後守○阿部傳之。
——柳營日次記

十八日○萬治四年二月。付に、府内の圖を改製すべしと命せらる。
——嚴有院殿御實紀

附記、一 材木直段

〔附記、一〕 材木直段

萬治四年丑之二月廿九日

貳割半引之材木直段付之帳

割木筋なし。

- 一、檜長貳間木 五寸角 壹本ニ付拾八匁七分五り。
- 一、同長貳間木 六寸角 壹本ニ付四拾八匁七分五り。
- 一、同長貳間木 七寸角 壹本ニ付六拾六匁。
- 一、同長貳間木 八寸角 壹本ニ付八拾六匁貳分五り。
- 一、同 九寸角 壹本ニ付百拾六匁貳分五り。
- 一、同 壹尺角 壹本ニ付百四十貳匁五り。

——竹橋餘筆

附記、二 伊勢拔參

〔附記、二〕 伊勢拔參

二月ヨリ市民ノ伊勢大廟ニ詣ツル者多カリシト云フ。

一、同年○寛文。又伊勢ハ拔參夥し。

二月○寛文。元文より伊勢宗廟へ、男女參詣する事夥し。

市街恢弘時代

——談海

——武江年表

一〇六九

仙臺伊達氏
其他邸宅轉
換給賜

三月五日乙卯一〇萬治四年紀元二三二仙臺前國城主伊達龜千代〇〇網村

櫻田邸〇市內ノ代地ヲ麻布〇市內ニ賜フ。外ニ是日三〇萬治四年紀元二

及六日丙辰年〇萬治四年紀元二三二八日戊午年〇萬治四年紀元二三二廿

一日辛未年〇萬治四年紀元二三二邸地ノ轉換給賜有リ。〇柳營日記

仙臺伊達氏
其他邸宅轉
換給賜事蹟

仙臺伊達氏其他邸宅轉換給賜 左ノ如シ。

五日〇萬治四年
中略。

伊達龜千
代

松平龜千代〇伊達

一、右屋鋪之代り於麻布貳萬六千坪被下旨伊達兵部少輔宗田村右京亮宗

傳之。

屋敷被召上以付代地於麻布一萬坪被下之。有馬松千代利

有馬松千
代
岡田義政

岡田豐前守〇義

一、於麻布下屋鋪三千六百坪被下之。

小出尹貞

小出越中守貞

一、右麻布下屋鋪三千坪被下之。

六日〇萬治四年
中略。

安藤重博

安藤對馬守重博

一、右上屋鋪差上以付爲代有馬松千代元屋鋪被下之雖然右屋敷之坪數より

狭ニ付於本所下屋敷被仰出以。

八日〇萬治四年
中略。

一、願之通屋敷引替可被下旨、

竹中監物〇重 天野三郎兵衛隆

三雲平左衛門賢

右一組。

松平伯耆守組
藤堂平右衛門次
北條右近大夫組
神保彌兵衛政

是一組右を北條右近大夫駒井右京亮老中傳之。

廿一日〇萬治四年
中略。

一、若狹守元屋敷元鷹匠町意安法印ニ被下之。——柳營日記記

綱村從四位上中將松平陸奥守幼名龜千代綱次郎隱居後上總介七改。

一、同年〇寬文元三月十四日麻布白金臺ニ移櫻田上屋敷替地被下以。

市街恢弘時代

意安

藤堂嘉次
神保長政

竹中重職
天野康隆
三雲成賢

— 寛政呈譜

寛文元年二月三日龜千代が櫻田の上屋敷を甲府中將綱重が住居とすると召上げられ、引料として銀子二千貫目を給せられ、三月十四日麻布白金臺にて替地を與へられぬ。治家記録。是より愛宕下の中屋敷を上屋敷としたり。

— 伊達騷動實錄

伊達氏白金邸ハ、寛文江戸圖、松平陸奥ト有ル者是也。

〔参考〕 伊達氏江戸屋鋪

伊達騷動實錄萬治三年當時ノ仙臺伊達氏屋鋪ヲ舉クルコト、左ノ如シ。

「治家記録慶長六年十月伏見ニ於テ大神君ヨリ公政宗伊達へ、江戸ニ御屋敷

ヲ賜ハルヘキ旨仰出サル。江戸御屋敷、櫻田、愛宕ノ下、芝四箇所共ニ、此年一

度ニ拜領シ玉フヤ、又追々拜領シ玉フヤ、様子不知。寛永十八年五月廿六日

辛丑公ノ御下屋敷召上ラルノ旨仰渡サル。此御屋敷ハ、今ノ増上寺ノ境内

ナリ。此以後替地トシテ濱ノ御屋敷ヲ賜フ。此年霜月下句以後歟。年月不知。

今ノ御上屋敷是ナリ。明暦三年正月十九日壬戌、櫻田ノ御上屋敷及ヒ御本

屋敷、濱ノ御下屋敷、愛宕ノ御中屋敷、四箇所共ニ燒失ス。二月廿二日乙未、薩

摩少將光久朝臣松平大屋敷隣、櫻田ノ御本屋敷ヲ召上ゲラレ云々。廿五日

戊戌、此日江戸御下屋敷御假屋造作出來、嗣君御移徙アリ。五月十四日丙辰

御本屋敷ノ替地トシテ麻布白金臺ニ御屋敷ヲ賜フ。萬治元年三月十七日

甲寅、白金臺新御屋敷差上ラレ云々。五月廿七日癸亥、今度淺府御屋敷差上

ラルニ就テ、品川近所大江村ニ於テ替地御拜領云々。七月五日庚子、麻生御

屋敷、品川御屋敷兩所ニ番人指置云々。同三年三月廿八日癸未、江戸御着濱

御屋敷へ入セラル。廿九日甲申、上使ノ左右アルニ就テ、公早朝上屋敷へ出

サセラル。寛文元年二月三日癸未、櫻田ノ上屋敷差上ラルベシ云々。三月十

四日甲子、淺府白金臺ニ於テ櫻田上屋敷ノ替地拜領シ玉フ。同八年二月朔

日庚午、上屋敷濱屋敷、伊達兵部大輔殿、田村右京亮殿屋敷類燒ス。十二月九

日甲戌、吉辰ニ就テ上屋敷ニ移徙セラル。延寶四年十二月九日丁巳、濱ノ御

屋形へ御移徙アリ。元祿三年八月廿二日庚辰、於本屋敷、伊達安藝殿長屋へ

御首途ニ御出。案、櫻田上屋敷ハ、日比谷門外今ノ公園ノ東北ノ角ニテ、濱屋

敷ハ今ノ新橋停車場構内ノ中央ナリキ。本屋敷ト云フハ今ノ山下門内南

側ニテ、其南隣ハ薩摩邸ナリキ。承應江戸圖ニ、今ノ山下門内山下町一丁目

ノ帝國ホテル、内務大臣官舎ノ處ニ松平陸奥トアリ。本屋敷ト云フ稱呼ハ、上中下屋敷ニ對シテ如何ナル區別ナリシカ、詳ナラズ。愛宕ノ中屋敷ハ、今ノ愛宕下町四丁目壹番地ナリ。承應ト明曆トノ江戸圖ニ、愛宕下屋敷ニ政宗中屋敷トアリ。芝口濱屋敷ニ政宗下屋敷トアリ。扱明曆三年正月燒失後、下屋敷濱屋敷ニ假屋造作出來、嗣君御移徙トアルハ假建築ニテ、里見十左衛門ガ諫言ノ文中ニ、綱宗様御代ニ罷成、間も無御座、萬治元年御濱屋敷唯今之御作事出來、御移被成候トアルハ、本建築ナルベク、當時櫻田ノ上屋敷濱ノ下屋敷兩所ニ屋形アリテ、兩所ニ住セシガ如シ。而シテ寛文元年櫻田上屋敷ヲ召シ上グラレシ後ハ、愛宕下ノ中屋敷ヲ上屋敷トシタリ。此書中ノ事件ノ頃然リ、ソハ寛文八年二月上屋敷濱屋敷類燒ト書キ分ケテアルニテ知ルベク、延寶初年ノ江戸鑑ニ、松平陸奥守綱基少將御やしきあたごの下トサヘアリ、寛文十一年三月凶事アリシ時、嫌疑ノ者ヲ濱屋敷ニ押籠ムル事アレバ、當時主君ハ愛宕下ノ上屋敷ニ住セシヲ知ラル。扱延寶四年十二月濱屋敷ノ屋形へ移徙トアリテ、是ヨリ濱屋敷ヲ上屋敷トシタルガ如シ。前ノ治家記録ノ寛永十八年五月ノ文中ニ、濱屋敷ヲ今ノ上屋敷ナリ

トアル是レナリ。而シテ元祿三年八月本屋敷ニ於テ云々トアルハ、愛宕下ノ屋敷ナリ。愛宕下ノ屋敷ヲバ、藩ユテハ維新前マデ御本屋敷ト稱シタリ。又品川近所大江村ノ屋敷トアルハ、今ノ南品川鮫洲ノ上ナル大井村ノ屋敷ニテ、綱宗此ニ隱居シタルナリ。而シテ後ニ綱村ノ隱居シタルハ、麻布ノ屋敷ナリキ。

維新前マデノ仙臺ノ江戸屋敷ハ、芝口三丁目ノ上屋敷(即チ濱屋敷、今ノ停車場構内)愛宕ノ下麻布仙臺坂、白金袖ガ崎品川大井村、深川仙臺堀(米屋敷、千住橋南ノ七箇所ナリキ、中世ハ、木挽町ニモ一邸アリキ)。

——伊達騒動實錄

町奉行更迭

八日 戊午 ○萬治四年(紀元二三二一年)三月。○戊午(紀元二三二一年)三月。 町奉行神尾元勝 ○備前守。 老免シ、四月十二日 辛卯 ○萬治四年(紀元二三二一年)三月。○辛卯(紀元二三二一年)三月。 新番頭渡邊綱貞 ○半右衛門。 町奉行ニ任セラル。 ○殿有院殿御實紀。柳營補任。寛政重修緒家譜。

町奉行更迭

八日 萬治四年三月 町奉行神尾備前守元勝七十にあまり、衰老せしとして、乞まゝに職ゆるさる。

市街恢弘時代

十二日○萬治四年新番頭渡邊半右衛門綱貞は、町奉行に○下ふり、略。

——嚴有院殿御實紀

町奉行

神尾備前守元勝。

寛永十七辰五月十八日御作事奉行方。
萬治四丑三月八日辭。
萬治四丑四月十二日新番頭方。
寛文元丑七月廿六日千石御加増。
同十六午七月廿三日大目付。
同十三丑正月廿三日大目付。

渡邊半右衛門綱貞。
大隅守。

——柳營補任

元勝○神尾。備前守。從五位下。致仕號宗休。

十五年○永。五月十六日町奉行とふり、十二月二十一日從五位下備前守に

叙任し、○中三月八日○元。寛文職を辭し、二年十二月十二日致仕す。

綱貞○初三綱。内匠。半右衛門。大隅守。從五位下。

寛文六年四月十二日町奉行にうつり、十二月十二日廩米千俵を加増せられ、二十八日從五位下大隅守に叙任す。延寶元年正月二十三日大目付とふり、○下略。

——寛政重修諸家譜

附記、一
旗下土處

〔附記、一〕 旗下土處罰

十二日○萬治四年三月○中略。

一、富士見之御寶藏番有田九郎兵衛組戸田勘兵衛儀、常々身持不宜不作法、其上忌中之由虚言申之、御番等不相勤、剩屋敷二町人借屋仕、遊女等差置之、重々不屈之者之旨番頭九郎兵衛以書付相番頭内藤源藏、深尾八太夫、酒井極之介相達言上之、右之趣被遂穿鑿以處、彌以無紛二付、勘兵衛今日於四屋明行寺切腹被仰付之、爲檢使御步行目付小山太郎左衛門井上三郎左衛門被遣之。

〔附記、二〕 訴訟人附添

一、町中公事訴訟之者ニ差紙名主五人組方へ遣以處、五人組斗り罷出、名主不罷出以間、向後差紙遣以ハ、双方名主五人組可罷出以、縦差紙不越以共、公事訴訟ニ罷出以ハ、名主五人組召連れ可罷越以、名主無之町々前々之通五人組可罷出以、自今以後、借屋之者之出入以ハ、家主五人組此旨相守可申以、若違背仕以ハ、急度曲事ニ可申付以事。

巳○萬治四年三月

右々、三月十八日○萬治四年御觸町中連判。

——正寶事錄

廿二日壬申

○萬治四年紀元二三二一
○壬申三正綜覽

各所城米ノ半ヲ、江戸○武藏國其他

市街恢弘時代

附記、二
訴訟人附

送米江戸輸

二輸送セシム。○柳營日記。

城米江戸輸送事蹟

城米江戸輸送 柳營日記記ニ、

廿二日○萬治四年三月○中略。

一、所々城米之内半分、從當夏十月迄之内日和次第出船、江戸大坂大津に可被相廻之。但於當地淺草之御藏に可相納支。

一、運賃ハ自公儀可被下事。

一、大坂大津御藏に相納儀、右同前事。

此外伊豆守豊後守美濃守領内之八木を右同斷也。——柳營日記

嚴有院殿御實紀ニハ、此日○萬治四年三月廿二日。城主の輩に令せらるゝは、各城蓄米の半額、今夏より十月迄に、風候を待て船に積出し、江戸大坂大津に運送し、府の淺草の倉廩におさむべし、運費はおほやけより賜はるべし、大坂大津の兩廩におさむるも是に同じと也。下有リ。

松平綱重其他屋鋪賜與

廿三日癸酉○萬治四年(紀元二三二一)年三月○癸酉、三正綜覽。松平綱重○左馬頭。別業ヲ麻布○市内麻布區。

ニ賜フ。廿五日乙亥○萬治四年(紀元二三二一)年三月○乙亥、三正綜覽。及四月五日甲申○萬治四年(紀元二三二一)年三月○甲申、三正綜覽。屋鋪ヲ賜フ者若干。○柳營日記。嚴有院殿御實紀。

松平綱重其他屋鋪賜與事蹟

松平綱重其他屋鋪賜與 左ノ如シ。

廿三日○萬治四年三月○中略。

左馬頭殿○松平綱重。

於麻布下屋敷二萬坪被遣之旨、陪臣招之、老中傳達之。

廿五日○萬治四年三月○中略。

御天守番之頭

中山六郎右衛門直○忠

中山忠直

眞野八郎右衛門治○正

右屋敷替之事、可任其意旨、被仰出之。御留守居衆に美濃守傳達之。

五日○萬治四年四月○中略。

石丸石見守○定

石丸定次

飯田三左衛門○重

飯田重成

右屋敷狭ニ付、兩人屋敷之内を以道廣ク成ル故、土屋兵部少輔上ケ屋敷兩人に被下、石見守三左衛門屋敷小屋懸等有之ニ付、爲引料金百兩宛被下旨、老中傳之。——柳營日記

廿三日○明曆四年三月○中略。五味備前守豊直の舊邸を小出越中守尹貞に賜はりしか市街恢弘時代

小栗信由
神保忠利

ば、備前守豊直か子小姓組番頭藤九郎豊吉には銀五十貫目下さる。五日年〇萬治四書院番組頭石丸石見守定次小姓組飯田三左衛門重成小栗仁右衛門信由書院番神保四郎右衛門忠利宅地引かへらるゝにより各金百兩給ふ。

——嚴有院殿御實紀

是ヨリ先二月晦日年〇萬治四ニモ左ノ屋敷給賜アリタリ。

晦日中略。

松平正信

一、松平備前守信〇正屋敷之内道ニ成以ニ付、小栗忠右衛門俊〇久元屋敷被下之。

三浦安次

三浦志摩守次〇安屋敷之内同斷ニ付、其坪敷板倉内膳正矩〇重元屋鋪之内被下

酒井忠綱

之、其上神保四郎右衛門利〇忠屋敷添被下之。酒井内記綱〇忠屋敷同斷ニ付、其

土屋之直

坪敷近隣ニ多添被下之。板倉内膳正元屋敷土屋兵部少輔直〇之被下之。

右ケ條老中傳達之。

小田尹貞

一、小出越中守貞〇尹下屋敷於願地被下之旨、老中傳之。——柳營日次記

松平綱重麻布邸ハ、寛文江戸圖飯倉上杉喜平次邸前ニ、甲府宰相様ト有リ。府内備考ニハ、

甲府御屋敷蹟

甲府宰相殿綱重〇松平御屋敷跡ハ、長阪比左の方ありしといふ承應記云、元年八月十四日長松君へ御下屋敷海手と案ハ濱御殿の山比手事ナらん兩所進せられしとなし。是より承應のころハ此御屋敷の沙汰ハなし。寛文比江戸圖被るに、則ち穴比邊甲府殿御屋布あるよし。この頃をそや賜ひしとあるを延寶延寶至延寶又延寶ら多延寶地延寶たまひしと云。政隨錄云、延寶六年四月三田村飯倉片町麻布狸穴三村三千七百十三坪比地甲府宰相殿御屋敷渡と。又或舊記の内載る所左のことし。

覺

一、高壹石貳斗三升四合武州阿左布領上高輪村之内。

此坪數四百三拾八坪

外百二拾三坪七合畔空地。

二口合五百六拾壹坪七合

右ハ武州阿左布領阿左布村法徳寺徳玄寺寺中坪數五百六拾壹坪七合甲府宰相殿御屋敷并屋敷下屋敷相成ニ付、爲替地右之二ヶ寺被下間從午年高物成可被相除御老中御證文ハ御勘定所ニ差置ニ付如此以上。

市街恢弘時代

延寶七年三月

大柴清右衛門

糸原勘兵衛

武藤喜右衛門

櫻井藤兵衛

能勢武左衛門

青木助太夫

佐野主馬

伊奈半十郎殿

覺

一、高四斗壹升 武州阿左布領
阿左布村之内。

此坪數百拾貳坪。

一、見取田畑貳千八百九拾七坪 同村之内。

外貳千百六拾壹坪六合八勺 畔空地。

三口合五千百七拾坪六合八勺。

右ハ武州阿左布領阿左布村之内増上寺隱居屋敷本光寺千藏寺安寺光隆寺廣照寺々中坪數五千百七拾坪六合八勺甲府宰相殿御屋敷并新屋敷ニ成ルニ付爲替地右之所六ヶ寺被下ニ間從去午年高物成可相除ハ御老中御證文ハ御勘定所ニ差置ルニ付如此以上。

鍛冶橋營造

湯原日記云天和二年十一月廿八日朝四時原町ヨリ出火三田甲府殿御屋布

まミ穴御門の方少しく焼失夜ニ入火鎮ると案ル甲府宰相綱重君承應元年

八月青山と今此濱御殿地此所ニテ御屋布被まいらせられ明弘二年八月十

一日三位の中將ニ任し給ひ其の後又まミ穴此邊ニテ御屋布被賜ふ則此

所ナリかくて延寶六年九月十四日逝し給へり御子宰相綱重君なり綱重君

逝し玉ふ年四月ニ御子綱重を備しませハこの所ニとよミ河原御屋敷の

上ニ又地被そへて進せらるしと云おもふ狸穴此方ニありし御門ハ御

裏門なるへし綱重君寶永元年十二月御養君とならせらるしハ其後

後ハ西北丸御用屋敷と唱へしといふ此此ころ此地被旗下の士等ニ賜ひ

しやその年月被詳しと云江改選志

寛文元年辛丑 ○萬治四年四月廿五日
○改元○紀元二二二一年 五月四日壬子 ○壬子三
○正綜覽 鍛冶橋 ○市
○庄左

町内ヲ營造セシム書院番松平正直 ○新
○九郎 小姓組岡部久綱 ○衛門
○左

奉行タリ ○柳營日記
○院殿御實紀 嚴

鍛冶橋營造 亦是月正月ヲ以テ焼失シタル者トス。

四日 ○寛文元年
○五月○中略

市街恢弘時代

一〇八三

鍛冶橋營造

事蹟

市街恢弘時代

一、松平新九郎直。正 岡部庄左衛門綱。久

右兩人去正月大手腰懸御普請奉行雖被仰付、重多鍛冶橋御普請奉行被仰付之。

——柳營日次記

四日年〇寛文元 小姓組岡部庄左衛門久綱書院番松平新九郎正直、さきに大手門腰掛構造の奉行を命せられしが、重ねて鍛冶橋構造の奉行をも仰付らる。

——嚴有院殿御實紀

十月二日告成授賞スルコト、下文之ヲ記ス。

〔附記〕 雉子橋喧嘩

十五日〇寛文元年 五月〇中略。

一、去ル五日、雉子橋邊於途中、大久保頼母召連浪人、若黨天野三右衛門令喧嘩、頼母從者三四人蒙疵、然共依爲大勢、即時二三右衛門ヲ殺害、件之、三右衛門〇政、天野兵右衛門〇政、次男〇政、小十人組頭鳴田彌右衛門、組天野仁右衛門〇伯父、依之御仕置之儀、老中迄仁右衛門、彦右衛門言上之、達台聽〇忠、右令〇忠、狼藉當人壹人可行死罪之由、被仰出之、命之趣、本多美作守〇忠、大久保荒之介〇忠、嶋田彌右衛門〇時、豊後守通之、右之檢使美作守家來被遣之。

——柳營日次記

本所深川市街轉移起立

六日甲寅〇寛文元年 紀元二三二一〇甲寅、三正綜覽、是頃曩ニ収公スル所ノ各市街ニ代

地ヲ本所〇市内ニ給ス。之ト相前後シテ同拓開地ニ起立シタル

若干市街有リ。〇柳營日次記。嚴有院殿御實紀。文政町方書上。

本所深川市街轉移起立 本所拓開事業ノ一部竣成ト共ニ、復興施設ノ爲メ土

地ヲ收用セラレタル舊市街若干ヲ移スト共ニ、新ニ起立スル市街モ有リタリ。

所謂舊市街ノ轉移ハ、

六日〇寛文元年 五月〇中略。

一、就御用地、去ル頃被召上〇所々之町人共評定所〇吉召寄之、於本庄代地其上引料金銀被下旨、村越長門守〇勝傳之。

一、村松町片町二丁半。間口壹間ニ付金拾兩ツ、被下之。

一、門跡前町片町貳丁。

一、徳右衛門町片町一丁半。

一、下柳原町片町五丁半。

一、新茅場町片町三丁。

市街恢弘時代

本所深川市街轉移起立

一、横山町三丁目。兩國橋道筋。

右五ヶ所、間口壹間ニ付銀十枚ツ、被下之。

——柳營日記

六日五〇寛文元年。此日先に地所收公あり、本所にて代地給ひし市人を町奉行廳にめして、金銀頒布せらるゝ事差あり。

——嚴有院殿御實紀

ト見ユルノ類是ニシテ、文政町方書上其他ニ、左ノ如ク傳フ。

本所花町 門跡前町片町貳町ノ轉移シ來ル者也。

本所花町

一、右町起立之儀、往古神田旅籠町壹丁目前通、當時同所旅籠町貳丁目之場所ニ有之候町屋ニ、門跡前花町々相唱罷在候。右々筋違橋外明地之所元淺草本願寺有之候砌、門前之町屋ニ、香花杯商ひ候故町銘ニ相唱申候。然ル所明曆三酉年大火後、寛文元丑年御用地ニ被召上、爲引料小間壹間ニ付銀拾枚ツ、被下置、本所堅川南側二之橋貳丁程下、當時林町五丁目徳右衛門町壹丁目之所ニ、多代地被下置、則町銘本所花町壹丁目貳丁目々貳ヶ町ニ相分ヶ唱罷在候處、天和三亥年本所御奉行庄田小左衛門利安、様長谷川五左衛門様御懸りニ、本所一圓武家方町屋共御用地ニ被召上、大久保平兵衛様御代官所

本所花町

百姓地ニ相成候ニ付、貞享元子年二月町内之儀も御用地ニ被召上、代地無御座候ニ付、屋敷代御金小間ニ割合被下置、貳町分合金千五拾四兩貳分銀拾三匁八分貳厘頂戴付、屋敷差上、立退申候處、略。下 文政町方書上

花町 起立ハ今ノ神田旅籠町二丁目ノ所ニ在シ町ニテ、門跡前花町ト稱ス。

略。中 明曆三年祝融ニ觸レ、翌ル、寛文元年御用地トナリ、今ノ林町五丁目徳右衛門町一丁目ノ所在ニテ、代地ヲ賜ハリシカハ、是ニ移リテ本所花町ト稱シ、

一、町目二町目ト二區ニ分チシ、略。下 府内誌殘編

花町ハ、三ツ目通の東々、是も堅川の大路ニ添テ、横川の邊まで長二町の町ふり、按テ天和二年此町々奉りし訴訟狀の文々々、此町古ハ筋違橋の外ニ有しを、寛文元年堅川の南岸今の林町四丁目五町目の處ニ移され、移の後さらよこ々へ轉ざられしと云ゆ、訴訟此文左のごとし。

乍、恐書付を以御訴訟申上候。

一、本所御旗本衆に當春御屋敷替被仰出候。本所町中之者共賣買可仕御屋敷方無御座候。及渴命申候ニ付、當春以書付本地を替地ニ奉願候處、頃日御旗本衆に替地被爲仰付ニ付、又御訴訟申上候。私共本地之儀、先年

筋違橋之近所松平加賀守殿前ニ罷在、御役儀相勤罷在ハ處、貳拾貳年以前
元〇寛文御用地ニ被召上、本所南ヶ輪御役町之指口ニ有替地被下置ハ、其内
度々大風満水ニ有、所も困窮仕、永々難儀仕ハ、頃日屋敷御改御奉行衆右之
本地を御檢地被遊、其上近所之町旅籠町之者共を被召出、様子御尋之上、處
々繪圖被仰付ハ様ニ及承申ハ、若佗所へ被下置ハ、拙者共本地ニ有御座ハ
間、御慈悲之上被爲召返、被下置共、又々何方ニ有も宜所替地被仰付被下置
ハ、難有可奉存ハ、以上。

天和二年戊十月

名 本所花町
同 彌次右衛門

御奉行所〇中

又天和二年本所町訴訟狀の中、村松町より奉りし書狀の文、および寛文十一
年の地圖とを參考するに、はじめ本所町を立られし比ハ、緑町五町目此地よ
り此町の邊まで村松町三町目をおかきしごとく、よほどちふまじの
訴狀を左よのほ。

乍、恐書付を以御訴訟申上候

一、當春本所御旗本衆御屋敷替被仰出ハ、節書付指上、替地御訴訟申上ハ、此
度御旗本衆彌御屋敷替被爲仰付ハ、付、重有御訴訟申上ハ、村松町三町之儀
々、御代々御役義相勤、神田筋違橋之前河岸通ニ罷在、貳十貳年以前御用地
ニ被召上、本所北ヶ輪御役町之口ニ有替地被下置ハ、其内度々大風満水ニ
有、困窮仕ハ、處御旗本衆御置不被成ハ、ハ、彌商賣等可任様々無御座ハ、及渴
命申ハ、自然筋違橋之前余町ニ被下置ハ、拙者共本地ニ有御座ハ、間、御慈
悲之上被爲召返、被下置共、又々何方ニ有成共宜所替地被爲仰付被下置ハ、
難有可奉存ハ、以上。

天和二年戊十月

名 本所村松町
同 又 兵衛

御奉行所

葛西志

餘ハ天和上地及元祿轉移ノ條ヲ參看ス可シ。
本所徳右衛門町 所謂片町一町半ノ轉移シタル者、亦轉移後天和ニ收公セラ
レ、元祿ニ轉移賜地シタル町ノ一也。

本所徳右衛門町壹町目

市街恢弘時代

一、當町往古之義、乍恐御入國以來未々三百町ニ相成不申節々之町屋ニ有之、
 略。中 神田柳原和泉橋際只今之龍閑町代地并細川長門守様御屋敷豊島町邊
 ニ罷在_レ所、寛文元丑年六月火除御用地ニ被_レ召上、本所三ツ目ニ多代地被_レ下
 置、尤爲引料小間壹間ニ付銀拾枚宛頂戴仕_レ。
 本所徳右衛門町貳町目

一、町内起立之義を、同町壹町目同様ニ御座_レ。略。下 — 文政町方書上
 徳右衛門町略。中 當町ノ古へハ、神田柳原和泉橋今ノ龍閑町代地ヨリ細川
 長門守ノ邸及ヒ豊島町ノ邊ニ至リ惣テ町内ニ係レリ。略。中 寛文元年其地ハ
 火除御用地ニ上リテ本所三ツ目ニシテ代地ヲ賜ハリ。略。下 — 府内誌殘編

徳右衛門町ハ、林町の東ニ續き、南辻橋の側まで長三町の町ふり。按_レ或書ニ
 天和二年本所上地の事ニ由テ、此町及柳原町より願_レ出せし訴狀の寫あり。
 其文、

乍恐書付を以御訴訟申上_レ。
 一、今度本所御旗本衆御扶持人衆方_レ御屋鋪替被_レ仰渡_レニ付、當春中_レ書

付指上、度々御訴訟申上_レ處ニ、此度又屋敷御改御奉行方_レ神田佐久間町
 名主同淺草見付前之名主共_レ、元柳原明地之繪圖被_レ仰付_レ故、重_レ御訴訟
 申上_レ。神田徳右衛門町同柳原町八町之所_レ前々_レ御役所ニ多御座_レ處、
 二十二年以前_元寛文_年御用地ニ被_レ召上、御替地本所之末ニ多拜領仕罷在_レ。
 其内度々大風満水ニ多町中困窮仕、渡世をも送兼罷在_レ處ニ、彌御旗本衆
 御扶持人衆御屋敷替被_レ仰付_レ故、諸商賣之義_レ不及_レ申上、借屋店借等迄住
 所可仕様_レ無_レ御座、町人共難義仕_レ。神田柳原之明地御改_レ付若他所へ被_レ
 下_レ、我々共本地ニ多御座_レ間、御慈悲之上被_レ爲_レ召返_レ被_レ下_レ、共又_レ何方
 ニ多_レ宜所を御替地ニ被_レ爲_レ仰付_レ被_レ下_レ、難_レ有_レ可_レ奉_レ存_レ以上。
 天和二年戊十月

名主 同 柳原四町目 兵衛 中
 名主 同 長 兵衛 中
 名主 同 四郎兵衛 中
 名主 同 中

同柳原六町目
名主 吉右衛門
同 町 中

御奉行所

是よれそ、此町およひ下よ出ざる柳原町ハ、最初神田佐久間町の邊よ有しを、寛文元年こゝへ移されし之。又此二町のとふらば同しき年本所此町へをり出せし訴狀多し。それらの文よ合せおもへば、此頃實よ本所ハ大變革よて、渡世今のどく繁昌そべき地ともおもそれざりしふらん。其訴狀の全文ハ各町の條よ出せり。又同書よ江戸より本所へ移されし町へ御金を賜ハりし事を此そ。是恐くハ右の訴訟を奉りし後志むらくそぎそひの助力よ賜ハりしふらん。それれをいうにといふよ、天和二年訴訟せし町ハ、村松町・花町・徳右衛門町・柳原町・茅場町・清水町・入江町・新坂町・北横堀町・長崎町・淺草町の數町なりしよ、かの御金を賜ひし條よハ、村松・北横堀・淺草の三町をのぞず。此三町ハ被等が願よ任せられて再び江戸へ返させしゆへふるべし。村松町ハ今も見よ兩國米澤町の近き所とせよ。淺草町・北横堀町ハ何處の地よ返されしやいまと考へぞ。もしくはハ北横堀と云ハ、今の中ノ郷横川町の事よや。然る

がごときハ此町ハはじめの程江戸より移されしよハ何とて、たゞちよ中ノ郷村地を新よ町よ取立られしゆへを以轉地をもゆるされぞ。又御手當の金をも賜ハざりしふるべし。略。○下

——葛西志

本所柳原町 所謂下柳原片町五町半ノ轉移シタル者トス。

本所柳原
町
壹町目

本所柳原壹町目

一、柳原町之儀を、乍恐御入國以來未三百町ニ相成不申節か之町屋ニ多、六丁分ニ相分レ、神田徳右衛門町・柳原土手内、只今之神田・豊島町・新シ橋際御郡代屋鋪邊淺草御門前迄ニ有之ハ處、寛文元丑年六月六丁目之内半町程相残り、其餘を、一圓ニ火除御用地ニ被召上、本所三ツ目横川東西ニ多代地被下置、尤爲引料小間壹間ニ付銀拾枚ツ、頂戴仕ハ、其節、柳原壹丁目之儀を、横川カ西方當時花町之地所ニ多代地被下置ハ、然ル處天和三亥年本所御奉行庄田小左衛門様・長谷川五左衛門様御懸りニ多、本所中一圓武家方町方共御用地ニ被召上、大久保平兵衛様御代官所百姓地ニ相成ハニ付、貞享元子年二月町内之儀を御用地ニ被召上、代地無御座ハニ付、屋敷代金小間ニ割合御金被下置、壹丁目分金六百三十壹兩三分銀壹匁壹分四厘頂戴仕、立退申ハ。略。○下

市街恢弘時代

本所柳原貳町目

一、當町起立之儀を、同所壹丁目ニ多申上ハ通、古來神田柳原土手内ニ有之ハ處、寬文元丑年六月火除御用地ニ被召上、貳丁目之儀を本所三ツ目横川方東之方唯今同所壹丁目之場所代地ニ被下置ハ處、天和三亥年本所中一圓武家方町方共、御用地ニ被召上ハニ付、貞享元子年二月當町之儀を御用地ニ被召上、代地無御座ハニ付、屋敷代金小間ニ割合、御金被下置、當町分合金四百九十壹兩銀三匁九分八厘頂戴仕、立退申ハ。○下

本所柳原三町目

一、當町起立之儀を、同町壹丁目ニ多申上ハ通、古來神田柳原土手内ニ有之ハ處、寬文元丑年六月火除御用地ニ被召上、當町之儀を、豎川南之方三ツ目横川方東、只今之所ニ多代地被下置ハ所、天和三亥年本所御奉行様御懸りニ多、本所一圓御用地ニ被召上ハニ付、貞享元子年二月御用地ニ相成、代地無御座ハニ付、屋敷代金小間ニ割合、御金被下置、當町分合金四百八拾貳兩貳分銀拾四匁七分六厘頂戴仕、立退申ハ。○下

本所柳原四町目

一、當町起立之儀を、同町壹丁目ニ多申上ハ通、神田柳原土手内ニ有之ハ處、寬文元丑年六月火除御用地ニ被召上、當町之儀を、豎川南側、横川方東之方ニ多代地被下置ハ處、天和三亥年本所壹圓御用地ニ被召上ハニ付、當町之儀ハ、貞享元子年二月御用地ニ相成、代地無御座ハニ付、屋敷代金小間ニ割合、御金被下置、當町分合金貳百九十五兩貳分銀九匁六分八厘頂戴仕、立退申ハ。○下

本所柳原五町目

一、當町起立之儀を、同所壹町目ニ多申上ハ通、古來神田柳原土手内ニ有之ハ處、寬文元丑年六月火除御用地ニ被召上、當町之儀を、豎川通北側、横川方東之方ニ多代地被下置ハ處、天和三亥年本所御奉行様御懸りニ多、本所壹圓御用地ニ被召上ハニ付、當町之儀を、貞享元子年二月御用地ニ相成、代地無之ハニ付、屋敷代金小間ニ割合、御金被下置、當町分合金六百貳十壹兩貳分銀拾匁貳分九厘頂戴仕、立退申ハ。○下

本所柳原六町目

一、當町起立之儀を、同所壹町目ニ多申上ハ通、古來神田柳原土手内ニ有之ハ處、寬文元丑年六月當町之内半町程相殘、其餘を一圓、火除御用地ニ被召上、豎市街恢弘時代

川通北側、横川が東之方ニ有、代地被下置ハ處天和三亥年本所御奉行様御懸りニ有、本所一圓御用地被召上ハニ付、當町之儀、貞享元子年二月御用地相成、屋敷代金小間ニ割合、御金被下置、當町分合金五百六拾四兩二分銀四匁六分壹厘頂戴仕立退申ハ、略。下

——文政町方書上

柳原町三丁目・四丁目

柳原町ハ、南辻橋の東ヨリ。略。中古ハ神田佐久間町の邊ヨリ有しを、寛文元年こゝに移されしふり、壹丁目・二丁目及び五丁目・六丁目ハ、豎川を隔てむらひヨリあり。略。下

柳原町壹丁目・貳丁目・五丁目・六丁目

柳原町ハ、北辻橋の東ヨリ、豎川の大路ヨリ添て、長三町餘の町あり。こゝヨリ三丁目・四丁目・のふきゆへハ、せぞよ川のむらひの同町乃條ヲ辨せ。略。下

——葛西志

本所茅場町

本所茅場町 新茅場町片町三町、本所元町尾上町ノ地ヨリ轉シテ本所四ツ目

ニ移ル。舊地兩國橋廣小路ト爲レル也。文政町方書上之ヲ萬治三年ノ事トスルハ、其受命ノ日ヲ指ス歟。

本所茅場町壹丁目

略。上當時尾上町元町之邊替地被下置、住居仕ハ處兩國橋懸リハ節、御用地ニ被召上、萬治三庚子年本所之内里俗四ツ目當時之場所ニ替地被下置ハニ付、町名本所新茅場町壹丁目・貳丁目・三丁目ト相唱住居仕、右茅葭商賣仕罷在ハ、略。下

——文政町方書上

茅場町自一町目、至三町目、

天正十八年御入國ノ頃、今ノ南茅場町ト稱スル地ハ田畝ニテ在シヲ、市塵ニ改メ爰ニ住スル者一同ニ茅葭ヲ鬻キシヨリ茅場町ノ名起レリト云フ。略。中寛永八年今ノ深川御船藏ノ邊ニ移サル。略。中同十二年ニ至リ、略。中今ノ元町尾上町ノ所在ニテ代地ヲ賜ハリ、其地ニ移住セシカ、兩國橋ヲ架セラル、時、再ヒ御用ニ上リ、萬治三年本所四ツ目ニシテ代地ヲ賜ハル。今ノ所在是ナリ。爰ニ商家ヲ營ミシヨリ、町名ヲ新茅場町ト稱シ、町ヲ三町ニ分チ、舊ニ依テ葭茅ヲ鬻ゲリ。略。中

——府内誌殘編

茅場町貳丁目

茅場町ハ柳原の東ヨリ四ノ橋の側まで、是も豎川の大路ヨリ添たる町あり。按古ハ川の向ハ此町のつゞき一町目・三丁目トおろれ。南向茶話云、八町堀の茅場町し、寛政二年御用地ヨリ上られ、今ハ火除地となまじり。市街恢弘時代

往古茅商買の所也、其の後明曆年中淺草及び兩國橋の邊に移されしが、元祿の初じめ再び本庄四ツ目へ移さしむと。今按じ元祿の初移されしと云事誤り、此町も花町柳原町等と同時に本所へ移さしむし、天和二年の訴狀よこえたり、その文左に載せ。

乍恐書付を以御訴訟申上

一、私共町内之儀を當春中書付を以御訴訟申上、先年兩國橋詰ニ多商買仕罷在、處、貳十二年以前寛文元年御用地ニ被爲召上、新川通り四ツ目之橋詰ニ多替地拜領仕、得共場末に罷在商賣無御座、故致困窮迷惑仕、殊御旗本御扶持人衆御屋敷替被成、得え彌及渴命可申と奉存、然所、此度本地を御檢地被遊、由ニ付、御訴訟申上、兩國橋前本地に被爲召返、被下、様ニ奉願、前々御役等相勤申者共ニ多御座、御慈悲ニ右之場所に被爲仰付、被下、いと難有可奉存、以上。

天和二戌十月

名主 本所茅場町 助 左衛門

同 町 中

葛西志

御奉行 所略下

村松町

村松町 神田ヨリ後ノ本所緑町四丁目五丁目ノ地ニ移ルト云フ、横山町三丁目兩國橋道筋ト云フ者はナルヤ否ヤヲ知ラス。

本所緑町四丁目

一、當町起立之儀を、書留メ燒失仕相分り不申候得共、當町を元村松町壹丁目立跡ニ多、緑町五丁目且花町之内半町程之所、村松町貳丁目三丁目立跡ニ有之、右村松町之儀元神田ニ罷在候所、寛文元丑年御用地ニ被召上、當所ニ多代地被下置、其後天和三亥年本所中一圓武家方町屋共御用地ニ被召上候ニ付、貞享元子年右町之儀も御用地ニ相成、橋町續當時之場所ニ多代地被下置候。
略下

本所緑町五丁目

一、右町往古之儀を、同町四丁目ノ申立、通同様ニ御座、尤當町を、古來村松町貳丁目立跡ニ多、略下
文政町方書上

南本所瓦町 南本所石原町書上ニ、萬治三子年中右御用地ニ相成、地所館林様御藏鋪ニ相成、御年貢米并御切米運送船數多出入有之、ト有リ、瓦燒ヲ禁セラレテ轉移シタルモ、是頃ニ在ル歟。

南本所瓦町

市街恢弘時代

南本所瓦町

一、町内之儀を、往古々寛文九酉年迄南本所石原町續キニ多、孰は瓦職分致し罷在ハ處、同所之内ニ御藏屋鋪館林様御藏屋鋪之由御座ハニ付、瓦焼立儀御藏近所ニ多難相成旨其節本所御奉行徳山五兵衛○附箋「甲府ハ誤リニテ、石原町書上ニ館林様御藏トアリ。」様馬場三郎右衛門○重政様被仰渡ハニ付、其節地主六人之者共儀、御入國以來同所ニ多商賣致シ來リハ義ニ有之處、商賣御差留ニ相成大勢之者共及、渴命難儀仕ハニ付、御藏ニ御構無之場所ニ多屋敷被仰付ハ様に同年御評定所ニ御訴訟申上、則本所源森橋東之方ニ多地所奉願、町並御年貢諸役等相勤可申旨奉願ハ得テ、願之通屋敷被下置ハ。其砌之御鳥見方ニ多家作御改之節ニ御座ハニ付、家作仕度段奉願ハ得テ、右屋鋪之儀を瓦商賣致ハニ付、町屋鋪ニ被下置ハ間、家作御改申上ルニ不_レ及由被仰聞ハ。其後追々細工家并借家等相建ハ處、右之内地主共四人所持之地面、元祿六酉年中御用地ニ被召上、○當時水戸様御藏屋鋪地所之候、翌戊年中堅川由ニ被召上、當時水戸様御藏屋鋪地所之候、翌戊年中堅川通北松代町續ニ多、何跡ニハ哉、河岸付五反五畝十四步之場所代地被下置ハ。且残り二人之者共地所之儀を、其後船入堀御材木置場ニ相成御用地ニ被召上、○船入堀御材木置場之儀、場所相知不申ハ。元祿九子年中屋敷替地奉願ハ處、前書同町代地續ニ多

代地被下置、右兩所共南本所瓦町々相唱、永代賣御免之地所ニ有之ハ處、同年初多家作御改之節譯存不申、元來町屋家作御免之段不申上、家作御改場ニ相成ハニ付、寶永元申年中屋鋪御改赤井六兵衛○盤様阿部甚三郎○正美様御勤役中奉願、永々家作御免之町屋ニ被仰付ハ。且河岸地面之内幅貳間長八拾六間五尺九寸、寶永貳酉年堅川御浚之節御用地ニ被召上、汐除ヶ土手敷ニ相成、享保十七子年九月中居地面裏通ニ多幅貳間ニ八拾六間五尺九寸、右之代地被下置、正徳三巳年中々町御奉行松野壹岐守○助様坪内能登守○定様丹羽遠江守○長様御勤役中町方御支配ニ被仰付、地方之儀を御代官所御支配ニ御座ハ。

一、里俗唱之儀、町内西之方北松代町四丁目より東々中之郷五之橋町邊迄を五ツ目々相唱申ハ。此儀を四之橋々逆井渡場邊字六之橋々之間故、右之通相唱ハ儀々奉存ハ。

一、汐除堤 幅貳間

但、町内持分長凡八拾六間五尺九寸

右々寶永二酉年中堅川御浚之節御築立ニ相成申ハ。尤其節御掛御姓名之儀

市街恢弘時代

書留無御座相知不申也。且又其後町内ニ材木問屋等商賣之者共罷在、竹木河岸揚仕也。ニ付、右堤之儀を自然と平均地ニ相成也。ニ付、先年方町内往還地高二仕、汐除ケニ致來り也。

一、町御奉行御代官兩御支配之場所ニ多、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座也。

一、反別之儀を八反五畝貳拾四步。

高拾石三斗壹升貳合。

但、南本所町惣高貳百六拾九石八斗七升四合之内ニ御座也。

一、領名之儀を武州葛飾郡西葛西領之内ニ御座也。

一、御檢地之儀を見取場町並屋鋪ニ多、享保十七子年九月中、筥播磨守様御改御座也。

一、瓦竈員數、前々之儀を不相知也。得共、文政九戌年中迄町内瓦師利左衛門瓦竈梵申也。其後相止、當時瓦職之者一向無御座也。

瓦町 當町起立ノ初ハ、略。○中石原町ニ接シタル地ニシテ、瓦ヲ製スルヲモテ産業トナス輩居住セリ。然ルニ寛文元年館林家ノ藏屋敷ヲ建ラル、ニアタ

リ、其ホトリニテ瓦ヲ燒カハ遂ニハ失火ノ過チアルヘシトテ此業ヲ停止セラル、ノ旨、本所奉行徳山五兵衛馬場三郎左衛門ヨリ沙汰ス。サレト御入國ノ砌ヨリ當所ニテ其業ヲ爲ス事久シケレハ、今俄ニ禁止アリテハ、多クノ者共飢渴ニ及フヲモテ、源森橋ヨリ東ノ方ハ藏屋敷ニ程遠キ場所ナレハ、是ヲ替地トシテ賜ハランニハ、町並ノ年稅諸役ヲ勤ムヘキ旨ヲ愁訴ニ及ヒシカハ、此事ヲ許可セラレ、今ノ地ヲ賜ヒシヨリ、此頃御鳥見ノ役ニテ家作ヲ改ムル事アリシカハ、家居ヲ營ミタキ旨ヲ乞ヒ申ス時ニ、瓦ヲ造ルヲモテ産業トスルカ故ニ、町屋敷トテ賜ヒシ地ナレハ、今度改テ家作ノ願ニハ及ハサル旨ノ令アリ。仍テ此地ヲ有セル六人ノ者、其名ヲ傳ヘズ。瓦ヲ造レル小家ヲ營ミ、其他尙家屋ヲ建テ貸屋トセシカ、略。○下

府内誌殘編

南本所元瓦町 亦萬治中轉移ス。

一、町内之儀を起立、南本所村之内百姓町屋ニ多、萬治年中迄石原町近邊ニ住居仕也。由尤右跡當時何處之地所ニ有之也。哉相知不申也。得共、古來ハ瓦職分仕來り也。其砌御藏屋敷御取建有之、并武家方御屋敷等ニ相成也。ニ付、日々瓦燒立也。儀遠慮ニ多、渡世後相成兼申也。ニ付、隔り也。場所ニ地面引替之儀